
水の砂漠の魚たち

鷲生 智美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水の砂漠の魚たち

【Nコード】

N8874V

【作者名】

鷺生 智美

【あらすじ】

高校生の光一が目覚めると、辺り一面、遠浅の海が”水の砂漠”のように広がっていた。岸边に辿りついた光一は、そこで暮らしていた少女にやや強引に勧められ、「新しい暮らし」を求める旅に出る。しかし二人の旅は、この世界を統治する帝国の中枢部で十七年前に起きた愛憎劇に決定的な影響を及ぼすことになる。帝国の平和のために光一に課された試練とは……。 （完結済みの草稿があります。一章ずつ推敲して木曜日か金曜日にUPします）。

ブローグ

ぴちゃん——。

水の音が僕の耳を叩く。

ぴちゃん——ぴちゃん——。

その音は規則正しく、繰り返し僕の耳を叩き続ける。

「……っ！」

眼を覚ますと同時に、僕は反射的に手をついて頭を起こした。僕の両手は水底を這いつくばっていた。その水底から、3・4cm位の僕の手首の辺りの高さで、水面が波打っている。僕は上半身を起こし、両手で髪を後ろへかきあげ、濡れた顔を撫でて滴る水気を拭いた。僕は浅瀬の中に倒れていたらしい。

僕の周りには何もなかった。首をせわしく回してまだ見ていない方角を探すが、何も見つけることはできない。僕は果てしない水平線に360度取り囲まれていた。まるで水の砂漠の真ん中にぽつんと取り残されてしまったかのように。

僕は立ち上がった。つま先で立って遠くまで見渡す。それでも僕には薄紫の空と、ところどころ浮かぶ汚れた綿のような灰色の雲と、それを映す水面が作る水平線だけしか見えなかった。

泣きたいのだけれど、涙を流す余裕もなく、僕はとにかく歩き出す。歩き始めれば何か局面が変わってくれることを祈りながら。けれども、状況は何一つ変わらなかった。歩けども歩けども何も見えてこない。

僕の混乱は増していく。ここはどこだ。どこへ行けばいいんだ。どうやったら帰れるんだ。僕は走り出す。バシャバシャと足首の辺りで水が撥ねる。けれども状況は何一つ変わらない。僕は、浅い海の中に独りぼつんと立ち止まった。

ばちゃん――。

僕は水底に腰を下ろした。寒くも暑くもない。何も無い。寒さや暑ささえ。あるのは、浅い海と薄紫の空だけ。僕の頭の中にも何も考えが浮かばない。いったいここはどこなのか――。

誰か。ぼつりとその言葉が浮かんで僕は弾かれたように再び立ち上がった。誰かいらないのか。誰か僕に教えてくれる人はいらないのか。

とにかく誰か人をさがそう。僕の心にようやく形をもった目標ができた。ここが海なら、しかもこんなに浅いなら、そう遠くないところに岸があるはずだ。そうきつとあるはず。僕から見えないだけで。

僕はようやく波の行方を観察できるだけの冷静さを取り戻した。波は確かに一方から来て一方へ押し寄せている。そうだ、この波に従っていけば岸にたどり着けるはずだ。僕はさっきまでと違って、ちゃんと方向というものを定めて歩き始めた。

あるのは波の方向だけではなかった。時間の流れもちゃんとあるようだった。薄紫色の空の端から墨のように黒い色が流れ出して来ている。日が沈み夜が訪れるらしい。やがて一面暗くなり、降り注ぐような星空が現れた。月はなかった。存在しないのか隠れて見えないのかはわからない。

とにかく僕は岸へ向かって歩き続けた。眠ろうなどとはこれっぽちも思わなかった。波と共に歩かなければ——僕はそれ以外のことを考えないようにただ足を前に動かした。一時間か二時間か、あるいはそれ以上の時間が経っているのに浅瀬が続くばかりで岸は見えてこない。でも、そのことも努めて考えないようにしていた。

僕の斜め後ろが明るくなっていくようだ。でも僕はそちらの方を見ない。ただ足元の波を見つめてそれと同じ方向を目指して歩いていく。空腹だとも思わなかった。僕はただただ誰かに会いたかった。だからひたすら歩いていく。

夜が空け切ったころ、やっと遠くに何かがあるように見えた。僕は走り出した。駆けて駆けて、それが見間違いではなく陸の影であることがわかった。——だのに僕の足はそこで動くのを止めてしまった。がくりと膝をつき、僕はまた再び海の中に崩れ落ちる。行かなくちゃ。行けば誰かに会えるかもしれないんだから。動かなきゃ。

でも、もう僕の身体は限界だった。

ぴちゃん——ぴちゃん——。

僕の耳を洗う、規則正しい波の音。その音を聞きながら、僕は再び眠りの底に引きずりこまれていった。

海から来た者

光一が眼をさますと、寝台の脇に長い髪の少女が座っていた。寝台の横に窓があつて彼女はそこから外を見つめていた。

横顔しか見えないけれど、その少女はとても美しかった。ふわりと軽くウェーブの掛かった栗色の髪。一本一本がとても細そうで動けばさらさらと音をたてそうだ。そして、それに縁取られる顔の肌は陶磁器のようなきめ細かな乳白色。高すぎない、けれどずっと筋の通った鼻がツンと窓の外に向けられている。唇はふっくらと珊瑚色をして——でも、今は固くきつく結ばれている。

そう。彼女の顔は各パーツの一つ一つが美しくそのバランスも完璧。全体に日本人より彫が深めで、よくできた西洋人形のように可愛い。しかし、決して彼女から人形のような印象は受けないのは、彼女の表情とその瞳の色のせいだ。

彼女は口を固く引き結び、そして美しい造作の瞳にとても強い色を宿している。まるで眼前に彼女の敵がおり、それと対峙しているかのような緊張感に満ちている。

そしてその瞳の色は——どうみても、深い赤色なのだ。まるで赤ワインのような。こんな色の瞳の人間なんて見たことがない。外国人にだって、青や緑はいてもこんな瞳の色の人なんていないだろう。

いったい君は誰——。そう光一が訊こうとしたその時、光一の視線に気付いたのかその少女は振り向いた。そして眼光鋭く光一をしばらく値踏みするかのように見つめていた。

「元氣そうじゃない」

整った形の大きな目を一つ瞬きさせると、彼女はあっさりとした口調で言い、立ち上がった。そして扉を指差す。

「じゃ、あつちの部屋で食事して。どこにも傷はないし、お腹が膨れて一晩寝れば大丈夫でしょ。それなら明日、旅に出発できるわね？」

「あ、あの……」

光一には何がなんだか分らない。今日にし耳にしているのが夢か現実かさえわからない。ただ、さっきから足がもの凄くだるい。浅い海の中を一晩掛けて歩いてきてやっと陸についたことは、今直面している事実と関係しているようだった。

で、ここはどこなのだろう。そして、この女の子は僕を助けてくれたんだろうか。それにしても、あまり僕に関心なさそうだ。敵ってわけでもなさそうだけれども。聞きたいことはいっぱいあるのに上手く質問が出ていない。光一はまどろっこしい思いでやっとう口に出した。

「あのう……。ここはどこ？ 君は誰？」

「知る必要ないわ」

予想外の答えに光一は再び混乱する。

「あなたは『海から来た者』なんですよ」

「え？ ああ、確かに僕は海から歩いて来たけど……」

「じゃあ、良かった」

彼女は初めて笑顔を見せた。

「私ずっと『海から来た者』に会いたい、って思ってたのよ。願いが適ってよかったわ。さ、食事して」

光一以外にも「海から来た者」という人がそれなりの数存在するような答えで、光一は少しほっとする。それでも、まだいろんなことが分らない。ただ、この少女は光一に積極的に説明する気がなさそうだと、いうことは光一にも分かった。

「お母さん。『海からきた者』が目覚めましたわ」

少女は扉を開けて向こうの部屋へ、こう声を掛けながら出て行ってしまった。光一も慌てて後を追う。

隣の部屋にはカマドがあり、そのそばの机や壁にいろいろ道具がぶら下がっていて台所に該当するスペースのようだった。部屋中央には食卓らしい大きな机があって、お椀にスープのようなものが入っている。そして食卓の傍には女の人が立っていた。この女性も栗色の髪だけれども、瞳の色は常識の範疇のこげ茶色だった。そしてやはり色が白く、外国の人のように見えた。

「お母さん。やっぱりこの子は『海から来た者』よ。海から歩いて来たって自分で言ったもの。異世界から来た者に間違いないわ」

——異世界？

彼女が光一を異世界の者だと言うなら、光一にとってこの少女も異世界の者だ、ということになる。

光一は辺りを見回した。窓の外にはどこまでもどこまでも続いていく海。それがどこまでもどこまでも深くならず遠浅であることは

自分がよく知っている。海のほかには砂浜。これも砂浜だけで人家が見当たらない。日本にこんな場所あるだろうか。あったとしてもごく限られた場所だけだろう。

そしてこの人たちはどうみても日本人じゃない。それどころか、娘の瞳の色はこの国の人間にも普通にはあり得ない色だ。

大体僕は日本の自宅の近くにいたはずだ。自宅から海まで三十キロ以上ある。意識を失った理由がなんであれ、意識を取り戻したら海の中にいた、なんてことはありえない。何かとんでもない事態が生じなければこんな風に世界が変わるわけが無い。

確かに自分は異世界に來たと考える方が、そうでないと考えるより理に適っている。でも……。それなら一体ここは何処なんだ？僕はこれからどうなるんだ？ 光一は、自分の頭の奥が白く冷たくなっているのを感じ、眩暈で崩れ折れそうになるのをこらえた。

旅への誘い

「ともかく、食事をお食べなさいな」

母親が光一に食卓につくよう促した。

「あ、有難うございます。……でも、僕あまり食べる気になれないです」

「きつととても動転しているのね。でも、少しでも食べれば気持ちも落ち着くかもしれないわ」

思いやりの箸った温かい口調だった。光一が席に座ると、この母親も共にテーブルについた。

味の薄いクリームシチューのような、乳で野菜と肉を茹でたものを口に運びながら、光一は娘の方が答えてくれなかった質問を母親に尋ねてみた。

「あのう。ここは一体どこなんですか」

「ここは、『土の国』の『砂浜の村』よ。『煉瓦の街』から遠く離れた……。でも、『海から来た者』に意味がある答えではないでしょうね」

「ええ」

確かに光一が聞きたいのはそんなことじゃない。

「いい？ でもここが『砂浜の村』だってことは旅に出たら忘れてよね」

娘の方が光一に向かって釘を刺すように言った。

「僕は旅にでるんですか？」

さつきからこの娘は光一と旅に出ることを前提に話を進めていく。けれども一体どこへ、何をしに行く旅だというのだろう。

「ええ。貴方は自分のいた世界に戻りたいでしょう？」

「それは……まあ。でも、ここはどこ……ええっと、つまり僕がいた世界とどういう関係にある場所なんでしょうか？」

母親が優しい笑みで答えてくれる。

「違う世界なのは確かなの。こちらの世界に時々貴方のようにやってくる人がいるわ。皆海から歩いて来るの。そして『海の源流』までさかのぼって、そこから元の世界に帰って行くのよ」

「帰れるんですか？ その『海の源流』ってところに行けば」

「ええ、そうよ。大丈夫。帰ることはできるわ」

「帰りたいでしょ。ね？ だからあなたは私とコウトへ行くの」

母親の話で見えかけていたものが、娘の話でまたよくわからなくなる。コウト、って何なんだよ。

「ナイア、この人は自分の住む世界と全く違う世界に今来たばかりで何もわからないのよ。もっと順を追って説明しないと」

娘はナイアという名前らしい。母親はナイアに注意すると再び光一に説明を始めた。

「あなたの世界がどのようなところかわからないけれども、時々――そうね、四、五年に一度くらいと言われているわね、こちらの世

界とは違う世界から海を歩いてやって来る人がいるそうなの。私たちがはそういった人を『海から来た者』と呼んでいるわ」

「はい」

「それから、さっき私はここを『土の国』といったわね。この『土の国』は、リヴァイエ帝国に属しているの」

「リヴァイエ帝国……」

「『海から来た者』は皇帝の住む皇都に行くように決まっているわ。皇帝も貴方たち『海から来た者』と会いたいと思っていらっしやるから。そして、皇都にある『海の源流』から元の世界に戻ることができるの」

皇都——ナイアが言ったコウトというのがこのことらしい。

「だから、『海から来た者』と、その者を案内する人間は、許可なく国境を越えて旅をすることができし、その間の宿や使った乗り物の費用も掛からないの。後から帝国府が立て替えてくれるから」

「つまり、僕と僕の案内人はタダで旅行が出来るということですか

？」

「ええ」

光一は初めて緊張のとれた顔をして、ナイアに向かって言った。

「そうか。それで、君は僕と一緒にタダで旅行がしたかったんだね」

「タダ、っただけじゃないわ。無許可でできるのが助かるの。とにかく、私も旅が出来るし、あなたもおうちへ帰れる。貴方にとっても私にとってもいい話でしょ」

「あ……」

光一が何かを思い出した顔をした。そして少し困った顔で視線を机にさまよわせ、考え込む。そして、顔を上げて、母親に真剣な声

で持ちかけた。

「あのう。ここに残る、っていう選択肢はありますか？」

母親は返す言葉が見つからない様子で、光一を驚いて見つめている。ナイアも一瞬呆けていたが、大きな声を出して言った。

「ちょっと、何それ？ あなた家に帰りたくないの？」

「家には……帰りたいけど……。元いた世界に帰りたいかと言われると、ちょっと違うかな、って。絶対帰りたくないってわけじゃないんだけど……」

「どうしたいのよ？」

「だから……、もうちょっとこの世界のことを知って、こっちの方が良かったらこっちに居ようかなと思うんだけど。あの……ダメですか？」

母と娘は顔を見合わせた。両方の顔に困惑の表情が浮かんでいた。

浜辺の者

母親はしばらく言葉を探すように沈黙した。そしてしばらくしてから光一に尋ねた。

「貴方、お名前は？ ええと、人に名前を聞く前に私から名乗るべきね。私の名前はマイア、そしてこの娘がナイア」

「あ、どうも。僕の名前は、光一です。小林光一です」

光一は軽く頭を下げて自己紹介した。

「コーイチ、変わったお名前ね。あくまでこちらの人間からするとだけれども。そのお名前は貴方のご両親がつけてくれたのでしょうか？」

「はい」

「きっと愛情を込めて選んでくれた名前だと思うわ。貴方はご両親に会いたくないの？」

「会いたい、会いたいです」

光一の目に涙が浮かぶ。でも、それよりも――。

「でも、僕、学校でイジメにあって……。親には隠してるんです。きっと心配すると思うから。でももう僕……。もう……。僕、前から……前からこの世から消えたい、って思うことがあったんです。だから……。だから、こうなってちょうど良かったのかも……」

「イジメ？ 何それ」

とナイアが尋ねた。

自分の受けているイジメを思い出そうとして、光一は自分の頭の奥が冷たく縮こまるのを感じた。いつものアレだ。学校の教室でクラスメート達が、まるで光一など存在しないかのように振舞うときに、光一は所在無さと同時にいつもこの頭の奥が冷えるような感じを味わう。

彼の通っている高校の教室に、彼の居場所はなかった。

子供の世界では小学校の半ば頃から教師の見えない所で棲み分けが始まる。見た目がカッコよく、実際モテて異性との話題が絶えないグループ。学業優秀で試験での順位を気にするグループ。このグループほど優秀ではないけれど、それなりに成績も良く試験の順位も中くらい、そして成績同様何事においても無難なところに落ち着いてじつと地味に棲息しているグループ。それとは別に、自分の好きなものの世界にとっぷり入り込んで、同類たちと学校で集まっている「オタク」グループ。クラスはこういったグループに分かれていて、そして大体この順番にヒエラルキーというものが存在する。

光一はそのどれにも入ることができなかった。中学までは、何事にも無難に振舞う地味なグループに所属していた。今彼が通っている高校でもその気になっていればこのグループに所属することが出来ていたのかもしれない。

光一は高校入学と同時に東京からこの街に引っ越してきた。父親は大手企業に勤める、いわゆる「転勤族」だった。会社のことは何も話さない父だったが、今回の人事には不満があったようで「都落ち」などという言葉を口にしたのを光一も聞いたことがある。

光一の心の中にもどこかで、自分とこの街で生まれ育った生徒とは異質なのだという気持ちがあったのかもしれない。四月の桜の頃、

新しい制服に身を包んだこの高校の生徒たちが、生存競争でもするかのような勢いで仲間づくりをする中で、光一はどうにもそんな気になれずぼんやりと過ごしていた。

「ねえ、アドレス教えてよ」

「いいよ。お前のもな」

桜が散ると同時に、教室のそこかしこでそんな遣り取りと、ケータイを付き合わせる光景に光一は出くわした。その度に彼は自分のポケットに入っているケータイが急に重く感じられ、そして頭の奥に冷たいものを感じた。

僕にも教えてくれよ。光一がそういえばアドレスだけは教えてくれたかもしれない。けれど、そうしたところでメールが送られてきたかどうか。多分、送られることは無かっただろう。

そのうち、クラスメート達の学校の中での関係は、学校の外でのケータイを通じた交流関係の一部になってしまった。学校の中でしか彼らと顔を合わせない光一には、もう立ち入る隙は残っていなかった。

一人ぼっちでもいいじゃないか。光一は一人ぼっちになりたい訳ではなかったが、なったらなつたで仕方ない、くらいに考えていた。

しかし事態は彼が思うよりもっと深刻だった。「グループに属することができない」ことは何か重大な欠陥だったのだ。光一は単に「一人で居る人間」、ではなく「人間としての能力を欠くモノ」として扱われるようになった。

たいていにおいて、彼はその存在を無視された。周囲のクラスメ

ート達は光一を見えない者のように扱う。彼が傍にいたって全く目もくれない。たまたま転がっている石をよけるかのように彼の横を通り過ぎる。彼らの方から話しかけることなど全く無く、彼が何か話しかけても風の音のように聞き流された。

彼は毎日、頭の奥の冷たさを持て余しながら、遠くから聞こえてくる教師の指示や始業終了のチャイムの音に無表情に従うことで、ただただ時間を潰していた。

とはいえこの時間つぶしはなかなかの重労働で、彼はこういった日常を耐え忍ぶだけでその日のエネルギーを使い果たしてしまう。だから彼に未来について建設的なことを考える余裕はなかった。ただぼんやりと、頭の中に絶望という言葉がちらつくだけだった。

時折、イジメらしいイジメも受けることがある。皮肉にもそれは彼を本当の絶望から少しだけ遠ざけてくれる。

クラスメート達が珍しく声を掛けてきたと思ったらそれはたいいて無理難題だ。そして光一が困っていると殴ったり蹴ったりと暴力を振るう。身体は痛い。けれども彼の胸の中に微かに喜びが起きる。それは、自分は誰にも見えない幽霊ではなかったのだと安堵する気持ちだ。

誰からも無視されていると、光一は、果たして自分という人間は存在するのだろうか、という焦燥感を感じる。ほんの時たまでも、そしてそれが悪意や蔑意でも、自分になにかしらの感情を向けられていることは、完全な無視よりも救いがあった。

——でも、そんなの救いでも何でもない。救い、というのは今のようなシチュエーションのことをいうんだ。と、彼は今ナイアの家

の台所で椅子に腰掛けながら拳を握った。どうしてだかわからないが、自分は異世界に来たのだ。これはチャンスだ。

「だから、僕は……僕はこちらの世界がそんなに悪いところじゃないなら、こちらの世界に居たいんです」

光一はナイアよりも、主に温厚そうなマイアに向かって話をしていった。ところが、先に口を開いたのはナイアの方だった。

「あなたの言うこと、私よくわかる。苛められているのって嫌よね。わかるわ。でもそれなら『砂浜の村』にいても解決しないわよ。やっぱり旅をしないと」

光一には意外な成り行きだった。この気の強そうな少女が、「イジメ」にすんなり同情してくれるとは思っていなかった。どう見ても彼女は苛められる側ではなく、どちらかと言えば苛める側に回りそうに見える。

そうでなくても、弱気な人間を見ると説教を——例えば、どこにだって生きて行く限り似たようなことはある、皆辛くても我慢しているの、だからあなたも逃げちゃだめ——そんな、先生や親戚のおばさんのするような説教を、高飛車に言いそうなタイプに見えたのだ。

でも、ナイアの言っているのは少し違うようだ。そして、どうしてここでもまた「旅」が出てくるんだろう。

「あのね。この村にいたって苛められるだけなの」

ナイアは面白くなさそうな顔で話し始めた。

「『砂浜の村』の住民は賤しいんですって。そういうことになってるの。『煉瓦の街』なんかに行くと私たち『砂浜の村』の住人は、『浜辺の者』って呼ばれて差別される。まあ、苛められるっていうわけ」

例えば、とナイアは話を続ける。

「『煉瓦の街』の住人が歩く歩道の上を、『浜辺の者』は歩けないわ。馬車を通る道の隅っこを歩くの。あ、人も馬車も向こうは避けてくれないわよ。私たちは人の目に見えないことになってるの、汚らしいから。だから向こうからばん当たって来る。痛い目に遭いたくなければ私たちの方がずっと緊張して避けなければならぬ」

「……………」

「服もね、決まっているの。麦を運ぶ麻袋をね、一度ほどこいて、頭と腕のでる袋に縫い直すの。それを被ってこうやって紐で結ぶ。ほら」

彼女は立ち上がって全身を彼に見せた。確かにそんなつくりのみすばらしい服装だった。そして母親もまた全く同じ格好をしていた。

「それからね。この村の中にいれば差別されずに済むかっていうとそうもいかない。私と母さんは余所からの流れ者だもの。だから村からうんと離れたこんなところに住んでいるのよ。村の人たちは、必要最小限の用事のある時しか私たちに口を開かないわ。私が小さな頃、高熱で死に掛けたことがあったけど、その時だって村の医者には私を診てくれなかった。それから、うちの屋根が壊れた時だって誰も修理してくれなかったわ。私が自分でよじ登って穴を塞いだのよ」

「……………」

光一はどう返事していいのかわからない。ナイアは気の毒がつて欲しそうなわけでもなく、むしろ何か意気込むかのように光一に向かつて話す。それがどうしてなのか彼にはわからないが、ともかく話の内容からするに、この村にいてはナイアにも光一にもあまり救いはなさそうだということは分った。

「私はずっと『海から来る者』を待っていたの」

彼女の赤ワイン色の瞳が強く光った。

「そして、一緒に旅に出るんだ、って願いつけてきたの。この村を出て行くのよ。皇都つて随分遠くにあるもの。遠く離れたところまで行けば、誰も私のことを知らない街がある。そこに行けば、名前を変えて、『浜辺の者』であることも隠して、全く新しい人生を送ることができるわ。そう、できる。やってみせる」

彼女は光一をみて、にこつと笑った。そして光一に握手を求める。

「ねえ。私達つて似たもの同士ね」

そういわれて光一はどきまぎする。こんな美少女、それも気の強そうな女の子と「似たもの同士」になるなんて。

同じクラスの女子たちにも派閥はある。もつともイジメの対象となっている光一にとってはどのグループの女の子だつて何の縁もないけれど。もしナイアみたいな少女がクラスに居たら——。彼は女子たちのヒエラルキーの頂上にいる女生徒の顔を何人か思い浮かべた。——きつとあの子たちを蹴散らして女王様として君臨するに違

いない。

——こんな女王様みたいな女の子が、僕のことを「似たもの同士」なんて言ってくれる。

光一は、ぼうつとした頭でナイアの差し出した手を握った。

「ね。だから一緒に旅をしましょう。今までの自分を知らない街で、新しい人生を生きるのよ」

ナイアの目には強い意志の力が漲っており、それを見返した光一も息を吸い込む。

「うん」

そのやりとりを見ながら、マイアは眉を顰めて思案していた。

旅の始まり

翌朝、光一はナイアと共に出立した。マイアとナイアの家は、外から見ると本当にみすばらしかった。そもそもそれは住居というにはあまりにも小さく、物置小屋のようでさえあった。壁は煉瓦積みでできているけれども、全体に色褪せあちこち崩れかかっている。屋根も初めはちゃんと葺かれていた痕跡はあったが、いかにも素人が穴を取りあえず塞いだ、という感じの箇所がいくつかあった。扉も窓枠も古びてまるで廃材がくっついていているようだ。

ナイアは自分の生まれ育った貧しげな家を一瞥すると、ふん、と鼻息一つついた。そして見送りにでた母親に視線を向けて簡単な別れを告げる。

「それじゃあ、母さん。私行くわね」

「ええ……。気をつけてね……」

そしてくるりと背を向けて歩き出そうとした。

「あ、あの……」

光一は立ち止まったまま、先に歩き出したナイアの背中になまらず声を掛けた。

「何？」

「あの、何と云うか、もうちょっと……。あのさ、もしかしたらお母さんともう会えないかもしれないんだろ。もう少し、あの、何か言ったほうがいいんじゃないかな」

ナイアは冷ややかに光一を見、そして同じく冷やかな視線で自分の母親を見た。それから再び光一に向けて説明した。

「昨日も言ったと思うけど、もともと母さんはこの人間じゃないの。皇都に居たのよ。それがなんでだか絶対理由を教えてくれないけど、この『砂浜の村』に流れ着いて私を産んだの。おかげで、私は『賤しい生まれ』なんてことになってるし、そのうえ、その『賤しい』人達の中でも仲間はずれってことになっちゃってるわけ」

母親は俯く。

「どうしてこんな所で私を産んだの、ってずっと母さんを責めてきたけど、今はもういい。だってそれは母さんの人生だもの。母さんはそうしたかったのよね？ 好きにすればいいわ。でも私はもうたくさん。私はこれから私自身の人生を切り開くわ。ここから出て行く」

その口調は決して母親を赦すものではなく、冷たく切り捨てるものだった。

「最後に」

ナイアは顎を上げて母親に尋ねた。

「最後にもう一回だけ聞いておくわ。母さん、なぜ皇都に住むなんて恵まれた立場を捨ててこんなところに流れてきたの」

優しい大人しげな雰囲気のマイアが、強い意志を込めた顔になってきっぱり言った。

「それは言わない。貴女も知らないほうがいいの」

それから複雑な表情で娘に念を押した。

「貴女、『砂浜の村』を出たら名前を変えるって言っていたわよね。私の名前にも貴女の名前にも似ていない、全く新しい名前にするって。そう私と約束したわよね。それだけは絶対に守って頂戴」

「ええ、もちろん。私は新しい名前を生きるわ。そうだ。新しい名前ならコーイチにつけてもらったらいい。あっちの世界の名前をつけてもらうの。そしたらこっちの世界では珍しい名前になるんじゃない？」

「え……」

いきなり話題を振られて光一はあたふたする。マイアはちょっと寂しげな顔で頷き、そして光一に言った。

「コーイチ、娘のことを宜しくお願いしますね。名前のことも、それから旅の間のいろんなことも」

「この子より私の方がずっとしっかりしてるじゃない。大丈夫よ。あ、でも名前の方はよろしくね」

ナイアは光一に一声掛けると、母親を無表情に見て言った。

「それじゃ、さよなら。母さん」

そして踵を返して歩き出した。光一も慌ててついていく。

彼女の家の周りは何もなかった。見渡す限りの砂浜に、小さな小屋がポツンと立っているだけだった。だから、マイアがその小屋の前にずっと立って娘を見送っている姿が、いつまでも何にも遮られ

ることなく見ることが出来た。光一は何度か振り返って、マイアが黒い小さな点になるまでずっと娘を見送っているのを見たけれども、ナイアの方は砂浜に建つ貧しい家など一顧だにせず、ただ前だけを見て歩いていた。

何にも無い砂浜がずっと続いていった。海面とほとんど高さが変わらないままの砂浜が陸の奥まで延々と続いている。平坦な土地のうんと遠くに牛や羊の影が見え、立木が一行に行儀よく並んでいた。

「あの、ずうつとこんな感じ？」

「そうよ。『煉瓦の街』に着くまではずっと砂浜」

二人ともマイアの作った皮製のサンダルを履いている。砂浜の砂はサラサラで、サンダルの中に入ってきててもそんなに不愉快ではない。

空を見上げれば、高い空がどこまでも広がっている。暑くもなく、寒くもない。空の色は、これから新しい人生が始まる春のうきうきした気分にも、何かに別れを告げる秋のような寂しい気分にも、そのどちらにも重ね合わせることができそうだった。

光一の目にじわつと涙が浮かびそうになる。彼は慌てて、ナイアにこちらの世界について思いついたことを質問して気を紛らわそうとした。

「今、季節は春？ 秋？」

「暦の上では春ってことになるわ。でも、ここらあたりはあまり気候に変化がないの。別の国では暑さや寒さがあってその都度衣服を変えるらしいけど」

ああ、と光一は思った。光一も昨日からずっとシャツ一枚で過ごしている。

「あの、着替えとかはどうするの？ 何も持ってないけど」

「必要になったら手に入れればいいわ。ああ、村が見えてきた」

ナイアが言うとおり、前方にいくつかの家が集まっているのが見えてきた。

「あそこでお昼にしましょう」

ナイアと光一は村の中に入っていく。村の者は誰もナイアに声を掛けようとしなない。そのくせ光一には好奇心満々に不躰な視線をぶつけてくる。

けれども仕方ない、と光一は思った。確かにこの人間にとって自分はさぞかし奇異に見えるんだろうから。

ナイアを初めて見たときも彫が深いと思った。でも、この村の人はナイアよりも更に一段と彫が深いように思う。眼窩が落ち窪んでいるかのようにその隣に鼻が高い壁のように聳え立っていた。色は白いが、ナイアの肌がきめ細かいのに対すると、ちよとがさがさした感じだった。そして皆やたらと背が高い。光一は日本にいても小柄で和風顔だから、僕はこの人たちには本当に異世界の者に見えるのだろうな、と彼は思った。

もつとも、光一が一目見て異界の者だとわかる風貌なのは、随分と便利なことのようにだった。

「ここが『砂浜の村』よ。さ、お昼をもらいましょ。どの家がいい

「？」

ナイアは立ち止まり、光一に向かって言う。

「え？ どの家って……。君のほうがよく知ってると思うんだけど」「どこの家も似たようなものよ。どこも貧しくて、私と母さんを嫌ってる。どこでも私にとっては一緒だから、コイチを選んで」「……じゃあ、ここにしようかな」

ナイアは光一が指差した家のドアをノックした。出てきたのは、やはりとても背の高い、そしてナイアより一層彫の深い、色白の中年の女だった。彼女はナイアを見て露骨に嫌そうな顔をした。

「なんだい」

「見て。『海から来た者』よ」

ナイアはそういつて光一の手を引っ張りその女の前に突き出した。女は目を見開いて光一を眺める。彼が「海から来た者」だと、一目で納得したようだった。

「おやまあ、ほんとだ。のっぺりしてるねえ。……で、何が欲しいんだい」

「お昼ご飯を頂戴。それからこの瓶に飲み物を入れて。二人分ね」

ナイアは鞆から持ってきた陶製の瓶を渡してそう言った。女は首を竦めただけで無言で家の中に戻っていった。

「のっぺりしてる、って僕の顔のこと……なんだろうね。やっぱり」「そうよ、この辺でコイチみたいな顔の人間なんていないもの。『海から来た者』は『顔がのっぺりしている』のが特徴だって聞いた」

てたけど、本当にコーイチの顔って平べったいわよね」

「……………」

「助かるわ。すぐ信用してもらえるし」

「……そう……」

中年女が両手に紙包みを持ち、脇にナイアの渡した瓶を抱えて戻ってきた。

「ほら。水と食料だよ」

ナイアは無言で受け取りそのまま踵を返した。中年女も厄介払いするようにボタンと扉を閉めた。光一は呆氣に取られてナイアとドアを交互に見る。

「何ぼうつと突っ立ってるの。早く来なさいよ」

ナイアが振り向いて言った。

「あの、お礼くらい言った方が良くない？」

「いいのよ。後で帝国府が二食分の食料と飲み物を給付してくれるんだから。多分ここらじゃ手に入らないような珍しい品をね。私達に物をやった方があの人たちにとっても得なの。だから普段口を利くのも嫌な私にでも物をくれたのよ」

それでも光一は閉まったドアに一礼して、立ち去っていくナイアを追いかけた。

地理と文字と魚

「砂浜の村」を離れたところで、二人は腰を下ろした。何も無いのでやはり砂の上に座った。村の中年女がくれたのは、丸いパンのようなものに、チーズとハムが挟まったもので、チーズが少々獣臭い以外は光一にとっても違和感のない食事だった。

食後、一服しているときに、光一はナイアにこの世界の地理について訊ねた。「旅をする」と言われて後を付いてきているが、自分がこの世界の何処にいて何処に向かっているかわからない。そもそもこの世界の何処に何があるのかさっぱりわからないのだ。

「あのさ、地図みたいなものないかな」

「地図？」

ナイアは砂の上につうつと横線を引つ張った。どうやら砂の上に描いてくれるつもりらしい。

「こっちが海。こっちが陸ね」

ナイアは指で横線の下を海だと示し、上を陸だと示した。そして海岸線を表す横線からによると縦に波線を引いた。

「これが河。ねえ、あなた達の世界には河が何本もあるって本当？」

奇妙な質問に光一は面食らう。

「え？ うん。たくさんあるけど？」

「へえ。こっちはこの河だけよ。海に注ぐまで枝分かれするけど、

源流は一つ。皇都にあるの」

「それが『海の源流』？」

「そうよ。皇都から流れた水が河になって海になるの」

「河には名前がないの？」

「普通は『河』としか呼ばないけど、ラクロウ河って名前はあるわ。『生命の道』って意味の古語なんだって母さんが言ってた」

そういつてからナイアは辺りを見回した。誰かが自分の話を聞いていないか確かめるかのように。

光一は特に何も考えず、自分が覚えやすいようにナイアの描いた波線の横にカタカナで「ラクロウ」と書いた。ナイアはそれを見ると弾かれたように頭を上げ、驚愕の表情で光一を見た。

「それは……、まさか文字？」

「え？ あ、うん。そうだよ。やっぱり君たちの世界の文字とはだいぶ違うんだろ？ でも、これが僕の世界での文字なんだ」

光一は、ナイアはこちらの世界とあちらの世界で文字が違うことに驚いているんだと思った。しかし、ナイアの驚きはそこにではなかった。

「文字はそりゃ違うんでしょうけど。で、文字を知っているなんて貴方、ひよつとして凄く身分が高いの？」

「へ？ 身分？ いや、僕は普通の高校生だよ。ウチだってごく普通のサラリーマン家庭だし。……苛められてるくらいなんだから強いて言えば僕の身分は低い方かも」

「それなのに、文字を知のことを許されるの？」

「……？ 許されるも何も、学校で強制的に勉強させられるよ」

「へええ。いいわねえ」

ナイアは心底羨ましそうに言った。

「じゃあ、君は字の読み書きは出来ないの？」

ナイアはムツとした表情を浮かべた。それから複雑な表情をして考え込み、再び周りを見回してから光一にそつと話しかけた。

「あなたとは一緒に旅をするものね。あまり隠し事をしてても仕方がないわ。あのね、私は文字を読むことも書くこともできるのよ。それからこの帝国の地理だって知ってる。でも、絶対にそのことを誰にも言つては駄目」

「文字を知ってるってことは、この世界ではきつととても珍しいことなんだね？」

ナイアの話の内容と話し振りに光一はそう見当をつけた。

「珍しいだけじゃない。普通の民は文字を知のことを禁じられているわ。地理に詳しいのも怪しまれる」

「じゃ、君はどうして知ってるの？」

「母さんよ。母さんが教えてくれたの」

「それは君のお母さんが特殊な人だっていうこと？」

ナイアは苦虫を噛み潰した様子で言った。

「そうだったみたいね。でも母さん、自分が皇都にいたってことしか教えてくれないの。昔のことは全部秘密。そして私が文字を知っていることも村の人たちには絶対秘密。貴方もこの先そんなこと誰にもばらさないでよね？」

ナイアの目はとても真剣で、光一も真面目な顔をして深く頷いた。

「うん。絶対喋らない。約束するよ」

ナイアは光一の約束と引き換えるように、再び地図を描き始めた。

「河が海にでる出口にあるのが『煉瓦の街』よ」

「今から向かうところだね」

「そう。『煉瓦の街』は『土の国』の首都でもあるの」

ナイアは海岸線から半円状に国境を描いてみせる。

「『土の国』には土しかないの。だから皆家は煉瓦で建てるしかない。木は生えるには生えるけど、ちゃんと人間が世話をしてやらないと育たないわ。あとは牧草が生えるくらいね。だから、みんな羊と牛を飼って暮らしてる」

「魚はとらないの？」

光一の質問にナイアは物凄く不愉快そうな顔をした。

「冗談じゃないわ。とんでもない。食べない、絶対」

「どうして？」

「どうしてって……。決まってるじゃない。魚は死者の魂だからよ」

「へえ……」

「貴方達の世界はそうじゃないの？」

「人は死んでも魚にはならないと思う」

「……こちらの世界ではね。人が亡くなるとその骨は河に流すの。そうして海に流れ着いた死者の魂は魚になるのよ。そして、その魂に再び定められた時がくれば雲に乗って、皇都の『海の源流』に降り注ぐ雨の滴になる。皇帝は、『海の源流』に滴り落ちてきた魂に、

住む土地と運命を与える」

「……………」

光一には、それが事実なのか神話なのかわからない。全くの異世界ならそれが事実であるのかもしれない。それとも、人の生き死にそのものは自分の世界と同じで、ただそれに対する意味づけが違うだけなのかもしれない。

「私達『浜辺の者』が卑しいって言われるのはね。きつと魚を口にしているに違いない、て思われてる部分も大きいからなの」

「食べてないのに？」

「私達は食べない。でも、遠くの人たちは好き勝手言う。それに魚のいる海のそばに住んでるだけでもなんだか薄気味の悪いものだと思うらしいわ」

そういえば、と光一は思う。不動産がどうこうという話を両親がしていたときに、やはり「墓地のそばは地価が安い」みたいなこと言ってたっけ。死者の眠る場所と近いというだけでも何か忌み嫌われるものなのかもしれない。

「まあ、『煉瓦の街』の橋を渡るまでは、私の顔を知っている人もいるから、ちよつと嫌な思いをするかもしれない。でも河を上る船は河の対岸、つまり橋の向こうにあるの。そこまで私は行ったことがない。そこなら私が『浜辺の者』出身だって直接知る人も少ないからずつとマシになるわ」

「僕達、河を上るの？」

光一の質問に、ナイアはああ、といった顔をし、再び砂上の地図に指を落とした。

「『土の国』よりもつと陸の奥に入ると今度は『石の国』があるの。そこから更に上流に『森の国』があるのよ。そして皇都はこの『森の国』にある」

ナイアは、海を示す横線の上に、河を示す縦の波線を中心に三つの鏡餅を重ねるようにして地図を描き上げた。

「これだけ？……随分単純なんだね」

光一の想像する世界地図というのはもつとごみごみしていたものだったので、思わずそう口にしてしまった。それで、ナイアは少々気を悪くしたようだった。

「これが全部つて訳じゃないのよ。河から外れた地域に他にも国があるそうだし。それに、もつと河から遠ざかった地域には蛮族がいるらしいわ。皇帝に従うのもいるけど、齒向かうのもいて、皇帝軍が警邏しているとか聞いたこともある」

でもね。とナイアは続ける。

「私達は皇帝に住む場所を与えられるとそこからの旅は原則禁止だもの。あなた達『海から来た者』の案内は例外として。あと帝国府のお役人とか特別に許可を得た者も旅はするわね。でもそれは河を使つて皇都と往復するだけ。それから荷物も皇都からの河を上り下りする。とにかく移動は河で皇都と行き来するだけだから河沿いの国のことしか話は伝わらないものなの。だから河から離れた地域がどうなっているか知っている者はここら辺りでは少ないはずよ」

それでも。と今度はナイアはちよつと得意そうになった。

「私は随分いろんなことを知っている方だと思うわ。母さんからいろいろ聞き出したもの。母さん自身は一度皇都から『砂浜の村』まで旅をしているでしょ。だから、『石の国』『木の国』だって一度は見ているの。それから、絶対内緒だけど私は文字が読めるでしょ。ウチの床下にこっそり隠してある書物だって読めたの。だから私はとても物知りなのよ。よかったわね、コーイチ、案内人が私で」

「あ、うん。そうみたいだね」

確かにナイアの話の聞いていると、ナイアはこの世界でも結構情報通なのかもしれない。それに、テキパキものごとを決めていく性格は、あまり自分でものごとを決めたくない光一にとって楽な存在だった。

「うん。君が案内人で助かるよ」

ナイアはニコツと笑うと立ち上がった。

「さあ、そろそろ次の村に向かわないと夜泊まれないわ」

「次の村？ 次の村はなんていう名前？」

「名前？ 次の村も『砂浜の村』よ。言っとくけど『砂浜の村』は一箇所だけじゃないのよ」

ナイアは足元の地図に描かれた海岸線を、足ですうつとなぞった。

「浜辺にある集落のことはみんな『砂浜の村』というの」

「じゃあ、『煉瓦の街』までまだずっと歩かなきゃいけないわけ？」

光一は気が重くなった。砂浜を歩くのは、舗装された道を歩くのと勝手が違う。普段使わない足の筋肉を使うようで、変な疲れ方を

していた。

「ずっと、たったあと六つよ。そこで宿や食事を取りながら、そうね、三、四日で着くわよ」

「三、四日……その間中このまんまの景色を見ながらただ歩くだけなの？」

それの何が苦痛だというのか、ナイアはさっぱりわからないという顔をした。ナイアにとっては『煉瓦の街』に行けるだけでも楽しいのに。彼女は、分らないものに全く関心なさそうに、光一に背を向けるとすたすたと歩き始めてしまった。

煉瓦の街

「煉瓦の街」までナイアと光一の足ではは四日かった。

泊まるときも、初めて昼食を貰った時と同様だった。ナイアの顔を見た村人は最初あからさまに嫌そうな顔を彼女にみせる。しかし、彼女が光一を前に押し出すと表情を変える。彼らの顔に、この旅の連中に与えてやるものと後で帝国府が支払ってくれるだろうものを思案する表情が浮かぶ。それから顎でしゃくって家の中に招き入れてくれるのだった。

「砂浜の村」の家はどこも貧しく、客人を泊めるような部屋などなかった。だから物置部屋だったり、その家の住人が寝静まったあとの食堂だったりに二人は寝かされた。そういうわけで、夜の間は光一はナイアとゆっくり話をすることができなかった。

四日目の昼、砂浜の彼方に小山のようなものの影が見えてきた。近づいていくと、赤っぽい。更に近づくと、確かに赤煉瓦を積み上げて出来た建物が立ち並んでいる街が見えてきた。

赤煉瓦造りの丸い塔を境に、道も赤煉瓦で舗装されるようになった。長く砂浜に馴染んだ足は地面をつい踏みしめようとするが、そんな力を入れなくても楽々歩いていく。

街中に入っていくにつれて人の姿も増えていった。皆、舗装された道の両端の歩道を歩いている。しかし、ナイアは一段低い車道を歩いていた。

道行く人の服装もナイアと違う。この街を歩く人々は皆綿なり絹なり柔らかい素材で、もう少し立体的に仕立てられた服を着ていた。光一はこちらの世界の人は皆こんなものかと気にしていなかったが、ナイアの麻袋を改造した服はここに来ると本当にみすばらしく、いかにも物乞いといった風情だった。

「あなたは歩道を歩いたっていいのよ」

ただ、みすばらしい格好をしていようが車道を歩かされていようが、ナイアはナイアだった。傲然と顔を上げ、どこか命令口調で光一に言う。

「でも……君が歩道を歩かないのに、僕だけ歩くわけにはいかないよ」

「そんなの、……っ」

ナイアは光一に話しかけるため立ち止まっていた。そこに荷馬車を通りかかり、避けなかったナイアに荷台がぶつかった。彼女はつのめって道に手をついた。荷馬車は何事もなかったかのように走り去っていく。

「だ、大丈夫？」

四つん這いになっているナイアに合わせて光一も彼女の傍に座り込む。その鼻先を馬のひずめと車輪が掠めた。この二つが巻き上げた砂塵が目や口に入る。

「あなただけでも歩道に上がって！」

ナイアが苛立たしげに言った。

「私は自分の身を守るので精一杯なの。あなたの心配までできない。だからあなたは安全な歩道に上がって頂戴」

「でも……」

光一もナイアの言うことはわかる。僕に注意を向けていたら、ぶつかってくる馬車に対する注意がおろそかになる。けれども――。

「でも、やっぱり僕だけ歩道につてわけにはいかないよ。僕自分で気をつけるから。僕のことには気にしないで」

「何考えてんだか。だって……」

ナイアは何かを言いかけたが、また向こうから馬車がやってきた。二人とも車道ぎりぎりに身体を横にしてなんとかやり過ごす。あとは、こんな調子で次々に襲い掛かってくる馬車や、その荷台、そこからはみ出している荷物を避けるのに二人とも専念し、互いに喋ることはなかった。

路地に入ると人も馬車も通るものが途絶え、やっと二人並んで歩くことができた。ただ、もう二人ともぐったり疲れてしまい口数は少なかった。

「あそこが宿よ」

ナイアが煉瓦造りの二階建ての建物を指差した。間口は狭い。ここに着くまでにこの「煉瓦の街」の各々の建物はとても間口が狭いことはナイアに教えてもらっていた。基本が砂地で建物を建てづらい土地に、沢山の建物がひしめき合っているので各々の道路に面する部分はごく小さいのだと。その代わり奥行があるのだ、とナイアは教えてくれていた。

普通の民家に見える宿屋の扉を、ナイアは叩いた。中から出てきたやはり彫の深い中年男だった。ただし「砂浜の村」の者と違い柔らかい布で仕立てられた、洋服に近い格好をしている。男は、麻袋の服を纏ったナイアを見て眉間に皺を寄せた。汚らしいものを目にした不愉快さを隠すことなく。

けれどもナイアは臆さない。

「『海から来た者』の案内で皇都まで行くの。あさつての船に乗るから泊めて頂戴」

宿屋の男は、ふんと鼻を鳴らして言った。

「じゃあ、そつちの『海から来た者』は二階の客室だ。お前は裏の馬小屋だな」

ナイアは肩を竦めただけで、光一に、じゃあね、と言って、隣の建物との隙間から宿屋の裏に回ろうとした。

「ちょっと待つてよ。あの、彼女も同じ客室に泊めさせてください」

光一は宿屋の男にそう頼んだが、相手はてんでとりあわなかった。光一は食い下がる。

「馬小屋で寝ろ、なんて……。ひどいじゃないですか」

「うちに『砂浜の村』の人間なんかを泊める部屋はないね。馬小屋を貸してやるだけでも奇特なもんだ。それを目当てに『砂浜の村』の連中がやって来るもんだから、うちはご近所に苦情を言われて困っているくらいだ。それでも泊めてやろうというんだから、感謝さ

れこそすれ批判されるいわれはないね」

「コーイチ」

ナイアが光一の傍まで戻ってきて囁く。

「たとえ馬小屋でも、この街で『砂浜の村』の者を寝泊りさせてくれるのは本当に珍しいの。ここくらいしかないのよ。あまりこの主人を怒らせないで。怒らせてこれから『砂浜の村』の者には一切宿を貸さない、なんてことになったら村の者みんなが困るわ。母さんだって困る」

光一はちよつと押し黙ってから宿屋の主人に言った。

「じゃあ、僕も馬小屋に泊まります」

「好きにしな」

そう言つて男はボタンと扉を閉じた。ナイアは首を振りながら建物の裏手にまわりはじめた。光一もついて行く。

「全く、コーイチの考えることってわからない」

「だって……」

「どうも私に同情してくれているようなんだけどね。あなたが一緒に車道を歩こうが馬小屋に泊まるうが、私が歩道を歩けない、宿の普通の部屋に泊まれないっていうのは変わらないの。二人そろつて不快な思いをするなら、せめて片方だけでも快適な思いをした方がいいじゃない」

「それは……そうだけど」

でも、と光一は思つたことを口にだした。

「僕が歩道や部屋で快適な思いをしててもさ、その間君が嫌な目にあつてゐるって思うと、僕も気分良くないよ。だからやっぱり君と一緒にいるよ」

「それで別に私の不愉快さが減るわけじゃないんだけど」

「……そうだね。でも、僕は自分ひとり快適だといったたまれないから……。僕の好きなようにしてもらっていいかな？」

こう下手に頼まれるとは思つても見なかったナイアは、しばらく言葉を失つてまじまじと光一を見た。

「わ、私はいいわよ。……コーイチって変な人ね」

そっぽを向いて、馬小屋の扉に手をかけたナイアだったが、表情に少しだけ嬉しそうなものがあつた。

船に乗る前に

その夜、ナイアは細々と光一に明日の予定を説明した。

「明日はこの街中で買い物よ」

ナイアは楽しそうだった。やっぱり女の子は買い物が好きなのかな、と光一はのんきなことを考えていた。

「お店の前まで私が連れて行くけど、今日の様子じゃ実際の買い物は光一に任せた方がよさそうね」

「別に構わないけど。どうして？」

「私が買い物をしようとしたら、品物を床に放り出されるのが関の山よ。それを這いつくばって拾わなきゃなんない。それを見たら、あなたまた私のことを気の毒がってしまうでしょう？」

光一は苦笑いして承諾した。

「だって、君がそんな目にあつての見てて辛いんだよ。僕が買ったほうがいいなら、そうするよ。で、何を買ったらいいの？」

「シャツ、ズボン、肌着、靴下、もちろん頑丈な靴——底に厚みのあるものね。これから石畳の道を歩くことが多いから靴は大事よ。それに——」

ナイアは細々とした生活用品を挙げ続けた。光一が覚えられない、と言うと自分が覚えているから大丈夫だ、と請合った。

実際、次の日ナイアはあちこちの店に光一を連れまわし、店の前

でそこで買すべき品目を指示した。一軒あたりの買い物は多くても数点だったから、光一にも簡単にできた。

光一にとっては、買い物は日本にいた時より楽かもしれないなかった。彼の顔を見ただけで店の主人は彼が『海から来た者』だとすぐ理解し、必要なものを適当に見繕って品物を包んでくれる。そして光一は何もしなくて構わない。

光一が日本で買い物に苦手だったのは、多くの商品の中から自分で欲しいものを選ばなくてはならないことと、会計を無難に済ませられるかどうか――例えば、お金が足りなくなつて恥ずかしい思いをしないだろうか、とか、レジには若いお姉さんがいるのに何か場にそぐわない行動をしてしまつて笑われやしないだろうか、とかいちいち緊張することだった。

だけど、ここでは、光一は店の主人が選んだものをナイアのところに持ち帰るだけだ。そしてどんな品物を渡されようがナイアは別段文句を言わなかった。けれども、服屋の前に連れて行かれたときには光一はナイアに訊ねてみずにはいられなかった。

「あのさ、このまま僕が買い物してると男物の服しか包んでくれないと思うんだけど……。ナイアの分、どうしよう。女の子の分も下さいつて頼んでみようか？」

「私が『砂浜の村』の者である限り、渡されるのは麻の袋よ」

ナイアは自嘲気味に言った。

「男物をたくさんもらつてきて。連れは男の子だつて言つて。大きさは、そうね。あなたと同じくらいのでいいわ」

光一は、ナイアは麻袋が嫌でそれなら男の子の服の方がマシだと考えたのだろうと単純に思った。日本でもボーイッシュな格好を好む子がいるし、ナイアの性格なら似合いそうだな、とも。

「ええっ？ 髪を切るの？」

買い物を済ませ、宿屋の馬小屋に戻ると光一はナイアに鋏を手渡された。これで髪の毛を男の子に見えるように切ってくれ、と言う。

「でも僕、人の髪の毛なんか切ったことないよ。とてもできないよ」

光一の頭には、同級生の女子のショートカットがあった。あんな風にするなんて絶対無理だ。

「上手でなんかなくていいから。男の子くらいの長さにして。それでいいから」

「でも……」

「こつちではね、特に裕福じゃなければ、床屋に行かないことは普通なの。みんな親が切ってるわ。下手糞な親だって一杯いるわよ」

「けど……」

「短くするだけでいいのよ」

「でも……もったいないよ、そんなに綺麗な髪なのに……」

「そんな甘ったるいこと言わないで！」

ぴしゃりと、ナイアが言った。赤ワイン色の瞳が強く光っていた。

「私は別人になるの。生半可な気持ちで人生を変えたいって思ってるわけじゃない」

「……………」

ナイアの迫力に気おされて光一は言葉を失う。

ナイアの方も、言いすぎたと気がついた。でも、なんかコーイチは優しすぎるというか、考えが甘いというか、イラっとするところがあるのよね。そうナイアは思うが、やはりここは穏やかに説明するべきだろうと思い直した。

「明日、橋の向こうへ行くわ。私、今まで橋の向こうへ行ったことないの。向こうへ行けば私の顔を知っている人もいない。私はこれから男の子の振りをする。そして別人になります。もう私は、『砂浜の村』のナイアって娘じゃないの」

それに、とナイアは光一をちよつとからかうような目で見た。

「皇都までの旅は長いもの。男の子の格好をしておいた方が安全だと思っわ。もし私が女の子の格好で危ない目にあったら、コーイチ助けてくれる？　っていうか、助けられる？」

「無理……だと思う」

「ね。だから私は男の子になる。とにかく私の髪を切って頂戴。ただ短くするだけでいいから」

光一は恐る恐るナイアの栗色の髪を一房手に取り、鋏で軽く挟んだ。そこから力を入れる決心はなかなかつかない。しばらく躊躇ってから、光一は目を瞑って鋏を持つ手を握った。

「えいつ」

光一の拳に栗色の髪の束が降りかかった。さらさらしていてとても気持ち良かった。でも、ナイアの頭には、一箇所だけ短いところが出来て、なんだかとてもいたたまれない気が光一はした。

「これでいいのよ。どんどんやっていって」

ナイアが振り向いて光一を励ます。それで光一は再び、ジヨキつと髪を切り落とす。一部分だけ短い方がかつこ悪いんだから、ショートカットだつてきつとナイアには似合うはずだから、そう自分に言い聞かせながら、次そのまた次と切り落としていく。

光一は自分が床屋で髪を切るとき床屋がどうしていたか、その記憶を頼りに、鋏を縦にしてみたり、掬い取った髪の毛先だけ切つて戻してみたりと工夫を重ねた。その甲斐あつてか、毛先は揃わないものの、なんとかショートカットに近い髪型になった。そして髪を短くしてみると、外見だけなら西洋人形のようなナイアが意外に少年っぽく見える。

「どう？」

「うん。なんか……カッコいいよ。それで男物の服を着てみたら男だと言つても十分通るかも」

ナイアは物陰で男物のシャツとズボンに着替えた。光一はその間ぼんやり考えていた。生まれついた容貌より、こういう風に生きたいという本人の意志の方が重要なかもしれない、と。でも———そうしたら、僕はこれからどんな格好をすることになるんだろう。

ナイアが物陰から一步出てきた。ちょっとだけ眉を寄せて心配そうに光一に尋ねる。

「どう？ 男の子でやっていけそう？」

「うん。大体男の子に見える。元が女の子だつて知らない人だったら、ちゃんと男の子に見えると思う」

「そう、良かった」

ナイアは愉快そうに微笑んだ。

「じゃ、コーイチ、私に名前を頂戴」

「へっ？」

「いやあね。母さんの家を出るときに言ったじゃない。私は名前を変えらるって。母さんからこの約束だけは守れって言い渡されてるの。まあ、別に母さんとの約束がどうであれ、ナイアっていうのは女の子の名前なんだもの。いつまでもこんな名前にいるわけにはいかないわ」

そういえば、光一が名づければこちらには滅多に無い珍しい名前になるだろうと彼女は言ってたっけ。

「ね、どんな名前がいい？」

ふつと光一は同じ高校に通っている女の子を思い出した。一番の美少女でめっぽう気が強く、女子達のリーダー的存在だった。ナイアと彼女は光一にとって似通った存在に思えた。もともと同じ学校の彼女は光一に話しかけたりなんか絶対にしないけれども。

「……美鶴、なんてどうかな？」

「ミ・ツ・ル……変な名前ねえ」

自分で変わった名前が欲しいと言っていた癖に、ナイアは小首をかしげている。

「僕が知っている女の子の名前んだけど……、別に男の子がつけなくても変じゃない名前だよ。ああ、親戚に『満』って名前の男の子がいる」

「男女どっちでも使える名前なんだ！ それは格好いいわね」

ナイアの表情がパアツと明るくなった。

「ちょっとまだ変な感じはするけど、名前を変えるっていうのはそういうものよね。慣れないから違和感があるだけで、慣れたら氣に
いると思うわ」

ナイアは立ち上がり、少し昂揚した様子を隠そうとせず、心底嬉しそうに言った。

「私はミツル。男の子。もう『砂浜の村』の人間なんかじゃないわ。そしてもう誰からも蔑まれたりしない人生を生きるのよ！」

そのワイン色の瞳には、自分にとって足枷でしかなかった故郷と母親からやっと逃れられたのだという解放感と、この先の人生を思い通りに生きてみせるという自信と生命力とが溢れていた。

護符と巫女

「煉瓦の街」に入って初めて、二人は河岸に出た。河の幅はあまりに広すぎて向こう岸が見えない。ひたひたと水が押し寄せる様を見て、光一はここへ来たとき「水の砂漠」に独り取り残されたようだ」と思ったことを思い出した。でも、今は。今は心強い案内人がいる。

光一は隣を見た。ちよつと華奢だが、少年といつても十分通用するナイア、いやミツルが鼻歌を歌いながら歩いていった。

「あそこに橋があるわ」

ミツルが指差した。確かに河岸から河の中へ向かつて木造りの橋が差し出されている。河の方は広大なのに、その橋は幅が狭く頼りなげで、またその上を歩く人も少なくもの寂しげに見えた。

それをミツルに伝えると、例のごとく明快な返事が返ってきた。

「だって、橋を渡る人なんてあまりいないもの。片道だけでも1時間ほど掛かるんだそうなもの。そんな人通りの少ない橋を大きくする必要ないじゃない。前にも言っただけど、『土の国』では木材って貴重なんだから」

「『煉瓦の街』で暮らしている人は渡らないの？」

「渡る必要ないでしょ。橋のこつち側の街だけでも生活に必要なものは揃うし。私達の旅の準備だって十分整えられたじゃない。こつちになくて、あちらにあるのは『上り船』乗り場、あちらになくてこつちにあるのは『下り船』降り場だけ」

「じゃ、この橋を渡るのは旅をする人くらいなんだ」

「そ。で、さんざん言ってるけど、旅をする人間ってというのは限ら

れてるのよ」

ミツルの言うとおり、橋の上は閑散としていた。ミツルはとても嬉しいらしい。人氣が途絶えたときには、くるくる回ってみたりまるで小さな子供のようににはしゃいでいた。

確かに橋は長く、いくら歩いてもなかなか対岸が見えてこない。広い河を橋から見渡してもやはり水面しか見えない。河口付近だからあまりはつきりした流れはなく、海が近いせいか潮風が吹いていた。

ようやく対岸が見えてくるとミツルは駆け出さんばかりとなった。ミツルにとつての新天地。誰も自分を知らないという自由さが彼女を呼んでいるのだらう。歩き疲れた光一は、さつさと駆け出していく彼女の背を眺めながら後ろをマイペースで歩いていた。

ミツルに追いついたのは、ミツルが一軒の店の前でなにか紙切れを手に見しているとところだった。

「なあに、それ」

「護符よ」

ミツルはあまり興味のない様子で答えた。

店の中から、彫は深いが頬のたるんだ年配の女が光一に言った。

「おや、あんた『海から来た者』だね。これから二人で河を遡って皇都まで旅をするんだらう。それじゃあこの護符は絶対に必要だね。特にあんたは」

「あの、護符って何ですか？」

「あんた達を守るお札だよ。あんた達は生命の流れを逆行するんだ

からね。いろんな魔物や呪術者に狙われちまうよ」

「……？」

怪訝に思う光一に、ミツルが説明する。

「前に言ったでしょ。人は死ぬと河に流されてその魂は魚になるって。魂は皇都の『海の源流』に降る雨となってこの世に降りてきて、河によって生まれる土地まで流される。そして、その生を終えると河を下る。これが生命の流れ」

「ああ、うん」

「ところが私達は人の形をとったまま、この河の流れつまりは生命の流れに逆行する、というわけ」

商売女がすかさず割り込む。

「これはとんでもなく恐れ多いことだよ。生命の理に反するものだからね。これじゃ、魔物や呪に襲われても簡単にやられちまうよ。さあ、護符を買った買った。この護符が守ってくれるんだから」

光一はミツルを見た。ミツルは商売女の脅かしにちつとも関心を示した風はなかったけれども、二枚買ってはどうかと光一に言った。それで光一も二枚その女から護符を買ったのだった。

「あの……魔物や呪術って、こっちの世界にはあるわけ？」

「みたいね。私も本でしか知らないけど」

「……この護符っていうので防げるのかな？」

護符はごわごわと分厚い紙に、光一の見たことのない文字が数行に渡って書き連ねられていた。その文字が神秘的で確かなんだか霊験ありそうな感じだった。

「さーあ？」

ミツルは声に抑揚をつけて、自分は疑わしく思っていることを声音で示した。

「だって、紙切れにありきたりの文句を書いているだけよ。旅の途中で皇帝と皇帝に屈服した妖魔とその眷属がこの者の道中を守ってくれますように、って。ただそう書いてあるだけ。文字の読めない人には何だか不思議なモノにみえるんでしょうけど」

自分がまさにそう思っていたので光一は少しばかり恥ずかしい思いをし、それを誤魔化すために聞いてみた。

「じゃ、なんで買ったたりなんかしたの？　しかも君の分まで」

「旅をするものが皆買うものなんだったら、私達も買っておかないと怪しまれるかもしれないもの」

「なるほどね……」

乗船場には船が泊まっていた。ナイアいやミツルの話から、光一はこの河がこの世界での主要交通手段なんだろうと思っていた。だから、タンカーとまでいなくてもせめて見上げる位の大きさの船を想像していた。それが実際に泊まっているのは日本の漁村なんかにあるそうなくらいの大きさの船だった。

確かに、海と同様この河も水底が浅い。大きな船では航行できそうにない。この船も底が平らになっていて、光一が知っている船とは違う形をしていた。

「二人乗るわ……じゃなくて……えっと、二人乗るよ」

ミッルは船の傍で煙草啜えている船員らしき人間に声を掛けた。途中で、女の子言葉を引っ込めて男の子っぽい言い方に変えている。

「もうちょっと待ちな」

船員は煙草の煙をふうつと吹き出してミッルに答えた。

「俺も、もう一台荷物を積んだ馬車が来るのを待つてるところだ。その荷を積んだら出航する。まあ、それまでその辺をぶらぶらしてな」

「じゃ、河沿いでも歩いてる」

「ああ、また後でな」

船員は再び煙草を加え、片手を上げて見せた。

河岸には誰もいなかった。水底がはっきり見えるほどの薄さしかない河が、傾斜のない河原にひたひたと押し寄せている。光一はまた、海の砂漠で自分が感じた恐怖を思い出した。だから、ミッルに話しかける。

「ちゃんと、男言葉使っんだね」

「当たり前じゃない。もう私、男の子なんだから」

でも、僕の前じゃ女言葉のままなんだ、ちょっと可笑しいような嬉しいような気持ちに光一はなった。しかし、ミッルは険しい目で前を見ている。

「どうかしたの」

「……何か変」

「何が变だつて言うの？」

「あそこよ。……なんていうか、黒い霞みたいなのが……」

ミツルの指差す先、二人から十メートルくらい離れたところに、確かに黒い霞のようなものが立ち上っていた。二人が息を呑んで見つめている内にそれはますます密度を増していく。やがてそれは黒い布を頭からすっぽり被った老婆の姿となった。

光一はこんな老婆を見たことがなかった。不思議な現れ方や黒マントを別にしても、ここまで年老いた人間は初めて見る。

彼の祖母は、父方母方どちらも健在だ。父方の祖母は、明るい茶色のカツラ——ウィッグというらしい——を被り、色つきサンングラスをかけ、きつちりお化粧する人だ。母方の祖母は、化粧つけは無いが、グレーの髪を上品に後ろで結び、なかなか素敵なお洋服を着、できるだけ背筋を伸ばしている。

目の前の奇妙な老婆は全く違っていた。黒マントから覗く顔の全体が皺だらけで、目の下も頬も肉が弛んでいる。皺と皺の間の皮膚もまるで干からびているようだった。真っ白な髪をそのまま垂らし、髪と頭の重みに耐えかねたかのように腰を曲げ、杖に体重を預けてまっすぐ光一達を見つめていた。その瞳も白く濁って輪郭がはっきりせず、実際に見えているのかどうかわからない。

「……辻の巫女？」

ミツルが暫く沈黙した後、こう呟いた。

「ツジノミコ？ このお婆さんのこと？」

「黒い霞から姿を現し、黒いマントを被った老婆。辻の巫女についてそう書かれているのを読んだことがあるわ……でも」

ミツルは眉間に眉を寄せていった。

「辻の巫女は、辻に出るはずよ」

「辻？」

「道が交差するところよ。辻の巫女はそこに現れて道行く人に予言を下すのよ。でも、ここは」

ミツルは首を巡らせて言った。

「なあんにもない、ただの河原よ。辻なんかじゃない」

「辻は目に見えるものだけとは限らんのじゃよ」

老婆が口を開いた。

「人と人との運命が交差するのも、私から見れば立派な辻じゃ」

「……ここで誰かと誰かの運命が交わろうとしているということですか？」

光一が尋ねる。しかし老婆はそれに答えず、ミツルの方に視線を移した。どうやら目は見えるらしい。

「お前は戻ろうとしているね」

ミツルはきつ、と辻の巫女を強く見て言った。相手が巫女だろうが何だろうが、こういう時の彼女の赤ワイン色の目の強さはかわらない。

「いいえ。戻ったりなんかしないわ。私は出て行くのよ。新しい人生に向かうの」

巫女は別に気を悪くした風もなく淡々と言った。

「いいや、お前は戻ろうとしているよ。それは悪いことじゃない。だけど、今まで母親と平穩に暮らしてきた道からは大きく逸れることになるね」

「望むところよ。『浜辺の村』で蔑まれて生きていったって仕方ないもの。ただ、私は出て行くこととしているのであって、戻るわけじゃないんだけど?」

巫女はミツルの疑問には答えずに言った。

「苦しいこともあるじゃろうよ。覚悟はできているのかい?」

「もちろんよ」

「ならばよい……」

巫女の話が終わりそうだったので、光一は慌てて巫女に話しかけた。

「あのつ、あの……さっき運命と運命の交差するところ、って仰いましたよね。あのう、それって僕とミツル……いや、ナイアのことですか?」

巫女はふふつと可笑しそうに笑った。この老婆が始めてみせる人間らしい表情だった。

「残念だが、そうじゃないね。本当を言うと、あんた達と別の者達の運命が交差するのはもう少し先じゃ。ただあんまり大きな辻になりそうなんだね。こちらのお嬢ちゃんの覚悟を確認してきたのさ」

光一はがっかりしてる自分に気が付いてちよつと戸惑う。僕はどんな答えを期待して、巫女にあんな質問をしたんだろう。僕とミツルとは運命の出会いだ、見たいな御託宣でも欲しかったんだろうか。光一は頬を赤らめる。

「それじゃあ、また、辻に差し掛かったら会いに現れることにしよう。それまで道中達者でな」

巫女の姿がだんだんぼやけ、黒い靄となり、それも空中に拡散してしまった。後には何も残らなかった。

ガラガラガラガラ——馬車の音が聞こえた。振り向くとその荷馬車は停泊している船に向かっていている。

ミツルが肩で大きく一息して言った。

「出航ね……」

時間の環

船の客はミツルと光一以外に、貨物の運搬を生業にしている者が数人だった。船長と皆は顔見知りのようで雑談を交わしながら船は進む。

河の流れは緩やかで、海からは風が絶え間なく吹き付けてくる。この船の大きな帆がその風を全身にはらみ、バサッバサッと空気を受け止める音とともに、船は軽やかに河を遡上していく。

「坊主、『海から来た者』か？」

「え、あ、はい。そうです」

荷運びの男達は気安く光一達にも声を掛ける。

「へえ。俺はこんな顔初めてみたぜ。本当にのっぺりしてるもんだな」

「俺は前にいつぺん見たことあるぜ。やっぱりこの船便で乗り合わせたんだ。それにお前、皇都に行けばこれほどじゃないけど、のっぺり気味の顔の奴だっているもんだ」

「あの。僕以外の『海から来た者』に会ったんですか？」

光一は勢い込んでその男に尋ねる。

「ああ、お前よりずっと年上で……そうだな、俺たちと同じくらいの歳の男だった。働き盛りだっていうのに随分くたびれた顔をしてたなあ」

「あの男か」

別の荷運びも話に加わる。

「俺もその船に乗り合わせてたよ。本当暗い顔をしてたなあ。『元の世界に帰りたくない』って言うのを、案内人に説得されてたっけ」

光一が複雑な表情で尋ねる。

「その人、帰りたくなかったんですか？」

「なんでも、向こうで首を吊って死のうとしたんだそうだ。踏み台に昇ったところまでは覚えてるが、その後気を失って、次に目が覚めたらこちらの海の中だった、とさ」

別の男が訊く。

「そいつはなんでまた、死のうとなんかしたんだ？」

「なんだか、働いてた先から首にされたみたいなのを言ってたがなあ。それが死ぬほどのもんなのかねえ。別に俺たちみたいに荷運びになるなり、宿屋を開くなり、別の商売をはじめりゃいいと思うがね」

そんな簡単な社会じゃないんだ、あつちは。光一は、その『海から来た者』に代わって説明してやりたかった。けれども光一自身も、大人の社会は大変だくらいしかわかっておらず、うまく説明することができない。

「でも、家族は待つてるだろうに」

「そうそう、それを言われてその『海から来た者』も帰る気になつたらしいがね。坊主も早く帰って親を安心させてやれよ」

「……はい」

僕だつて必ずしも元いた世界に戻りたいわけじゃない。こちらの世界とどっちがマシか比べているところなのだ。そんなことは言えず、光一は俯いてそう答えるだけだった。

「で、案内人がそっちの坊主か」

荷運びの一人がミツルに声を掛ける。

「は、はい。……あ、ああ、そうだよ」

ミツルは慣れない男言葉にちよつと苦戦気味だ。

「随分細っこいけど大丈夫か。旅は長いぞ」

「大丈夫だよ」

「見慣れない顔だなあ。俺は『煉瓦の街』に普段住んでるけど、お前に会ったことはないよ」

光一はひやりとする。ミツルの顔も少々強張っていたが、さりげなく返した。

「おじさんは、『煉瓦』の街のどっちに住んでるの？」

「上り船の出る側だ」

「わた……僕は、下り船降り場の方だよ。それも街外れに住んでる。たまたま浜辺に用事があつて行つて見たらこいつを見つけたんだ」

「ふうん。ま、俺も船を降りたらすぐ橋を渡つて自分の家に帰っちゃうからな。そっちの方をうるついたことは無い。知らない奴は一杯いて当然だな」

その男は笑つて話を収めた。光一もミツルも、控えめに大きく息を吐いた。が、次の言葉に二人はまた緊張する。

船長が言った。

「まあ、案内人が普通の奴で良かったよ。やっぱり『海から来た者』は海に現れるからさ、『浜辺の者』が案内人になることもあるんだ」
「浜辺の者？」

光一が嫌な予感と共に聞き返した。

「ああ、『砂浜の村』に住んでいる奴らだ。汚らしい連中だぜ」
「へっ」

別の男が吐き捨てるように言う。

「『浜辺の者』なんかと乗り合わせんのなんて、勘弁勘弁」
「あんな気味悪い連中と長旅なんて、俺なら途中で降りて船を変えるね」

「坊主が『浜辺の者』でなくて良かったよ」

一拍置いてミツルは答えた。

「……あんな連中と一緒にしないでくれよ」

彼女のワイン色の瞳に強い光が浮かんでいる。それは言葉通りあんな賤民と一緒にしないでくれという怒りでもある。が、それとともに、本当は彼女自身がその賤民に生まれついてしまったのだという悲しさや悔しさも含んでいた。

「そろそろ昼飯にしようぜ」

光一の緊張や、ミツルの複雑な葛藤をよそに、のんびりした声で

船長が言った。そして、話題は全く別のものに移り変わっていった。

「山よ、山だわ！」

と思わず女の子言葉で言ってしまったて、ミツルは急いで辺りを見回す。幸い近くにいたのは光一だけで、他には誰も聞いていなかった。

「ほら、山があるじゃない」

ミツル興奮した様子で光一を呼び寄せ岸の方を指差す。

「山……ていうか、丘じゃないかなあ」

船は出港してからしばらくは、見渡す限り水平な牧草地の中を進んでいた。ところどころ木が行儀よく一列に並んでいるのが見えたが、あれは防風のためだと客の一人が教えてくれた。

それがここにきて、地面に多少起伏がついてきている。けれども、三十分もあれば走って上り下りできそうな、牧草で覆われた丘を山だとは言いかねる。確かに、地平線ばかり見てきた目には、そんな丘でも次から次へと現れる風景は目新しいけれども、山だと思って興奮するのは間違いだろう。

「山っていうのは、もっと大きいものだよ」

「……そうか……」

ミツルが顎に拳をあてて何かを思い出そうとしている。

「確か、登つても登りきれくらい長い坂道があるのよね。で、木が
たくさん、それも無秩序に生えてるんでしょ。そして、熊とか狼と
かふくろうとか見たこともない動物が一杯いるのよね。うん。母さ
んの本にはそう書いてた。そうね、あれは確かに山じゃない」

真剣な顔で頷くミツルをみて、光一は笑って言った。書物でしか
山というものを知らず、いちいち現実と照らし合わせて大真面目に
確認する様がおかしかった。

「そうか、君は山を見たことがないんだもんね」

「あつちにはあったの？」

「うん。時々登ったよ」

「へえ。いいわねえ」

丘は次から次へと現れる。荷運びの男の一人が遠くから声を掛け
てきた。

「そろそろ『石の国』が近づいてきたぞ。牧草地が終わって森が見
えてきたら『石の国』だ」

いよいよ『土の国』を出ようとしている。男の言葉にミツルはぐ
っと唇を引き結んだ。光一の方も新たな局面を迎えて胸が高まる。

ところが、何度もこの河を行き来しているはずの他の客たちまで
もが、不安げにざわついてきた。

「何か……何か変じゃねえか」

「時間がかかりすぎる。いつたい何時になったら牧草の丘を抜けら
れるんだ？」

「いつもはこんなじゃないよな。もうとつくに『石の国』の最初の

港に着いている頃だ」

光一は男達の方に近寄って聞いた。

「何か……変なんですか？」

船長が厳しい顔で答えた。

「坊主、今あそこに赤い屋根の小屋があるよな。見えるか？」

「ええ、あれですね」

「覚えておいてくれ」

船長はそう言うと、そのまま無言で船を前に進めた。他の客も船長と光一のやり取りの後、固唾を呑んで船の行く手を見つめている。船は沈黙を載せて丘陵地を進んでいく。

「やっぱりだ」

船長が呻いた。さっきの赤い屋根の小屋が、行く手に現れた。

「さっきから何度も何度もあの赤い屋根の小屋に出くわすんだ」

船長は苛立たしげに叫んだ。その船長に客達が口々に疑問をぶつける。

「どういうことだ？」

「遡ってないってことか？ 船は進んでいるのに？」

「堂々巡りをしているような感じか？」

船長はがっくりと肩を落として答えた。

「あれだ。『時間の環』だ。あれに嵌っちまったんだ」

しばらく船の上は静まり返った。ややあってから誰かが尋ねた。

「『時間の環』……って何だ？」

「それに嵌っちまうと、同じ時間をくるくる回るんだよ。何というか時間が進まないんだ」

「船でいうと、同じところをくるくる回ってるってことになるのか」
「そうだ。俺も話だけは祖父ちゃんから聞いたが、こんなのは初めてだ」

船長はそう呟いてから、はっと顔を上げて客全員の顔を見渡す。

「護符を、護符を持ってない奴はいないか？」

誰も答えない。光一が船長に質問した。

「護符と『時間の環』と何か関係あるんですか？」

「『時間の環』が起きる原因は、はつきり一つと決まってねえ。だが、呪の力で起きることもあるらしい」

「誰の呪だよ」

他の客が聞く。

「『生命の河』を遡るんだ。命の流れと反対方向に移動しようっていうんだからな。上りの船っていうのはもともと魔術や呪に掛かりやすい状態なんだ。だから、護符を皆持つんだが……」

男の一人が上ずった声を上げた。

「お、おいらは護符を持ってるぜ。それにおいら、何回もこの河をその護符を持って往復してる。それでこんな目に遭ったことはねえ。だから、だから絶対おいらじゃねえよ」

その男がそう言ったのを皮切りに荷運びの者全員が口々に同じような主張をした。

「この船に乗るのが初めての奴は……」

その言葉とともに船上の全員の視線が光一とミツルに突き刺さった。

「何だよ、わ……僕だって護符は買ってるよ」

ミツルは大声で早速反論した。

「じゃあそっちの『海から来た者』か？」

光一が何か言う前にそんな声が上がった。

「違うだろう。『海から来た者』は皇帝に歓迎される。皇帝のご加護があつたっていいはずだ」

船長が言った。

「そうだな。じゃあ、やっぱり案内人の坊主だ」

「違う。僕じゃない！」

ミツルの抗弁を誰も聞かない。

「偽物の護符でもつかまされたんじゃないのか？」

「こいつか、こいつの親のどっちかが誰かに恨まれて呪を掛けられているんじゃないか？」

「とにかくこいつを置いていこう。大体『海から来た者』の案内なんて誰だっていいんだ。誰か俺たちの中で皇都まで荷を運ぶ者がついでにやればいい。船長、今度船を付けられるところがあつたらこの坊主を下ろしちまおう」

「嫌だ！ 降りない！ 降りたくない！」

蒼白な顔でミツルは叫ぶ。光一は自分の胸もドキドキするのを感じた。旅に出ること。それはミツル——いやナイアの積年の願いだっただけだ。差別、いわばイジメから逃げ出し、新しい人生を掴むための。ここで船を降りてしまつたら、彼女の千載一遇のチャンスが失われてしまう。どうしよう、と考える前に光一は声を出していた。

「あ、あの」

光一はミツルと男達が殺気立って言い争う声に、なんとか割って入った。

「あの……僕、僕は護符を持ってません。えっと、そんなのが要るって知らなくて」

ミツルが呆気に取られた顔で光一を見ている。そして唇を動かして何か言おうとするのを光一は目で制した。

「だから、僕が船を降ります」

「でも、お前が船を降りるならその案内人だつて船を降りてもらう

ぞ。この帝国では理由無く旅はできないんだからな」

「ええ。……ごめんね、ミッル。一緒に降りてくれるかな？」

「え？ あ、ああ」

光一とミッルのやり取りに誰かが声をかけた。

「謝ることなんかねえよ。まったく、船に乗るのに護符を持たせておかないなんて、なんて間抜けな案内人なんだよ」

「やれやれ」

そついいながら、男達はめいめい自分の座り心地のいい所へ散っていった。

しばらくたつて、船から飛び移るのに丁度良さそうな岩が見えてきた。船長は船を横付けて、言った。

「悪いな。ここで降りてくれ。ただ、ここは『石の国』の国境のすぐ近くなんだ。もし呪が『生命の道』つまり河にだけ掛けられてるんなら、歩きでだったら国境を越えられるはずだ。河沿いを探せば街道に出る。その道を行けば半日足らずで『石の国』の国境に出るはずだよ。じゃあな」

船は二人を降ろすと、再び河の真ん中へ戻り、風に吹かれて上流へ進む。二人は暫く岸に立ったまま船の行方を追った。船は広大な河の中をすいすいと運ばれていきだんだん小さくなって最後には見えなくなった。そして、二度と姿を現さなかった。

「なんで嘘なんかついたのよ？ あなた護符は持ってたじゃない」

船の影が消えると、ミツルがぽつりと言った。

「え？ うーん。でも、ああ言わないと君だけ船を降ろされてしま
いそうだったろう？」

ミツルは何か癢に触るといった表情のまま訊ねてきた。

「『煉瓦の街』でも随分私に同情してくれたみたいだね。私に
同情なんて結構よ。私は自分の道は自分で開くんだから」

そついうとミツルは河沿いに歩き始めた。光一はミツルの怒りに
戸惑いをかくせないまま、きょんとした顔で彼女の後に従った。

ミツルは少し肩を張り気味にして早足で歩く。その背を見ながら、
光一はこういうことだろうかと考えた。自分がイジメにあっている
ときも、何人かが解決するために世話を焼こうとした。担任の教師
だったり、保健の先生だったり。助けて欲しい気持ちはあるけれど、
僕は「イジメなんてありません」と彼らの申し出を突っぱねていた。
プライド、というそんな輝かしい理由ではなかったように思う。何
だか人の手を借りてしまうと、自分がひどく頼りない人間になって
しまいそうな気がしたから。そんな理由だった。

今ミツルが光一の手を借りたことに腹を立てているのは、これと
似た気持ちがあるからかもしれない。

「あの……」

ミツルが振り向く。

「君のためだけじゃないんだ。僕が、あの人達より君に案内して欲
しかったんだよ」

「どうして？」

「船の上で、僕より前に来た『海から来た者』の話をしてただろう？」

「仕事を首になって死のうとした人のこと？」

「うん。でも、船の人達はそんなこと大したことない、仕事を変えればいいって話してた」

「それで船の人たちが嫌だったの？ でも申し訳ないけど私も似たような感想しか無いんだけど……」

「会社っていうのは……うーん、何ていったらいいのかな。大きな商店みたいな所……これも違うかな。でもまあ、凄く大きな商店みたいなものに勤める人が多いんだ、あっちの世界は」

「ふうん」

「そこから出て行って一人になるっていうのは大変なんだ」

「そのカイシヤ以外に働き先はないの？ 農作物を作るとか荷運びをするとか」

「それはそれで元からそれを仕事をする人もいるし、会社に再就職が出来なかったら仕事を選んでいられなくて、初めてでもそういう仕事に就くことにする人もいると思うよ。でも……」

そうじゃないんだ、と光一地面を見ながら溜息をつく。

「何か一つの集団から外れるととても辛い社会なんだ、あっちは。単に仕事を見つけるかどうかっていうことの前に、その人は自分が所属していた集団から弾き出されたっていう事実が辛かったんじゃないかなって思う」

ミツルも光一のこの説明には興味を引かれたようだった。

「一人になると、ただ一人だっていうだけで、掌を返すような人もいるし……。何と言うか、その人がいた社会からは転落したかのよ

うな感じになるんだ」

「はぐれ者、って感じがしら」

光一はちよつと目を見開いた。

「そうそう、そんな感じ」

「それは確かに辛いわね。村に所属してなくて、胡散臭いものを見るような目で見られて。まるで母さんと私みたい」

「僕もそんな感じなんだ。僕達は学校っていう強制的に文字とかいろいろ覚えさせられる施設に行くんだけど、その中でグループが出来るんだ。でもグループに入れない人間、つまり、はぐれ者なんかは目に見えないかのように無視されたりするんだ」

「似たようなものね」

ミツルは天を仰いだ。

「あっちもこっちも人間て同じなのね。よくわかったわ。コーイチの話」

「うん、だから僕の気持ちを分かってもらえる人に案内人になって欲しかったんだ。だって、僕はここに居場所があったらこっちの世界で生きようって思ってるわけだから」

「ああ、そうか。私以外の人間が案内人だと『海の源流』から帰るしかなくなっちゃうもんね」

それから柔らかな光を帯びた赤ワイン色の瞳で光一を見て言った。

「私達、似たもの同士だもの。一緒に頑張りましょう。——さて、まずは歩いて『石の国』を目指さなきゃね」
「うん」

二人は微笑むと歩調を合わせて歩き始めた。そして間もなく細い小道は、きちんと整備された大きな街道に繋がっていた。

国境の二人

二人は丘陵地の中を、踏み固められた街道を通って進んでいった。街道から、少し離れて森がこんもり茂っているのが見える。ミツルは「あんなに木が一杯生えているのは見たこと無い」と言いながら眉間に皺を寄せてその森を見つめている。そんな物珍しげなミツルの様子が光一には面白かった。

街道が丘陵に合わせて登りになったり下りになったりする。それに合わせていつの間にか前方に灰色の大きな壁が見え隠れするようになった。

近付くと、その壁は大きく長方形に切り出された石を積んで造られているのが分かった。壁の端の方は良く見えない。うんと遠くにある青い山影に吸い込まれるようにただ延々と続いている。

街道はその壁に穿たれた大きなトンネルに続いている。そこに鎧をつけた兵士が立っていて、出入りする者達に声を掛けていた。ここが「石の国」の国境のようだった。

光一は不安になって、石壁のそばまで行く前に足を止めた。ミツルが怪訝そうに振り向く。

「あのさ……。僕達は、呪っているのを掛けられて、船では『石の国』に入れなかったんだよね。ここはどうなんだろう？ 入れるのかな？」

「入ろうとしてみなきゃ分らないじゃない」

「そりゃそうだけど……。僕、まだ状況が飲み込めてないんだ。こちらの世界に呪っているのがあるんだね」

「みたいね。私も本でしか知らないけど」

「……どこかでこんなやり取りしなかったっけ？」

「多分、乗船場の護符売り店の前でしたわよ」

「そうだ、護符！ あれ僕達二人とも買ったのに駄目だったってこと？」

「そうみたいね」

「でも、他の人たちは護符があるから大丈夫って言うてて、事実僕達が降りたらちゃんと河を遡っていったんだよね？」

「そうね」

ここでやっとミツルは光一に向き直った。

「あなたか私、あるいは両方に呪が掛かっているのかもしれないわね。護符が守りきれないような呪が」

「護符が守りきれないって……」

「前に、河沿いの『土の国』『石の国』『森の国』以外に、河から離れたところにいろいろ蛮族がいるって話をしたでしょう。その全てが知られているわけじゃない。皇帝に従ってるのは一部の蛮族に過ぎないわけだし。だから未知の蛮族が何か私達の知らない呪を用いることはあると思う。知らないものは防ぎようないでしょ」

「まあ、そうだけど。でも、話からするとその蛮族の人たちって河から遠いところにいるんだよね？ そこからでも掛けられるものなの？ それにもっと根本的な問題としてさ、僕達に掛ける理由があるの？」

「私に聞かれたってわかんないわよ。もう一つの可能性は、船長も言っただように皇都の貴人の誰かが掛けているのかもしれない。皇帝は『海の源流』を護る存在なの。その皇帝に連なる貴人の位によつては、ただの護符を破る程強い呪を河に掛けることもできるかもしれない。ただ、それがどうして私達なのかはやっぱりわからない」

「そもそも呪がかかっているのが、僕なのか君なのか、あるいは両

方になのかもわかんないよね」

「私ってことはないと思うけど……」

ミツルは当惑した顔で言う。

「でも、僕だって……。僕も自信がないけど、君のお母さんや船の人の話では『海から来た者』は皇帝に歓迎されるそうじゃないか」
「あなたが『海から来た者』の中でも特別だったりとかするかもしれないわよ？」

「特別って……？ 例えば？」

「……それは……わかんないけど」

「それじゃあ……」

不安げな顔で光一は更に言い募ろうとする。けれども、ミツルは苛立たしげな様子を隠さず、強い口調で遮った。

「とにかく」

ミツルの語気に押されて光一は口を噤む。

「私とあなたであの国境の門をくぐって見ましょ。そしたらまた考える材料が出来るじゃない」

「でも……」

「んもうつ」

ミツルが腰に手をあてて大きな声を出した。

「ウジウジ悩んでたって仕方ないでしょ！」

「だって……」

「じゃあ、早いとこ試してみて白黒つけましょう。駄目だったらそ

の時はその時よ」

「その時って……駄目だったらどうするの？」

ミッルは盛大に溜息をき、そして光一に壁を指差して見せた。

「夜にでもこっそりこの壁を登ればいいじゃない。私が本で読んだ歴史書によるとね、共に帝国の配下に下る前に『土の国』と『石の国』が戦乱状態だったことがあるの。この積み石の古さからするときっとそのときに作られた古い城壁だと思うわ。この壁、高さが余り無いでしょ。騎馬の進入を防ぐのが目的だから」

確かに、この石積み壁の高さは光一たちの身長は二倍弱といった感じだった。ロープとか調達すれば乗り越えるのは不可能ではないかもしれない。

「君って凄いなあ」

光一は歴史の勉強が苦手だったから、自力で歴史の知識を身に付け、更に目の前の事態に当てはめられるミッルを素直に賢いと思った。そして、いざとなったら乗り越えてしまえ、なんて考えつく大胆さにも感心した。ミッルには頭脳も度胸も備わっている。

「凄いよ」

光一は心から感心して繰り返した。ミッルは満足そうににんまりと笑うと

「さ、行ってみましょ」

と歩き出した。

「――行くわよ」

ミツルは光一の腕をひつつかみ、兵士が守るこの国への入り口に向かう。

「やあ、君たち。ちょっといいかな」

気がつかなかったが兵士の隣に小机があつて、こざっぱりとした身なりの男が座っていた。手招きされて二人はその小机の前に立つ。

「ええっと、まずお名前は？」

男は何か書類に書きつけながら光一とミツルに質問する。どうも入国審査の係員といったところらしい。

「僕は『煉瓦の街』のミツル。浜で『海から来た者』を拾ったので皇都に向かっているところです」

落ち着きすぎているほど落ち着いて、ミツルが淀みなく説明する。
「拾った」なんてまるで物扱いなのは気に掛かるが光一も続けて自分の名を告げる。

「あの、『海から来た者』の光一です」
「へええ」

入国審査官はじいっと光一の顔を見つめている。

「君が『海から来た者』かあ。会ったことがある人間なら知り合っているけど、僕が実物を見るのは初めてだなあ。やっぱりのっぺり

しているんだね」

とは言うが、この入国審査官も周りにいる兵士も「土の国」の間ほど彫りは深くない。日本人でも「濃い」顔、ちよつと昔でいう「バタ臭い」顔なら、ここの国の人と並んでも違和感がないかもしれない。肌の色の方は透き通るほど白くて、これは日本人とは違ふけれども。そう言えば、ミツルの顔立ちも「土の国」より「石の国」の人に近いような気がする。お母さんはもともと「石の国」の人だったのかな。

そんなことをぼんやり考えていた光一は、次に入国審査官が何気なくした質問に、一気に冷水を浴びせられたような気がした。

「どうして『海から来た者』と案内人の君がこんなところにいるの？ 『煉瓦の国』から皇都行きに船に乗らなかったのかい？」

——時間の環については言わない方がいい。でないと怪しまれる。二人は顔を見合わせ、このことを目だけで確認する。

変に目をつけられてしまうと、ミツルが男の子の格好をしていることや、名を偽っていることまでばれてしまうかもしれない。これがばれれば、ミツルは「砂浜の村」に、光一は「海の源流」に直行だ。それは困る。

「船には乗ったんです」

ミツルが答えた。光一はそつとミツルの顔を伺う。かすかに顔を強張らせているが、ミツルはすらすらと答えた。

「でも、僕、船に乗るのが初めてだから気分が悪くなっちゃって。

それで途中で降ろしてもらったんです」

「ああ、船酔いしちまったんだな。そりゃ大変だった。じゃあ、ま、この街で休んでまた船に乗るんだね。乗ってるうちに慣れるものだよ」

入国審査官は引き出しの中から地図を取り出し、ご丁寧にこの国境の門と最寄りの船着場に丸をつけてミツルに差し出した。

——ここを通り抜けられても、船に乗ったらまた時間の環に嵌るんじゃないだろうか。乗るたびに時間の環に嵌っていたら、光一とミツルの二人連れは人の目を惹いてしまうだろう。

「あの……その船酔いつて本当に辛くつて。だから、船以外に皇都まで行く方法はないでしょうか。例えば歩いていくとか」

ミツルが本当に困った顔をし、苦しそうに手を胸に当てて入国審査官に訊ねる。

「皇都まで歩いていくつて？ さあてそんな奴聞いたことないなあ。船に乗りなさいよ。『石の国』はいろいろ産業が盛んだからさ、街ごとに港があるんだ。ちよつとずつ乗つて、気分が悪くなったら降りて休めばいいよ」

「でも……あんな気持ち悪い思いなんか、もうしたくない……」

ミツルは眉間に眉を寄せ、吐き気を抑える仕草をしながら訴える。

「うーん。まあ、街と街の間には当然街道があるからなあ。それを歩いて『石の国』の中を皇都の方角に向かうことはできるがねえ。ただ、『石の国』と『森の国』の間にはとても高い山脈が聳えていてねえ。普通の者はまあ山越えなんかせずに船に乗るもんだよ」

「普通じゃない人は山を越せるんですか」

と光一が尋ねた。富士山くらいなら、しっかり装備などを整えておけばなんとか越えられるかもしれない。小学校の時、家族旅行で富士山に登ったことを自慢していたクラスメートがいたことを彼は思い出していた。

「何か事情のある人間。まあ、犯罪者だな。そいつらが逃亡するときに使う。手配書は真つ先に河沿いの港に出回るからね。そうそう、それから皇帝軍が山を越えて進軍することもある」

「河を使わないで？」

「そう。その時々編成によるけどね。大編成の時には馬やら大砲やら寝泊りする天幕やらいろいろ持つていくから大きな軍の船を使う。でも国境の巡回くらいなら、兵士や馬の鍛錬を兼ねて少なめの編成で山を越えることもある」

「……………」

光一もミツルも考えていることは同じだった。それなら自分たちだって山越えができるかも知れない。しかし、そんな二人の考えを見通すように入国審査間が言った。

「言つとくけど山越えは危険だ。訳ありの者が通る道だ。おまけに皇都で何か金目のものを盗んだ奴も通るからそれを狙った山賊も居る。子供二人で越そうなんて危険すぎる」

「わかった」

ミツルが頷きながら言った。

「『石の国』を歩いて、あとは船に乗ることにする」

「そうそう、それが無難だよ」

それじゃ、と入国審査官はトンネルの出口をペンで指し示した。

「『石の国』にようこそ」

ミツルは自然な笑顔で、光一はややぎこちない笑顔でそれぞれ会釈してトンネルの出口へと向かった。

「じゃ、私が先に入るわよ」

当然のごとくミツルはそう宣言すると、暗いトンネルから明るい陽光の注ぐ外へ踏み出した。何も変わったことは起こらない。

「……それじゃ、僕も」

目を瞑って光一も日差しの中に飛び込んだ。そして何も変わったことは起こらない。

「……大丈夫ってことかな？」
「もう暫く歩いてみましょう」

ミツルが先に歩き出した。道路は四角い平らな石で舗装されていた。アーチを多用した石造りの建物が街道沿いに続いている。いくつかの建物はテラスを持ち、ヨーロッパのオープンカフェのように店の外にも椅子とテーブルが並べられていた。

いかにも旅人といった風情の、ちよつとぼさぼさの髪と草臥れてはいるが頑丈そうな靴の若い男が、大きな荷物を脇に置いてマグカップで何かを飲んでいる。この街の人らしい普段着の老夫婦が、ガラスの器で鮮やかな黄色のお茶を飲みながら談笑している。休憩の

時間になつたらしい兵士が椅子の一つにどさりと座り込むと、おおい、と店の者を呼んだ。

休憩中の兵士の注文を取り終えた店員を、ミツルが捕まえた。

「あの。僕達『海から来た者』とその案内人なんですけど、ここでお茶か何か飲めますか？」

五十がらみの頭のはげた店員——どうも店主のようだ——は珍しげに光一の顔を見、それからにこやかに答えた。

「ええ、できますよ。確か帝国府が後で払ってくれるんですよ。大丈夫です。どこでも座つて下さい。今日はナキユールのお茶がお勧めですよ」

「じゃあ、それを二つお願いします」

そう言つてミツルは手近の椅子に腰掛けた。同じテーブルに光一も腰を下ろす。

「今のところ、特に時間が巡つたりしてなさそうだね」

「そうね。上手くいつてるみたい」

店主がお茶を運んできた。向こつこの老夫婦の楽しんでいる鮮やかな黄色のお茶だった。

「甘いね！」

光一はそのお茶を一口啜ると嬉しそうに小さく叫んだ。今までの食事や飲み物は決して口に合わないことはなかったけど、質素で味の楽しみとか考えられていないものばかりだった。

「ナキユールっていうのはつる草よ。葉を干してお茶にすると黄色い色が出る。濃く煮出すと染料にもなるわ。甘みはつるの部分にあるの」

「『土の国』にもあった？」

ミツルはコップに口をつけたまま首を振る。

「母さんの本に書いてあったの。母さんの本には植物に関するものが多かったのよ。本で見ただけで私も実物を飲むのは初めて。本当に甘いわね」

甘いものは人を幸せな気分にする。光一は珍しく楽観的な予想をした。

「もう大丈夫そうだね」

「そうね、きっと大丈夫」

ミツルもにつこり微笑む。緊張のほぐれた彼女は、男の子の格好をしていてもやっぱり可愛い女の子だった。

「結局、呪は河にしか掛かってないみたいね。無事国境を越えられたから、呪が私に掛かってたのか、あなたに掛かってたのか、それとも両方なのかはわからないままだけど」

「まあ、しばらくはこのまま『石の国』を歩いて『森の国』を目指せばいいんだよね」

「そうね。『森の国』に入るのはどうするかは問題だけど。まあ、『石の国』でいいところが見つかったらそこで旅を止めればいいわけだし。とにかく先の話よね」

時間の環に嵌って以来、旅の行方が怪しくなって二人は緊張の連

続だった。もう、今日はここでゆったりと寛ぎたい。目ざといミッ
ルはこの店の入り口にベットのマークが掲げられているのを見つけ
た。今夜の宿はここで決まり、だった。

強いられた旅

先ほどの店主が宿の主でもあった。主は、ミツルが「浜辺の者」とは知らないのです、二人を三階建ての建物の最上階にあつて見晴らしの良い、宿の中でも上等な部屋に通した。「何か不便なことがあったらなんでも言つて下さいよ」と愛想笑いを残して彼は去つていった。

きちんと支度されたベッドに早速ミツルが仰向けに倒れこむ。

「すつごーい。こんなにふかかなベッドなんて初めてよ」

今まで見た中で最も無邪気な笑顔で彼女は感嘆の言葉を洩らした。それからベッドの上を嬉しそうにコロコロと端から端まで転がって楽しんでゐる。

光一も腰を下ろしてみた。そして少し怪訝な顔をする。いや、確かにこのベッドは快適といえは快適なんだろうけど。でも日本で家族旅行のとき泊まるホテルのベッドなんかもっとスプリングが効いているし、木製の枠に布団を敷いた自室のベッドだってもうちょっとふわふわしていたような気がする。

それでも、ミツルがこのベッドに有頂天になる気持ちも分かるのだ。崩れそうなほどみすばらしい「砂浜の村」の家。馬糞の匂いと馬のいななきのせいで熟睡できなかった「煉瓦の街」の馬小屋。光一にとってそんな貧しい宿は珍しい体験だけれど、ミツルにとってはそっちが日常だったのだ。

ミツルは今度はうつ伏せで綿のシーツにほお擦りしている。相変

わらず嬉しそうだ。光一と目があうと、にっこりと可愛らしく微笑む。それにつられて光一も頬を緩めた。

ベッドで一通り遊び終わって満足したミツルは、今度は窓から見える景色に夢中になった。

「随分高いわねえ」

ちよっただけ身を乗り出して宿屋の建物の真下を見る。さっきまで座っていたテラスのテーブルや椅子が小さく見えた。

「ちよっと……高くて……何だか怖いわ。こんなところで眠れるかしら？」

ミツルは眉を寄せて光一に問いかけた。その様子が本当に不安げで光一は少しばかり驚く。船長や入国審査官の際どい質問にも、ミツルはいつも冷静沈着にそれらを上手くかわしていた。壁があつたら乗り越えてしまえ、なんて思える度胸もある。そんな強い彼女が、たかだか三階建ての高さに怯えるのは意外だった。

「そっか……。君はあの砂浜の家か『煉瓦の街』の馬小屋しか知らなくて高い建物は初めてだもんね。大丈夫だよ。この建物は石造りで頑丈なんだから。寝てる間に床が抜けたりなんかしないよ」

それから光一は、自分の元居た世界には三階どころか百階近い建物だつてたくさんあるんだ、と話した。ミツルはただただ感嘆のため息を洩らすだけだった。

「いろんなものが見える。見たことないものばかり」

ちよつと神妙な口ぶりでミツルが言った。

「あれが……山？」

ミツルに続いて光一も身を乗り出して景色を見た。二人が通つてきた城壁の向こうはなだらかな丘陵地で、この宿屋も含めた街並みもその地形に乗っている。けれどもこの穏やかな地面は、街の外れでこんもりとした山々に取り囲まれるようにして、その先を阻まれていた。

緑鮮やかな手前の山の奥には、深みがかつた緑の山が続き、さらに連綿とした山影が奥に奥に幾重にも重なっている。最奥に見える峰々は青く波打つ平面的な影となつて見渡す限りの地平線を縁取っていた。

隣でミツルが小さく溜息をつく。山肌に迫る城壁や人家と比べて見て、ミツルは「山」とは「丘」よりもずっと大きいものなのだと納得したようだった。

「私、こんな景色を見るの初めて……」

そう呟いたまま、彼女は窓から離れようとしなない。山々を照らす陽射しが傾き、空がすみれ色から群青色へ変じ、それにつれて山々が黒々とした塊に姿を変えても、ミツルは飽きることなく窓からずっとその光景を見つめていた。

「おいしい」

夕食を一口食べたところでミツルが小さな歓声を上げた。彼女の赤ワイン色の瞳にもしっかりとした喜びが浮かんでいる。

「『石の国』じゃ香辛料も沢山とれるって本で読んだことがある。でも今日、森や山を見て実感したわ。『土の国』じゃ植物は人間が手を入れないと育たないけど、この『石の国』じゃあれだけ草木が勝手に生えてるんだもの。香辛料だって一杯取れるわけよね。そして、同じ肉料理でも香辛料があるだけでこんなに美味しくなるなんて！」

ミツルはもう、うつとりとした顔をしている。ただ、それを見て光一は複雑な気持ちになる。

今までこちらの世界の食べ物を特に不味いとは思わなかった。というより、味のこともなんか考えてられなかった。せいぜい異世界でもとりあえず食べられるものが手に入るのに安心してくらいだった。

確かにここの宿屋の夕食は今まで食べてきたものに比べれば断然洗練されていると思うけど。でも、光一が東京で両親と食事に出掛けたレストランの料理と比較するならば、かなり大雑把な料理に思えた。

「何、コーイチ。美味しくないの？」

「……ええと」

光一が言葉を選んでいる間に、ミツルはさっさと見当をつけてしまった。

「あちらの世界の料理の方が美味しい？」

「……う、うん」

ふうつと息を吐いてミツルは光一に尋ねた。

「何だかあちらの世界はいい所のように思えるんだけど。お料理は美味しいし、あちこち旅行に出掛けられて、学校とやらでは字や勉強を教えてくれる。なんか私からすれば理想郷に思えるわ。それでもコーイチは帰りたくないの？」

ミツルのその問いは、光一がこの宿に入ってきた時からずっと考えてきたことに近いところについているように思われた。

「確かに……。僕は君に比べて恵まれてたと思う……。ここベッドより気持ちいいベッドで寝ていたし、このお肉より美味しい料理だった一杯食べてきた。それに、僕の父親は旅行が好きで……。登山もよくしたし、海にも行った。それから向こうには、動物とか植物とかいろいろ珍しいものを見物するための施設があって、親と一緒にいたり、学校の行事で行ったこともたくさんある。だから、僕は君より恵まれた生活をしてたし、君よりもっといろんな物も見聞きしてきた……。とは思う」

本当に自分は恵まれていた。光一はそう思う。でも——今ここで比較しているミツルが持っているものを、自分は持っていない——そんな気がしてならない。

文字を知ることと旅をすることも禁じられて、それでもミツルはあの廃屋のような家で、床下に隠されていた書物をおそらく一心不乱に読み耽ってきたに違いない。その様子は、きつと喉の渴いたものが水を求めるかのようなものだっただろうと光一は思う。

念願かなって「海から来た者」が現れ旅に出ることになり、ミツルは今まで書物でしか知らなかった世界を目の当たりにしている。

その姿は、いつも瑞々しい興奮に満ちており、新しい発見を身体全体で喜んでるように見える。そしてそこには、光一の知らない幸福があるように思えるのだ。

「どうしてなのかな？」

光一は自問したつもりだったが言葉は外に出てしまい、当然ミツルは怪訝な顔をする。

「なにが？」

「君を見ていると、確かに旅や勉強は本来楽しいものなんだろうな、って思えるんだけど……」

「楽しくなかったの？」

「……楽しさを感じる自由がなかったというか……。上手く言えないんだけど」

光一は食べるのをとくに止めてしまい、自分の考えを探ることに専念していた。

「旅行だって子供の頃は単純に喜んでいただけ、今じゃ親が行きたいていうのに付き合う、みたいな感じだし。学校は……小さな時から行くのが当たり前のものだし。勉強だって、何を知りたいか自分で考える前に勝手に教えられるんだ。それに勉強するためには学校の教室って部屋に詰め込まれて、そこでの人間関係に神経を磨り減らなきゃならないし」

「学校っていうのに行かないわけにはいかないのね？」

「いけない。ちょうど君たちが旅にでちゃいけないのと同じように」

「いつも群れてないといけないわけね。うーん。それって、牛や羊がたくさん柵の中に閉じ込められているような感じがしら？」

「……………」

「家畜って最初から最後まで人間の目的に合わせて生きるでしょ。で、畜舎にぎゅうぎゅうづめにされて、餌だつて食べたいかどうかお構いなしに強制的に与えられる。ときどき放牧されるけど、群れてないといけない。逃げ出さないように飼い主が見張ってるしね」

「まあ、確かに家畜みたいなもんだね……」

光一が暗い気持ちでいる間に、ミツルはまた別の考えが閃いたらしい。

「でも。また話を元にもどして悪いんだけど。群れからはぐれて一人ぼっちになつても、それでも構わないほど楽しいと思えることや勉強したいことがあればいいんじゃないの。要は貴方の意欲の問題で。貴方にしたいことや学びたいことはなかったの？」

「……………」

光一はテーブルの上に視線を彷徨わせながら自分の心を探ってみる。子供の頃の他愛ない夢はともかく、大きくなるにつれて何かになりたいたとか、何かを知りたいとかそういった欲求からは遠ざかってしまったような気がする。それに、最近のあちらでの毎日はイジメを遣り過ごすのに精一杯で、そんなことを考える余裕なんてなかった。

「……考えたことがなかった」

「今も？」

「今は……。こちらの世界でどこか居心地のいいところを探してみたい、って思ってる」

光一の言葉にミツルははっと何かに気がついた顔をした。――危ない、危ない。ミツルは自分が重大なミスを出かすところだったのに気がついた。光一に「あちらの世界でやりたいこと」を見つけ

られると困るのだ。だって、ミッルが旅するには光一が必要なんだから。

「そ、そうよね。こっちでどこかいいところを探しましょう」

ミッルはグラスを持ち上げ、光一に微笑みかけた。

「とにかく、『土の国』脱出成功おめでとう。私達の自由に乾杯！」

光一も慌ててグラスを持ち上げて応えた。

「乾杯」

そうして二人は出てくる料理についてあれこれ喋りながら夕食の時間を過ごしたのだった。

朝食をとりテラスへ出た光一は、空を見上げた。

空の色は、砂浜から見上げたときよりも一層青みが深くなっている。ところどころに浮かぶ雲の日にあたる部分はくつきりと白く、青々とした空と見事なコントラストをなしている。一方雲の陰になっている部分はどんよりとした鼠色で、そのため雲はしっかりと立体的な存在感を示していた。

「もう夏が来るね……」

光一の言葉に、ミッルも光一を真似て空を見上げる。けれどここに着目すれば夏の予兆を捉えることができるのか分からないのか、大真面目な顔で天を仰いでいる。

「『砂浜の村』の時より空の色が青いだろう？ 雲も大きいしモコモコしてる」

「ああ、そうね」

それから、と光一はテラスの方を見た。ミツルもそれに倣う。

「陽射しが強いから、建物や木の陰も濃くなってる」

「本当！ はっきりしているわね」

ミツルは自分たちの席をさっさと決めると、椅子を引きながら言った。

「日の光が強くて、眩しいくらい」

けれど、ミツルのその笑顔の方が光一にはよほど眩しかった。今日も彼女は新たな発見の喜びに満ちている。

運ばれてきた朝食も、光一には黒っぽいパンから白いパンに変わっただけのような気がするが、彼女は物珍しげにしばらく手にとつてあれこれ角度を変えながら眺めている。

「今日は夏物を買に行こうか」

朝食を前に浮き立つ気分で光一がミツルに提案した。

「夏物って、袖は半分までの服のこと？」

「そうだよ。それから帽子も要ると思う」

「帽子は、頭に被るものよね。日除けの為に」

光一の言葉に、いちいち頭の中で事典の頁を繰っているらしいミ

ツルの姿がおかしかった。

「『砂浜の村』にははつきりした夏がなかったんだろうけど、ここから先は暑くなりそうだからね」

うん、と神妙に頷いてから、ミツルは朝食に取り掛かった。ひどく真面目な様子が光一には微笑ましかった。

服屋で夏物の服やつばの広い帽子を買い整え、その店のドアを閉めたとき、ミツルがふうーっと長い溜息をついた。がっかりした様子は隠せない。今度はドアから二、三步離れて窓から店の中を覗き込む。でもそれもほんのわずかの間のことで、やつぱり気落ちした様子でドアの前で待っていた光一に近付いてきた。

「よっぽど欲しかったんだね。あの服——」

もう一度溜息をつく、ミツルは悄然と歩き出した。光一もそれについて行く。

「分かつちゃった？」

「うん。でもお店の人にはわからなかったと思うよ」

「そりゃそうよ。手に取るどころか、遠くからちらちら眺めてただけなんだもの」

店から離れて、ミツルは三度目になる大きな溜息をついた。

「素敵なドレスだったわ……」

宿の亭主に教えてもらった服屋はすぐ分かった。石積み建物だが扉の横だけ四角く漆喰を塗り、そこに色々な形の服の絵が書いてあった。文字のないこの社会ではこれで看板とするようだった。

明るい緑色に塗られた扉を開けると、真正面の奥のほうから「いらつしやい」と声が掛かった。夏に近い日差しの明るい通りから、暗い部屋に入って目が慣れるのに時間がかかったが、ドアの真向かいに机があり、そこに男が座っているのが見えた。

「ひよつとしてお客様、『海から来た者』でいらつしやるのですか？」

やはり光一の顔は珍しいもののようにらしい。光一は質問される前に説明を始めた。

「あの、案内人が船に弱いものですから途中で船を下りたんです。それで、この街で休養しながら夏の支度を整えようと思って」

男は立ち上がった。店内は広く、店の右側は男物で左側は女物と分かれていた。男は右側の方に歩きながら光一に話し掛ける。

「二人とも背格好が同じくらいだから、同じようなのを二人分用意したらいいでしょうね」

そついいながら、棚から衣類をあれこれ引つ張り出して並べる。ミツルはすっかり男の子だと思われるようだった。「良かった」と目でミツルにそう告げようとした光一は、ミツルが何かを気にしているのに気付いた。彼女はちらちらと他の物にもせわしく視線を巡らすものの、結局は一箇所を見ようとしている。

綺麗なワンピースが、人の形をした木の板に着せられていた。落ちて着いたピンク色に、全体に優しい色合いの花柄模様が散っている。布地は随分柔らかいもののようで、腰から下は空気を孕むようにふんわりと広がっていた。襟元には派手過ぎない上品なレースがあしらわれていて、本当にとっても女の子らしい可愛い服だった。

ミツルの顔をよく見れば、彼女がその服に駆け寄って手に取りたいと思っているのがわかる。けれど、少年の格好をした今、そんなことができるはずが無い。もちろんそれは当の本人が分かっていることで、だから一生懸命見ない振りをしているのだった。

店主が見繕ってくれた夏の衣類と帽子二人分を抱えて店から外に出て、やっとミツルは落胆した顔を隠さなくて良くなった。——そしてミツルは出会って初めて光一に愚痴を零し始めている。

「とても可愛らしかった……。共衣のリボンもついてたわよねえ」

「いや、僕はそこまでは気がつかなかったよ」

「そお？ あの服で髪を結ってそのリボンを付ければきつととって素敵だと思っ……あ、でも髪切っちゃったのよね……」

「髪なんて、また伸びるよ……」

光一はなんとか励まそうとする。女の子の服に対する思い入れに詳しいわけじゃないけれど、とにかくミツルを元気にしてあげたかった。

「皇都に行くまでに、どこかいいところが見つかったらまた女の子に戻ればいいじゃないか。ていうか、ずっと大人になるまま男の格好ってわけにいかないし。いずれ必ず女の子に戻る日がくるよ」

「そう、そうよね」

「それにここは国境の街なんだろう？ きつと首都にいけばもっと沢

山服屋があつてさっきのよりもっと可愛い服が売ってるかもしれないよ」

ミツルが突然光一の腕を両手で掴んだ。女の子にそんなことをされるのは初めてで光一の顔は真っ赤になる。もつとも、彼女はそんな彼の事など全然気に留めない。

「コーイチって頭いいわ！　そうよね、あともう少し頑張ったら私達自由になれるんだものね」

更に顔を赤くする光一に構わず、そして光一とは全く別の理由でミツルはその頬を薔薇色に染めていた。

「あのう……」

夕食を一階の食堂で済ませた光一とミツルに宿の主人が話しかけてきた。この街のあちこちを買い物したり散策したりして過ごして、何日目かが経っていた。彼は少しかり言いにくそうな口調だった。

「あの、気を悪くならずに聞いていただきたいのですがね。一体いつまでこちらに滞在されるのですか？」

「もうちょっといようかと思つてますが……何か不都合なんですか？」

ミツルが尋ねる。

「不都合なのは私というよりも、お客様の方では……。お客様は皇都に向かう旅の途中なのでしょう？　お急ぎにならなくていいので

すか？ 特に」

宿の主人は光一の方を見て続けた

「『海から来た者』でいらっしゃるあなたの方は、あちらでお待ちの方もいらっしゃるでしょうに。こんなところでゆっくりしている場合ではないのでは？」

とはいえ、五十がらみの大人の彼は人それぞれ事情があることくらいは分っているようで、それ以上光一達の都合については突っ込んで訊いてこなかった。その代わりに自分の事情を説明する。

「こちらといたしましても、あなた様達のご滞在の代金をですね。帝国府に申請して交付してもらうのに、あまりに長逗留でございますと……。旅の目的からみて不自然に長い日数分を請求致しますと、請求する私が疑われてしまうわけでございまして……」

宿屋の主人の言いたいことは二人にもすぐわかった。二人が滞在した日数分を帝国府に請求しても、余りにそれが多いと宿屋の主人が架空に水増し請求しているのではないかと容疑を掛けられかねない——宿屋の主人はそう訴えているのだ。

「わかった。じゃあ明日出発するよ」

ミツルがそう答え、光一も頷いた。

「僕達はこの旅を『しなくちゃなんない』立場なんだね。権利じゃなくって義務として」

「そついうことね……」

二人はそれぞれのベッドに腰掛け、伏目がちに言葉を交わした。

この旅は真つ直ぐ皇都を目指さなければならない。一箇所に長く留まることはできないし、皇都を目指すルートから外れることもできない。もし皇都に向かうのに不自然なほど長逗留をしたり寄り道をしたりすれば、宿にも泊まれないし物も買えない。宿屋も店も後で帝国府に請求書を出して通らないとわかっていれば、二人を客扱いするはずないのだから。

具体的な目的があつたわけではないけれど、二人は何となく、この先気に入つたところがあつたらそこで旅をやめて暮らして行こうと思つていた。そんなことをただ漠然と思つていただけで、今まで二人は単純に「土の国」を出て得られた「自由」を楽しんでいたのだ。

しかし、このままでは、二人に皇都まで最短最速で向かい、そして光一は『海の源流』からあちらの世界へ、ミツルは僅かの報奨金を貰つて「砂浜の村」へ戻るしかない。

ミツルは唇を噛み締めて床を見つめていた。時折その両目に涙がこみ上げる。零れ落ちそうになるたびに彼女は乱暴に拳で顔を拭く。光一も暗い顔で俯いていた。またあちらの世界に戻るのか……。彼は何度目かになるか分からない溜息をこぼす。一人ぼっちで誰にも顧みられない、そんな扱いをうけるあの世界に……。

「ちょっと」

しばらく経って、ミツルが声を上げた。彼女は中空の一点をきつ、と睨み据えている。彼女の赤ワインの瞳に強い光が宿り、炯々と光っていると感じられるほどだった。

ただ声が裏返ってしまったので、もう一度息を整えてから彼女は言葉を続けた。

「ちよつと、思いがけない展開になっただけよ。今まで予想してなかっただけ。考えたことがないから分からないけど、考えればきつと分かることが出てくるわ」

彼女は乱暴に毛布をベッドから剥ぎ取り、荒々しく中に入り込んだ。

「もう寝ましょ。うじうじ考えていたって仕方ないもの。今は驚きが大きすぎて、落ち着いて考えるところまで頭は回らない。明日になればまた局面が変わるわ。明日思いつかなかつたらまた明日。いつかいい考えが浮かぶかもしれない」

光一もベッドに入った。ミツルのこの旅への思い入れは光一よりずっと深い。来るかどうかわからない「海からきた者」を待ち続け、手に入るだけの知識を頭に叩き込み、何より「自分は絶対自由になつてみせる」という強い意志を鍛えてきたのだから。大丈夫だ。彼女がいれば。彼女が何か見つけてくれる。いや、自分も一緒に探す。

光一は大きく息を吐いた。とにかく明日だ。明日思いつかなければまた明日。今はとにかく落ち着いて、その明日か、明日の明日に備えよう――。

二人はそれぞれ手元の灯りを消した。部屋は暗くなる。けれども、二人ともなかなか寝付けなかった。特にミツルの方は、ああ言っていないが、今すぐ名案を思いつきたくて仕方がない様子で、何度も何

度も寝返りを打っていた。光一の方もそんなミツルの様子を見ると
やっぱり考え込んでしまう。

二人はそのまま暗い部屋で目を開けていた。窓から差し込む月の
影が微かに部屋を照らす。ミツルは寝返りをやめてそのかそけき光
をじいっと見つめ、光一はそんなミツルを見ていた。二人は、その
月光に慰撫されるようにして、少しずつ眠りに入っていた。

「石の国」の山道

どうしよう……。光一は坂を登りながら狼狽していた。ミツルをなんとかしないと……。

国境の街から次の街まで歩いていくには、山を越えなくてはならない。もっとも大した山ではない。光一の子供の頃、家族連れでハイキングを楽しんでいたような山と同じくらいの高さしかない。けれども山の中腹で、すでにミツルは倒れこみそうになっていた。

「砂浜の村」で生まれたミツルは坂道というものを全く知らない。おまけに季節は夏に掛かろうとしており、光一にはともかくミツルにとつては未知の暑さだった。彼女は、山道を登り始めてものの五分で、顔が紅潮し息が上がってしまっていた。それでもここまで苦しいとも何も言わず登り続けてきたのはさすがミツルらしい頑張りようだった。

けれど、もう限界だろう。さつきから何度も躓いている。もう疲労で足が上がらないのだ。光一は立ち止まってミツルに声を掛けた。

「ねえ、ミツル。休もうか」

「……ついさつき……休んだばかりじゃない……。早く……山を越えないと……日が暮れてしまうわ……」

日は正午を過ぎて西の空に傾きつつある。今からどれだけ急いでも山越えは無理だ。ミツルはもう、そんな冷静な判断を失うほど疲れているんだろうか。じゃあ、僕はどうしたらいいんだろう。ミツルは隣で膝を抱えてうずくまり、はあはあと肩を上下させている。そんな彼女を見下ろしながら、光一はますます困惑する。

「インヨーの木……」

ミツルが呟く。

「へ？」

「インヨーの木が沢山生えているところまで頑張つて歩く。私」

ミツルが立ち上がった。やや覚束ない足取りで先に立って歩き始める。それを気遣わしげに見ながら光一は尋ねる。

「インヨーの木、って何？」

「枝が地面に垂れ下がっている木よ。今まで何本か生えてたけど。気が付かなかった？」

「ああ、あの柳みたいな木……」

確かにそんな木を何本か見かけていた。その木は柳に似ていた。ただ柳よりも幹が太く、枝のほうも途中までしっかりしているのか、柳よりも幹から離れたところから枝が垂れ下がり始める。光一は何となく、柳と枝垂桜の中間のような木だと思っていた。

その木のところまで歩いてどうするの？ と光一は訊いてみたかったが返事をさせるのもミツルの負担になりそうで黙ってミツルに合わせて歩いていった。

そのインヨーの木が群生しているところになると、ミツルはどうとう倒れ込んでしまった。

「大丈夫？」

光一はミツルの傍にしゃがみこんで訊いた。ミツルは仰向けになつて、ほっとした表情で答えた。

「大丈夫。これだけインヨーの木があれば今日はここで野宿すればいいわ」

「？」

「この木を2本使つて、お互いの枝を編み合わせるの。そうしてゆりかごのようなものをつくるのよ。その中で寝れば獣に襲われないし夜露にも濡れない。だから、旅人の為に街道沿いに植えられているのだそうよ。この山にもあつて良かったわ」

「ああ、枝でハンモックをつくるんだ……」

光一は周囲のインヨーの木を見回した。

「でも、編むつてどうやつて？」

ミツルは面倒くさそうな顔をちらりとし、

「後で教えるわ。ちよつと休んでからね」

とだけ言つて目を閉じてしばらく横たわっていた。

休憩して少し元気の出たミツルは、光一にも命じてインヨーの木にたくさんの三つ編みを作り始めた。上から垂れ下がってくる柳のような枝の出来るだけ高いところから、三本選んで一本の縄を編む。

この縄が4本の木に十数本程度出来ると、今度はそれらを網状に組んで行く。こればかりは光一は説明を聞いてもよく理解できなかった。「網くらい自分で作れなくて、どうして暮らしていけたわけ？」と疲労が滲み出るのか、ちくちく嫌味を言いながらミツルは、

インヨーの枝を編んだもので緑色の網を作っていく。

最後は、二本のインヨーの木からそれぞれの枝で作った網を結び合わせて一人分のハンモックの完成だった。

日の暮れる直前に出来上がったインヨーの木のハンモックはなかなか快適だった。夕飯はないが、今日はこれで休むことができる。明日はお昼ごろまでに次の街に付くだろう。これからは食料を携帯するようにしたら、街道の途中で夜になっても野宿していけば、ミッルの足でも旅を続けていけるだろう。光一は安堵の息を吐いた。そして、ごろん、とハンモックの中で寝返りを打つ。

——でも、何のための旅なんだろう。

安心すると、次はこんな考えが浮かぶ。そうやって野宿も交えながら皇都に行ってもただ元の世界に戻るだけなのだ。こんな旅、ちつとも楽しい目的なんか無い。

「私、いいこと思いついたの。コーイチ」

光一の気持ちを看透かしたようにミッルが声を掛けてきた。

「私達、仕事をすればいいのよ。だいたい、旅の費用を帝国府に払ってもらうことばかり考えていたから、私達も皇都を目指すしかないって思ってただけで。でも、自分で自分たちの旅費を賄うとなると話は違ってくるわ」

「……ああ、まあそうだね。でも、どうやって……。よそ者の僕達が仕事を見つけてどうすれば……」

ミッルは溜息を一つついて、光一に噛んで含めるように説明して

やる。

「とりあえず、宿代ね。泊まらせてもらう代わりに宿の仕事を手伝います、っていったらそれだけ長く泊まれると思うわ。そして大きな街にいったら、他の仕事だって何とでも見つかるわよ。その気にさえなれば」

「……でも、そんなことできるかな……働くなんて……」

光一はまだ高校1年生だ。将来の就職についてもなにも考えていないし、アルバイトの経験すらない。働く、なんてずうっと未来の話だと思っていた光一は、ミツルの思いがけない提案に戸惑っていた。それがミツルを、少し違った風に苛立たせてしまったようだった。

「んもう。生きていくって働くことでしょ。別の人生を生きたいって思った時から私はちゃんと働くつもりだったわよ」

「……………」

「コーイチは？ まさかいつまでも遊んで暮らせるとでも思ってたの？」

光一はむっとした。

「そういうわけじゃないよ。でも、君と違って僕は突然こっちの世界にやってきて、人生の選択肢が増えたばかりなんだよ。まだ、考えが煮詰まってないところだって一杯あるんだ。その大きい街statt僕にはどんなところだ想像つかないし」

「とりあえず、『尖塔の街』は『煉瓦の街』よりずっと大きいと思うわ。『石の国』って産業が盛んなんですもの」

「あのさ。順を踏んで説明してくれないかな。君がそんなだから僕だって困るんだよ。その『尖塔の街』っていうのは、『石の国』の

首都が何かなわけ？」

「……そうよ。『尖塔の街』は『石の国』の首都」

ミツルも不機嫌そうな声で答えた。でも間を置いてこう言った。

「……悪かったわ。貴方にとってはおかしいことだらけなのよね。これからはちゃんと説明する」

ミツルはフェアな性格をしている、と光一は思った。人にもずばずば意見するけど、自分自身にもちゃんと筋を通す。本当に強くて賢い女の子だ——そう光一は感心しているのに、自分の口からは「そうしてくれよ」という素っ気無い一言だけしか出なかった。光一はそんな自分を情けなく思いながら、ミツルに背を向け目を瞑った。

二人は街から街へ旅を続けていった。宿に泊まれそうなきは宿で、街道の途中で日が暮れたときには、街道の傍、インヨーの木で群生している所で夜を過ごした。

疲れのせいで、二人は、最初にインヨーの木で眠った時のような小さな言い争いを何度か繰り返した。もっとも二人ともまだ若くて一晩寝ればかなり疲れは取れる。それにミツルはさっぱりした性格で、光一はおとなしい性格だったから、次の日にまで怒りを持ち越すことはなかった。

二人とも、今この世界で仲間相手じゃないのだ。争いの翌日には、二人とも歩きながら冷静に前日の争いを思い返して、互いが互いの長所短所を把握するようになっていった。

——ミツルは物知りで頭も切れるけど、ずっと一人で育ってきたから人に説明するのが苦手なんだ——光一はそう思って、分からない

いところは自分から積極的に質問するようになった。

——光一は、物事を決めるのにグズグズして苛立たしいところもあるけれど、彼にとってこっちは異世界なんだから仕方ない。それに私の優れたところはちゃあんと誉めてくれるし、坂が苦手な私に合わせてくれるし——ミツルはそう思って、光一の目から事態はどう見えるのか配慮しながら説明をするようになった。

半月ほどの掛かって、彼らは二人で越える最後の山の峰に出た。その峰からは、ラクロウ河のほとりに大きく広がる市街地が見下ろせた。その町並みからは何本もの尖塔が、空に向かって突き出されていた。

尖塔の街

二人は「尖塔の街」へ入っていった。石畳にも建物にも、この国の山で採れるらしい明るい灰色の石が使われている。初夏の眩い日差しを柔らかに跳ね返しながら、広々とした道路に堂々たる建物がどこまでも並んでいた。

「石の国」は産業が盛んな商人の国で、どの街にも最低一箇所は商工会議所のような建物があり、その建物には高い塔がついていて、日時計や鐘、風見鶏などが取り付けられる。そんな知識をこれまでに二人は得ていた。

ただ、今まで旅して来た街はそんな建物は街に一つか二つしかなかった。けれども、この「尖塔の街」にはそんな建物がいくつもあるようで、高い塔があちらにもこちらにも聳え立っている。塔の先端には意匠を凝らした金の飾りがとりつけられており、夏の初めの明るい日差しを受けてキラリと輝いている。

街の中心部に向かうにつれて、二人は建物ばかり見ているわけには行かなくなった。街のどこどこに広場になっている場所があり、そこにはぎっしりと露店が並んで市が開かれていた。行きかう人々の数も半端ではない。光一が思わず東京の雑踏を思い起こすほどの混みようだった。

二人は何とか、這い上がるようにして人の海から逃れた。そこは、空を高々と衝き上げる尖塔を持ち、堂々たるファサードでもって広場に君臨する巨大な建物の基壇の階段だった。そこに二人はやや呆然といった態で腰を掛け、しばらく喘ぐように息をしていた。

「すごい……私、こんなにたくさんの人が集まっているの見たこと無い」

「僕のいた世界では、これくらい人が混むことはあるんだけど……。こんなにいろんな人がいるのは僕も初めてだよ」

光一はまだ海外に旅行したことは無い。でも、どこにいつてもこうまで多彩な人々が群れ集う様は見られないんじゃないかと思う。

背の高さも、肌の色もさまざまな人たちがあちこちにいる。顔立ちも今まで河沿いの旅で見かけた彫りの深い顔立ちとは別に、東洋人っぽい顔立ちもいるし、中東の人にも似た、彫よりも目の大きさが印象的な華やかな顔立ちの人々もいる。身に着けている衣装もそれぞれで、布を巻きつけて引きずるような人もいれば、立体的な服を最小限だけ身につけきびきび歩き回っている人もいる。色彩も、鮮やかな原色に染め上げたものもあれば、素朴な草木染ふうのものもあり、と様々だった。

「ほんと……いろんな人がいるわねえ……」

とミツルが未だぼうつとした様子で呟くのに合わせるかのように、二人の目の前にグラスが二つ差し出された。二人は驚いてそれを持つ手の主を見た。気の良さそうな男が二人に笑いかけていた。

「やあ。『海から来た者』が皇都に向かう途中かい？」

この男も「石の国」の人間よりもやや肌が色が濃く、それがまた彼の陽気な風体似合っていた。この建物の傍で水瓶いくつが並べて、中の飲み物を売っている露店のおやじらしい。店のほうはその妻らしい女が店先で客の相手をしている。

「ゴレン酒はいかがかね？」

「ぼ、僕達未成年……ええつと子供だからお酒は……」

光一は慌てて手と頭を横に振ったが、男は大らかに笑った。

「酒ったって果実酒だよ。それに子供だっていうのは見てわからあ。水でたつぷり薄めてるから酔いやしないよ。飲みなよ。人に当たってへとへとなんだろうからさ。どうせお代は帝国府もちだろ？」

「貰おうよ」

ミツルは光一にそう声を掛け、光一の返事を待ちもせず男からグラスを受け取ると一気に飲み干した。

「ああ美味しい。僕、本当に喉が渴いてたんだ」

光一も、軽く頭を下げてグラスを手に取り口をつける。自分が思うより自分の身体はずっと水分を欲していたようで、彼はその酸味のある冷たい果実酒をごくごくりと飲み込んでたちまちグラスを空けてしまった。

「美味しい。僕もすごく喉が渴いてたみたいです」

「自分の喉が渴いてるかどうかわからないほど呆氣に取られてたんだな。どれ、俺もちよつと一休みだ」

そういつて彼も階段に腰を掛けた。どうも店番を代わってもらい、自分が休憩する話し相手に光一とミツルを選んだようだった。

「どうだい。凄い活気だろう？」

男は誇らしげに言う。

「今日は何かのお祭りとか特別な日なんですか？」

光一が訊くと男は愉快そうに首を振った。

「違う違う。毎日だよ。毎日これくらい賑わってるんだよ、この街は。何しろここには帝国中の人と物が集まっているんだからな」

男は胸を張る。ミツルが探りを入れるように訊ねた。

「皇都よりこっちの方が集まる人が多いんですか？」

「皇都？ 皇都は政の街だからなあ。俺も一遍だけしか行ったことはねえ。鬱蒼とした森に囲まれて、都に続く道もその暗い森の中に一本きりだ。街だって、皇宮をはじめ貴族の邸宅、あちこちの王族の仮宮、それから帝国府の建物がほとんどで、市なんてねえ。そこにお住まいの方々に物品を献上する出入りの商人はいるのかもしれないが、こっちはごく普通の商売人だからねえ」

彼はしばらく遠い目をしていたが、眼前の市に目を戻すとまた大きな笑みを浮かべて言った。

「政の中心は皇都だが、商いの中心はここ『尖塔の街』だよ。見ろよ、この市の大きさといったら。言っとくけどここだけじゃないぜ。この街中の百近い広場全部でこんな大きな市が毎日立っているんだ」「それは凄いですね」

光一が素直に驚くのに、男はますます機嫌を良くする。

「な？ お前さん達もここで一休みしたら、他の市も回ってみるといいさ。河沿いの街からはもちろん、河から離れた辺境の王国からも隊商を組んでいろいろな品が届くんだけ」

「……隊商、ですか？」

男の言葉にミツルが素早く反応する。

「その隊商って、旅をしてここまで来てるってことですよね？」

「え？ ああ、そうだよ。まあ帝国では原則旅は禁止だからな。いちいち皇都へ行って帝国府から免許状を貰ってこなきゃなんねえ。ま、免許を貰うにあたってはいろいろ言われただけだな。例えば、旅は一年おきに限るとかなんとか」

でもな、と男はにんまり笑う。

「商人てのは、余所を出し抜いてナンボなんだよ。そんなお上の決まりなんかいちいち守ってなんかいやしねえよ」

「自由、なんだ……」

ミツルが呟く。どこか夢見るような調子で。

「おうよ。商人ってのは自由でなくちゃできねえよ」

男がそう答えるのに、光一が勢いこんで言った。

「あのう、僕……。これだけ活気のある街って初めて見るんです。多分あちらの世界にもこんないろいろな人や物が集まる街なんてないと思うんです」

「そうだろうとも、そうだろうとも」

男は大きく首を縦に振って頷く。

「だから……この街に長く泊まってるいろいろ見て回りたいんですけ

ど……」

「もちろん、宿代は働いて払います」

ミツルが急いで光一の言葉に付け加えた。

「おう。そりやそうだとも。見なきや損てもんだよ、この街は。お上の目を盗んで客を連泊させてくれるもぐりの宿屋だって、一杯ある。どれ、一番近い宿屋まで案内してやるよ」

そう言つて立ち上がった男の背中の後ろで、二人は目を見合わせた。

——やったね！

——よくやったわ！

二人は微笑んで頷きあつた。

辻の占い師

「本当、光一の言うとおり……」

うつとりとした声音でミツルが言う。けれども光一の方なんかこれっぽちも見はしない。宿に荷物を置くとすぐ、宿を飛び出るようにしてミツルが行きたいと言ったのがこの通りだった。

ミツルは宿の亭主に聞いたのだ、——ねえ、服屋さんが集まるところってないかな——と。確かにここは、日本で言うところのファッションストリートのような店があった。通りに面する大きな窓の中に、人形を立てて店の商品を着せている。世界が違ってても商売の遣り方は似通ってしまうものなのか、そんな店が立ち並ぶ様は、日本の都会とあまり変わらないようにさえ見えた。

そしてミツルはあっちこっちの店のショウウィンドウを覗いてはうつとりと見入っているのだった。

「ここは首都なんだもの。国境の街のあのワンピースより素敵な服がいっぱい……」

「あのさ、ミツル。君は今男の子の格好なんだからさ、あまりしげしげと見入らないほうがいいんじゃないの？」

「あら」

ミツルは光一に振り向きもせず答える。

「さつきから男の人だって女物の服を眺めているじゃない」

「まあね……」

背の低いお爺さんと背の高い若い男が連れ立って女物の服を見ている。光一達が気付いたときからずっとこの通りにいて、光一達同様あちこちの店の前で立ち止まる。今は、ミツルの見入っている店の隣の店に立っていた。

「やあ」

光一が彼らに視線をやったかやらないか、そんな瞬間に向こうの若い男の方が話しかけてきた。鼻が高くて眼窩が窪んでいる。しかしその顔立ちは端正に整っている上、どこか眼光鋭く猛禽類を思わせる風貌だった。ただ光一はこのような顔を見たことがあるような気がした。これほど美男子ではなかったけれど。

声を掛けられて、ミツルも驚いてその二人連れを見た。その猛禽類はミツルと視線が合うと、心底愉しげな笑みを浮かべた。光一の心に小さな敵愾心が生まれる。——なんだ、こいつ——。

「『海から来た者』を連れて買い物かい？」

明らかに光一よりミツルに興味がある様子で彼が話しかける。

「僕達、この街が珍しいから見て回っているんですっ」

光一が、「僕達」に力をいれ、あくまでも服だけに関心があるわけじゃないと強調して答えた。だのに猛禽類は光一を一瞥さえしない。

「『僕達』ねえ。ふうん」

猛禽類は相変わらず面白そうにミツルだけを見ている。こいつは

ミツルが女の子だって見抜いているんじゃないか。光一は思った。

「ミツル、行こう。他にも見たいものが一杯あるんだ。早く行かないと日が暮れてしまうよ」

光一はミツルの腕をとって立ち去ろうとした。ミツルも得体の知れない他人に目を付けられたからには仕方ないと、服を見るのを諦めた。黙って離れていく光一とミツルの背に、猛禽類は声を掛けた。

「よい旅を！ ミツルお嬢さん」

二人はぎくりと振り返る。猛禽類は愉しそうに笑ったまま、二人に手を挙げてみせ、老人に促されて通りの向こうへ歩き出していた。

「……ばれちゃったみたいだね……」

「でも、何も訊かなかったわ。この街にはいろんな人が集まっているもの。男の子の格好の女の子がいても大したことないのかもしれないわ」

「そんなことないよつ。アイツ、君のことしげしげと見つめていたじゃないか。ニヤニヤ笑いながらさ」

「そお？ 感じのいい人に見えたけど？」

「でも、アイツ……」

光一がなおも言い募ろうとするのを、ミツルが制した。そして通りの先を指差して言った。

「見て、コーイチ。あそこに辻の巫女がいる……」

二人がいる通りが、三ブロックほど先で大通りと交差している。

その通りと通りの交差する真ん中に人だかりがしている。馬車や行き交う人々も、その人だかりを丁寧によけていた。そしてその人だかりの中心にあの黒ずくめの巫女がいたのだ。

黒マントを頭からすっぽり被った皺だらけの老婆が、彼女の前に跪く男に何か言って聞かせている。男は頭を垂れて老婆の話に聞き入り、時折深く頷く。そして最後に深々と一礼すると神妙な顔で立ち上がり、雑踏の中に消えていった。

「ほら。私の読んだ本によると、辻の巫女というのはああやって道の交差する地点に立って、行きかう人々に予言を告げるのが本業なのよ」

「へえ……」

ミツルと光一は辻に向かって歩を進める。

「来たね——」

辻の巫女が光一達にそう声を掛けた。二人は驚く。辻に近付いているとはいえ、辻の巫女からはまだずっと離れている。それに巫女は人に取り囲まれており、二人の姿は取り巻く人々の間から、ちらちら見え隠れしているようにしか見えまい。それなのに、この目の悪そうな老婆は早々と二人の存在に気付いた。

それに、この声。巫女はもごもごと口をうごめかせているだけなのに、耳元ではっきりその声を聞くことができる。

「とうとう来たんだね。この辻に……」

二人は辻の巫女の許に駆け寄った。人ごみを掻き分け、巫女のま

正面に立つ。ミッルは硬い表情で巫女を見下ろしている。光一は、周囲の人々の批判めいた視線を気にして膝を付いた。そしてミッルの服の裾を引っ張って彼女にも跪くよう促す。

「お前はもう辻に来て、曲がり道を曲がってしまった。もう後へは引くことはかなわぬ」

巫女は椅子に腰掛けたまま、跪くミッルの顔を痛ましげに見つめながらそう言った。皺だらけの顔の表情にも、白く濁った瞳に今は緊迫した色が浮かんでいる。

「前に会った時、私のことを『戻ろうとしている』って言いましたよね」

ミッルも巫女の気迫に負けまいとするかのように、首をすうつと立てて答えた。巫女はゆっくりとしたまばたきを、頷きに代えた。

「でも。その時も、今も私は『出て行く』つもりであるのは変わらないわ」

傲然、とも言えるミッルの態度だった。けれども、巫女は気を悪くするどころか少しだけ眉を開いて言った。

「よく誤解されるのじゃがね。道というのはただ在るのではないのじゃよ。その道を歩む者の心のありように合わせて、道は現れ出づるのじゃ……」

ミッルはワインレッドの瞳を強く光らせ、口の端を上げて見せた。

「私は、道というのは自分で切り開いていくものだと思ってる。だ

からここまでこれたのよ。これからだって、そうするわ。ええ、そうしてみせる」

「どうかその強さを正しく使っておくれ。良き友人の諫言を聞きながら……」

ここで辻の巫女は視線を光一に向けた。娘を託す母親のような――そう、あの浜辺の村で娘を見送ったマイアのような表情が、彼女の顔にあった。光一は居住まいを正す。

「どうかこの者を助けてやっておくれ。この娘が自分を見失わないように」

「はい……」

光一は真面目な顔で答えた。隣でミツルが心外そうな顔をしている。巫女は再びミツルに顔を向けて言った。

「どうか良い旅を。ミツル、そしてコーイチよ」

「有難う」

赤く目を光らせながら、野生の豹のようなしなやかさで彼女は立ち上がった。光一も慌てて立ち上がり巫女にぺこりとお辞儀した。

そして二人は、彼らの後ろで巫女の託宣を待っていた者に場所を譲って、その場を離れた。

日が傾き、夕刻が近付こうとしていた。ミツルと光一は市が立ち並んでいた広場のベンチに黙って座っている。二人とも背もたれに身を預けてだるそうに市の名残を眺めていた。

早々と店じまいをして姿を消した店もあれば、どんどん値を下げ

て肉や魚などの生鮮品を売り切つてしまおうとまだ残っている露店もあつた。広場はそんな店々を巡つて夕食の材料を揃えようとする客で未だ人通りは多かったが、昼間に比べるとずっと閑散として見えた。

ミツルは黙っている。光一も口を開くのが億劫だつた。日の暮れる少し手前のこの時刻は、その日一日の心身の疲れがもっとも昂じ、底の抜けるような寂しさを招く時刻でもある。

市の中のゴミを漁りにきた野犬が遠く吼えた。光一はそれに眉を寄せてミツルを見たが、ミツルはぼうつとあらぬ方を眺めている。彼女がさつきから無言なのに光一は落ち着かない気持ちとなり、話題を作つて話しかけてみた。

「ねえ。あの模様つてなんなんだろう？」

「模様？」

「ほら、あちこちの建物の壁に似たような感じの模様が描いてあるだろう？」

「ああ」

ミツルは光一の指差す先を見ると、背もたれから身を起こして答えた。張りのある声だつた。

「文字よ。これがこちらの世界の文字」

「へええ。じゃあ、壁に書いてあるのは……」

ミツルは一つ一つ指で指し示しながら読み上げる。

「あれは『肉屋』。あれは『金物屋』。一軒あいて隣が『ハイゼツト』、おそらく店の名前なんじゃないかな。下に細かい字で書いて

ある、『空き家・空き部屋お知らせ下さい』って。住居の貸し借りを仲介する店なんじゃないかしらね」

「——ご名答」

ミツルと光一はベンチから跳ねるように立ち上がって後ろを振り返った。後ろに、あの猛禽類のような若い男と老人が立っていた。

「貴方たち、誰？」

さすがに今回はミツルも警戒している。何者だ、お前たちは。

「文字が読めて、男の格好をしている君の方こそ何者なのか、僕は知りたいなあ」

若い男は、軽やかに笑いながら返事ではなく問いを寄越した。

「私が文字を読めるのが判るって言うなら、貴方も文字が読めるってことでしょう？ おかしいわ。何者なの、貴方」
「どうして我等が字を読めるのか」

ここで若い男は言葉を切った。彼のとび色の瞳にからかいの色が浮かぶ。

「帝国軍の将官が字も読めないようでは困るだろう——？」

軍人。光一が全く相對したことの無い職業だ。だが、ミツルは即座に否定した。

「貴方が帝国軍の将官？ 兵卒じゃなくて将官だというの？ まさ

か。貴方はどう見たって『浜辺の者』じゃない。『浜辺の者』なんかが、神聖なる帝国軍の将官になれるわけないわ」

ああ、そうか。光一は納得した。どこかで見た顔立ちだと思ったら、そうだ、「砂浜の村」の住人達がこんな顔立ちをしていたのだ。

「浜辺の者」という被差別身分を暴露されても、彼は動じることなく飄々と受け流した。

「でも、してくれた方がいるのだからしかたあるまい？」

隣の老人が苦々しげに口を開いた。

「我々は『彷徨える皇軍』なのじゃよ。あちこち旅をしている内に、こんな者まで拾う羽目になってしまったんじゃ」

老人は心底忌々しげに男を見るが、男はこういう視線には慣れっこなようだった。

「『彷徨える皇軍』って何？」

ミツルが眉間に皺を寄せて訊く。それを見て光一も緊張する。ミツルはこの世界でもかなりの物知りだ。体験したことは少なくとも本で読んだ知識は大量にある。そのミツルが知らないその「彷徨える皇軍」というのは一体なんなのだろう。

「おお、これは喜ばしい」

若い男が芝居がかった様子で手を叩いた。パンパンパン。

「爺さん、爺さんの昔話を聞いてくれる者が現れたぞ！」

ミツルが胡乱な者を見る目で彼を見た。彼は相変わらず軽やかな笑みをミツルに向ける。

「文字が読めて、男装してまで旅をしてきたお嬢さん。それなのに『彷徨える皇軍』を知らないのは困ったものだ。きっと我が帝国の我儘皇女のこと知らないんだろっなあ」

「知らないわ。でも、それで誰が何故困るわけ？」

苛立ちを募らせるミツルをおかしそうに眺めて彼は言う。

「我々さ。我々は君たちを雇い入れようとしているからだよ。雇用主の事情は飲み込んでおいて貰わなくちゃ」

「はあ？ 私が貴方達に雇われる、ですって？ そんなこと、いつ誰が決めたのよ？」

「今、この僕が、決めた」

「……っ」

ミツルが怒鳴り声をあげる直前、絶妙なタイミングで彼は続けた。

「もちろん、この爺さんの話を聞いた後に君たちが決めればいいんだよ」

ミツルは、この男の相手をするのが馬鹿馬鹿しいと思っていることを露にして、老人の方に顔を向けた。老人が説明する。

「何せ、我等は皇都に戻れず彷徨わねばならんなのでな。ぼろぼろと兵士が辞めてしまつて、人手不足なんじゃよ」

「僕達、『海から来た者』と女の子なんですよ？ 兵士になんてと

てもなれません」

光一が慌てて首をふる。

「戦力なら間に合っている。むしろ優秀な軍人だからこそこの皇軍に集っているのさ。問題は兵糧係なんかをしてくれる人間だ。こんな爺さん一人じゃいろいろ困ることが多くてね」

若い男は相変わらず立て板に水を流すように話を進める。

「まあ、夕食でも一緒にいかが？　そして、この爺さんの昔話を聞いてやっておくれよ。君たちにとっても悪い話じゃないと思うよ」

ミツルと光一は顔を見合わせた。あの砂浜からこの街までの旅の間に、何も言わなくても相手の行動が互いに分かるほど二人の呼吸は合うようになっていた。ミツルが二人分の答えを返す。

「とりあえず、お話は聞かせてもらっわ」

「良かったな、爺さん。今夜はたっぷり昔話を聞いてもらえるぞ」

若い男は、こう言つて老人の背を叩くと、快活な様子で歩き始めた。ミツルと光一は彼らの後に従った。

この若い男こそ、ミツルの――そして光一の運命の道を大きく変えてしまったことに、その時の二人はまだ気が付いていなかった。

海の源流

ポツーン――。

天から水滴が、泉にしたたり落ちてきた。

泉の傍に佇む少女は、それがやってきた天を見上げる。この泉は、それを中心に建造された巨大なドームに覆われており、昼の今でも薄暗い。彼女の見上げる天は、この円蓋の頭頂部に丸く穿たれた天窓の形に切り取られている。

彼女は円く光る天から泉の水面へと再び視線を落とした。先程の滴が空から天窓を通してこの泉にしたたり落ちてきたのを、再現するかのよう。

少女の隣で、滴の音の余韻が消えるまでじっと耳を済ませていた初老の男が彼女に語りかける。

「リザ。この一滴は命の滴だよ。こうやって人はこの世に生を受けるのだ。この滴はこの泉から湧き出る水とともに河となって海まで流れていく。そして、しかるべき土地で母親の胎内に宿るのだ。この一滴一滴すなわち帝国の領民一人一人を守ること。これが皇帝の神聖な役目なのだよ」

この初老の男はリヴァイエ帝国十七代皇帝であり、名をスヘイドという。隣に立つ十三歳の少女は彼の一人娘、リザ皇女だ。

ドームの中には、この二人の他にも数十人の人影があった。皆、ゆったりとした裾の長い純白の衣装に身を包み、同じく純白の頭巾

を被っている。彼らはここで働く神官達だ。今もあちこちを拭き清めたり、調べ物をしたり記録をつけたり忙しく立ち働いている。それなのに、彼らは物音というものを一切たてず、このドームは重苦しいほどの静寂に包まれている。

初代皇帝が立つずっと以前、太古の頃からこの白装束の神官達がこの泉を守ってきたといわれている。

この泉は銀製の水盤から湧き出るように設えられているが、この水盤には今は使われることのない古い文様や文字が刻まれており、この水盤が遥か古に作られたことを示している。

それなのにこの水盤は、つい昨日出来上がったばかりのように、薄暗いドームの中でも少ない光を撥ね返してうつすらと輝いている。それだけ、毎日毎日それはそれは丹精込めて神官達が磨いているからだろう。

この銀の水盤から溢れた泉の水は、一筋の流れとなってこのドームから外へと流れ出す。森を抜け、険しい山脈の谷間を走り、その間に雨水や雪解け水を集めて次第に太い河となる。この河はそのまま、延々と広がる丘陵地や平原の中をゆったりと流れ、ついに海にそそぐ。この世界に河はこの一つしかなく、海はこの河よって生み出され、そのためこの泉は「海の源流」と呼ばれる。

この世界を生きる命は、一滴のしずくとなって天からこの泉にしたり落ちてくる。一滴、そしてまた一滴。この生命の滴は河の流れに乗って流域に運ばれ、女の腹に宿る。この世界では、人はそうやって誕生する。ゆえにこの河は古の言葉で「命の道」を意味する「ラクロウ」河という名を持っている。

そして魂がこの世界での生命を終えたなら、その魂が宿っていた体を焼き清め、遺灰を河に流して、今度は海に還さなければならぬ。魂は再び河の流れに乗って海に着く。広い海で魚の姿を取りながら、魂はしばしの休息を得る。そして定められた時がくれば魂は空に昇り、再び「生命の滴」として「海の源流」へしたたり落ちてくる。

天から降ってきた命を出迎える場所。地にあつて、魂を海まで運ぶラクロウ河の出発点。「海の源流」はかように神聖な場所なのだ。

人の世界の始まりから、神官達はこの「海の源流」を護ってきたとされている。それがいつのことなのか暦の上で確定することはできない。何しろそれは暦というものが誕生する前のことなのだから。

しかし、スヘイドの先祖初代皇帝トウオグルが、泉を護る神官達から皇帝位を献上されたことはしっかり記憶され、今でも帝国中でその日は祭日となっている。

この英雄の登場以来の歴史は、それ以前の静寂を打ち消すかのように、騒々しいほどの記録と伝承に彩られている。

いまや帝国は繁栄を謳歌し、太古の静寂を残すのはこの聖地「海の源流」を覆う円蓋の中だけだった。

「お父様、早くあちらに行きませんか？」

リザ皇女が父帝を見上げその袖を引いた。ここが神聖で重要な場所、神官を除けば皇帝とその近親者しか立ち入ることを許されない場所であることは、彼女も重々承知している。

けれども彼女はここがあまり好きではない。飾りのない、石造りの建物特有の冷気が籠った静かなこの空間は、神聖というよりも何だか寂しいところだとしか思えなかった。

「もうそろそろ式典の頃ではありませんか？」

今日は外宮の大会堂で大きな式典が開かれる。少女はこんなもの寂しいところから早く立ち去りたかった。その式典が少女にとって少々退屈なものであったとしても。

「そうだね」

父帝はそう言ってやっとなら離れた。そして「さあ、行こうか」と娘に手を差し出す。――私はそんな子供じゃありませんわ。少女は少しばかり口を尖らせるけれど、父帝の手を握った。ずっと昔、彼女が幼女だった頃から――あのような形で母親を失った頃から、この父娘は文字通り手を取り合って過ごしてきたのだから。

皇帝と皇女は「海の源流」を出て、そして外宮へと向かった。

動乱の種

二人は「海の源流」を覆うドームを出て、ドームから延びる小さな水の流れに沿って歩きだした。この流れの兩岸には白く輝く玉石が敷き詰められており、水はその中央をちろちろと走っている。玉砂利が昼の光を柔らかく反射し、辺りに人影はない。明るさと静けさに包まれたこの場所もまた神聖な雰囲気醸し出している。

もつとも玉砂利だけでは皇帝や神官までもが歩きにくいため、左右兩岸に大人二人分程の幅の舗道が設けられている。左岸のそれは皇帝用、右岸のそれは神官用と考えてよい。左岸には皇帝とその家族のための宮殿、右岸には神官達の住まいがあるからである。

この皇帝と神官の住まう場所を内宮と呼び、壁を隔てて下流に広がる建物を外宮と呼ぶ。外宮のうち、小川の右岸には帝国府のさまざまな用向きのための建築物が群れをなしている。皇帝の宮殿と同じ左岸の方には極めて巨大な石造り会堂が聳え立ちその威容を誇っている。

この会堂は単に巨大だけでなく、外壁も内装もそしてその天井も壮麗な意匠が施されている。特に今日のような大きな祭典では、その上に花やら布やらをふんだんに用いて特別華やかに装飾される。この世のものならぬ絢爛たる空間にあつて、会堂内の群集はすっかり興奮していることだろう。

——一方。内宮を抜けて外宮の会堂に向かう皇帝とその愛娘は、時折言葉を交わすだけで、静かに歩を進めるだけだった。

歩きながらスヘイドは、今回の式典の中心となる男のことを考え

ていた。彼の可愛い娘にとって災いの種となりかねない男のことを。

——ゲルガンド將軍。

彼はスヘイドの従兄弟にあたる。

皇帝家の傍系に生まれた者は、男子は帝国軍に入り、女子は国内の王国の王家に嫁ぐ。それが絶対の不文律となっていた。そうやって傍系皇族達は皇帝家嫡流を守護してきた。

ゲルガンド一家、すなわち先帝の弟宮一家もこれに倣った。ゲルガンドの父と二人の兄、そしてゲルガンド自身も軍に入り、一人いた姉は西方の国の王妃となっている。

傍系男子が帝国軍に入隊する時は、「將軍」の地位を与えられる。ただし、古代はともかく、時代が下るにつれてその地位は次第に名目的なものになっていった。ごく最近まで、彼らは將軍位を与えられたからといって特に武芸に習熟することもなければ、実際に軍を率いることもなかった。皇宮の側に居邸を構え、度々皇宮に参内するのがその日常だった。

しかしながら、ゲルガンドの二人の兄は帝国軍の遠征中に蛮族に襲撃されて命を落とした。

先帝の御世の後半から、先帝及びその政策を受け継いだ現皇帝と、皇帝家に反発する領内の諸王国との間に緊張が高まっている。また、その間隙を狙った蛮族の襲来も増えた。

帝国軍の遠征には、辺境の蛮族を駆逐するだけでなく、皇族が各国の王を訪ねて親交を深めるという目的もある。ゲルガンドの兄二

人は、後者の目的で、武人としての鍛錬を積みぬまま諸王を訪問する旅に出た。そしてそのまま還ることがなかったのだった。

息子二人は戦死し、娘は遠い異国に嫁ぎ、ゲルガンドの両親に残ったのは彼一人だった。両親はなんとかこの息子は死なずに済むようにと願った。そのために彼に武芸を磨かせることにしたのだった。蛮族と戦うことがあれば自分の力で勝ち残ることができるように、と。

両親の計らいはゲルガンド本人にとっても嬉しかったようだった。彼は幼い頃から、窮屈な服を着てしきたりに煩い皇宮に上がることよりも、近習の子供たちと外で伸び伸び走り回って遊ぶ方がよっぽど好きだったからだ。

彼は武芸の鍛錬に励みたちまち腕を上げた。実戦を積んで用兵術にも長じるようになった。いまや優れた將軍としてゲルガンドの名声は日増しに高まるばかりだ。

——災いの種が芽吹こうとしている。

このほど、軍を退役してひっそり暮らしていたゲルガンドの父親が亡くなった。これでリザ皇女以外に皇統を継ぐことが出来るものはゲルガンド一人になった。

——父上の懸念は正しかった。

スヘイドはゲルガンドが誕生したことを思い出す。将来は將軍となるその赤子が、トゥオグルを思わせる黒い髪と黒い瞳を持っていると聞いたとき、スヘイドの父先帝シャルメルは断じた。「あの子は我らにとって災いの種だ」と。傍系の三男にそこまで警戒

しなくてもよいのでは、と思う一方でスヘイドもまた禍々しい不安を覚えたのを記憶している。

リザが産まれた時、この娘も黒い瞳と黒い髪を持っていることに安堵したものだ。しかし、それでも「災いの種」は消えはしなかった。それどころか二人の兄は死に、自分自身の力で人望を集めて、あの男はリザに次いで皇位継承権第二位にまで近付いている。

リザには出自に問題がある。皇帝家に対して不満を持つ貴族や諸国王も多い。スヘイドは一層顔を険しくして考える。リザの皇位継承や今の皇帝家に反発する者達の中には、ゲルガンドを皇帝にしようとする動きがある。ゲルガンドにそういう誘いがあるという情報は、彼の側に放ってある間諜から聞いている。今のところゲルガンドにその気はないようだが……。

——封じ込めなければ。

ゲルガンドが將軍として頭角を現し始めた頃、先帝はまだ存命中だった。そしてゲルガンドの扱い方をスヘイドに教えていた。

「軍功を讃えてやれ。それも多くの者の前で華やかに、だ。そして見せ付けてやるのだ。彼は非常に優秀な——しかしながら一介の軍人に過ぎないことを」

帝国の威容を示す壮麗な大会堂。どんな式典が誰の為に開かれようとするこの建造物の主は皇帝だ。

皇帝の玉座は会堂の最も奥に、十数段の階段を登ったところにある。こここそがこの会堂の主役なのだ。

会堂の身廊は堅固な石造りゆえに大きな窓は取れない。飾りをかねた無数の燭光で照らされるけれども、ほの暗さを完全に払拭することはできない。しかし、身廊の突き当りに広がる玉座の周囲は違う。玉座の天井は巨大な円蓋となっており、壁と円蓋の間にぐるりと窓が並んでいる。そのため円蓋の下玉座は外の明るい日の光に包まれることになる。

それだけでも身廊から見上げる群衆に玉座は眩しく感じられよう。更に、玉座は金、銀、白金、数多の宝石で飾られている。その煌びやかさは、まるで玉座自体が輝きを放っているように見える。

この天上と地上の光に包まれた空間には、皇帝と皇太子以外に何人も上ることは出来ない。そこに続く階段に足を掛けることすら許されない。

——確かに今日の式典はゲルガンドのためのものだ。

今日は、今までの軍功と高まる名声に応え、皇帝スヘイドがゲルガンドに「元帥」の地位を与える日であった。これで彼は他の将軍たちを総括する軍人の筆頭の地位に立つことになる。

しかし——。今日ゲルガンドがこの華麗なる大会堂ですることと言えば——スヘイドとリザの座る場所からずっと低い、床の上に跪くことだ。彼は地に膝をつき、高みに座る皇帝から位を「賜る」。彼は、皇帝の御用人が皇帝の代理で彼に手渡す任命状と徽章とを、額より上にかかげ恭しく押し頂かなければならない。

そう、スヘイドはあくまで彼に位を「くれてやる」立場であり、ゲルガンドはそれを「頂戴する」立場なのだ。

この式典は、ゲルガンドを単純に讃える者達の心情を満たしてやると同時に、彼が、いかに皇族と雖もただの軍人であることを示すためのものなのだ。

この式典の中で、群集はこの自分とゲルガンドの間に存在する身分の差をその目で再確認することだろう。この式典が華やかに執り行われれば執り行われるほど、より一層玉座の荘厳さが際立ち、そこに座る者とその下に跪く者との越え難い差が、視覚を通じて彼らの脳裏に刻み込まれることだろう。

皇帝スヘイドとリザ皇女が、内宮と外宮との境に近づくにつれ、大会堂が威風堂々たる姿を現し始める。

リザもその中で行われる式典について思いを巡らせていたらしい。彼女はふと父親に言った。

「そういえば、お父様。私ゲルガンド將軍に会うのは初めてですわ」

スヘイドは微かに苦笑して答える。

「いや。そなたが幼い頃には何度か会ってはいるよ。けれどもそなたは小さすぎて覚えていないだろうね」

リザ皇女はそれ以上ゲルガンド將軍について尋ねなかった。これまでも何度か周囲の者達に彼について訊ねたことはあったが、何故か皆一様に彼の話題を避けたがっていた。

——どんな方なのかしら。

リザは少しだけそんな風に思った。けれどもそれは長続きせず、

頭の中で思考の焦点はまた別のものに移っていった。

今日のような特別な式典には、特別な装飾がなされる。彼女の好きなタペストリーもずらりと並べられていることだろう。

——また、あの絵を見ることができるのね。

リザとスヘイドは手を繋いで静かに外宮への開かれた門へ歩いていった。

典礼のタペストリー

太い石柱が並んでいる。大人が四、五人手を広げてようやく囲めるほどに太い石柱。それらが奥の空間に向かって二列に並んでいた。

天を仰ぐようにして見上げると、各々の石柱の先は地上からはるか高いところで何本かに枝分かれしている。そしてその枝は各々弧を描いて、他の列柱の先から同様に枝分かれしてきた曲線と出会う。この曲線の出会いによって生まれた尖頭アーチが列を成す石柱に合わせて規則正しく交差しており、この建物の天井に幾何学的な美しさを生み出している。

この列柱の間を、リザ皇女は父帝の横で傲然と言えるほど堂々と歩いて行く。この巨大な身廊は三層の側廊を備えており、その隅々まで群集がびっしりと詰め掛けている。その中央を、彼らに一瞥もくれることなく、彼女はくいつと首を持ち上げて歩を進めていく。会堂の奥を、自分と父親だけが登ることの出来る階段の上を真っ直ぐ見つめながら。

リザもスヘイドも、先ほど控え室で身に着けたばかりの純白の衣装を纏っている。その白さは、身廊の入り口から玉座まで一直線に引かれた真紅の毛氈の上にあっていつそうくつきりと輝く。先帝の頃から皇帝の礼装は白と定められた。皇帝の神聖さを表徴するためである。

スヘイドの衣は、「海の源流」で立ち働く神官のゆったりした衣装とよく似た形をしていた。けれども神官の用いるものとは違って、一面に金系銀系の細かい刺繍が施された上に、細かな宝玉も縫い付けられており、実に豪華なものだった。

リザ皇女の衣装も皇帝に準じて白いもので、そしてより一層華やかだった。首が高く、手の甲まで被う袖がつき、裾が背後に長々と延びる真っ白なドレス。高貴な女性の肌がなるべく人目に触れぬ様に考えられたものだが、その分ふんだんに飾ることができる。

ドレスの腰から下は二段重ねで、上のスカート部分は光沢のある白絹と繊細なレース地とが交互に接ぎ合わされている。ほっそりとした胴には、粒の揃った真珠で文様が描かれ、袖はふんわりとした薄絹の上に細い銀糸で緻密な刺繍が施されている。そして、首元には帝国内で最も大きな金剛石のブローチが留められ、薄暗い室内の全ての光を集めたかのように燦然と光っている。

「ほっ……」

皇帝親娘、分けても皇女の豪奢な衣装に群集の中から声にならない息が洩れる。

この式典に参列できるのは貴族階級に限られており、皆思い思いに精一杯着飾っていた。しかしながらどんなに着飾っても、彼らの中の誰も、あのような神々しい格好はできない。一つには、先帝の御世に皇帝以外は白を着てはならないという命が下され、自分たちが白の衣装を着ることができないせいもある。ただ、仮に自分たちが白い衣を着ようとしたとしても、あれほど華麗な風に拵えることなどではしないだろう。

——やはり皇帝とは我々とは違うのだ——。

群集は、先帝と現皇帝がその効果を狙ったとおりに、この煌々しい純白の衣装に皇帝位の神聖さを感じ取っていたのだった。

——いいえ。それでもやつぱり敵はいる。

群衆の中から上がる感嘆の溜息を耳にしてもなお、リザは気を緩めない。この会堂を埋め尽くす者達の中には、これほど皇帝家の威光を見せ付けられてもなお、この自分自身には冷たい視線を向ける者達がいる。自分はそれを知っている。

——負けてなるものですか。

母親の身分が低い。そんな理由で自分を帝位に相応しくないと考える者達。

——私はそんな者達に屈したりなんかしない。

以前、別の式典で、こうやって参列者の中を玉座に向かって歩いているとき、聞こえよがしに囁いた者がいた。

「あら。あの姫君は本当にあの母親によく似ていること。でも、母親の方は目を伏せてもつと謙虚に歩いていただけ」

暗にリザにも、分をわきまえろ、と言わんばかりのあの声。それが今再び自分の耳にもささやかれたような気がしてリザは一層険しい目で前方を見据える。

——私は皇女よ。神聖にして穢れ無き皇帝位に就くことが出来るのはこの私だけなのよ。

現に光はすぐ目の前にある。薄暗い身廊が尽きそこから先は、玉座とその隣のリザの為の席が並べられた壇上へと、十数段の階段が

伸びているだけだ。ここから先、天井は大きな円蓋となる。そのドームがせり上がるふもとにある窓から日の光が燦燦と降り注ぐ。

リザは一層誇らしげに階に足を乗せる。これが許されるのは皇帝スヘイドとリザの二人だけ。彼女は一段一段を踏みしめ、眩しいほど豪華に飾られた自分のための席に近付き、殊更ゆったりとした仕種で腰を下ろした。

同じく玉座に座った皇帝がリザとともに、高みからたつぷり群集を見下ろしてから、おもむろに左手を挙げて彼らに座ることを許した。

皇帝の片手の動き一つでぞろぞろ椅子に座り始める群衆。リザは背筋を伸ばして椅子に納まったまま、その群れを冷ややかに見下ろしていた。

式典は神官達の執り行う、今となつてはその行為が何を意味するのかわからない、形式的な清めの儀式の数々から始まった。それから、諸王国からの使い達が順番に、皇帝への讃辞と帝国の繁栄への祝辞を述べ続ける。ゲルガンドの登場までは暫く時間がかかりそうだった。

リザはもう、自分の靴よりも下で這い蹲っている彼らを見るのに飽きてしまった。それに、父帝も自分も、彼らからどんなに莊重な美辞麗句を並べ立てられようが何の反応もしてやる必要はないのだ。

彼女はこの大会堂に何枚も吊り下げられた、壮大なタペストリーを眺め始めた。これらは余程大きな式典でなければ御庫から取り出されることはない。故に、随分昔に織られたものでさえ色褪せない

まま鮮やかに、その絵柄に込められた物語を見る者に語りかける。リザはこれらタペストリーの絵を見るのがとても好きだった。

これらのタペストリーは一枚ごとにこの帝国に起こった重要な事が綴られている。これを順に眺めていけば、太古の世界から今に至るまでの帝国の歴史を辿ることになる。

一枚目。この絵は抽象的とも言えるほどシンプルな構図である。濃紺の夜空。その夜空に浮かぶかのように、白雪を戴く急峻な峰が連なっている。そのふもとに鬱蒼とした森が茂り、その中央に銀に輝く水盤が置かれている。この水盤から、タペストリーの下辺に向けて水が流れ出している。流れは、緑の濃淡で織り出された丘陵地を抜け、褐色の系で紡がれた平地を蛇行しつつ、夜空を映した濃紺の海へと注ぐ。

この絵に織り込まれている水盤は、先程までリザが目になっていたあの水盤である。この絵は「海の源流」を中心に、この世界の縮図を示しているのだ。タペストリーの中で唯一、人物の登場しないこの静謐な絵を見るたび、リザは肅然とした気持ちになる。

自分はこの世界の中央に立ち、その源を守護する皇帝になるのだ。そう思うとリザの心は誇らしさで一杯になる。母こそこの世界に身も心も踏みにじられてしまったけれど、自分は違う。自分のこの身は、この世界に唯一絶対の尊き存在なのだ。彼女はこの自負と矜持を糧に今まで育ってきたのだった。

しかしながら、単に子供でいられた時期を過ぎようとするにつれて、自分の心に暗く翳る部分が生まれ、しだいに大きくなっていることにもリザは気がついている。

古の御世はともかく現代となつては、皇帝は「海の源流」の傍から離れることを許されない。よほどの変事が起こらぬ限り、自分は一生皇宮から一步も外に出ることはないだろう。

——退屈な絵。

皇女として決して口に出してはならない感想を、彼女はごく浅い溜息として吐き出した。

「海の源流」のある『森の国』は、白く輝く急峻な嶺々と黒々とした深い森に囲まれ守られている。リザはこれ以外の風景を見たことがない。毎日毎日皇宮から見えるのは黒い森と白い嶺だけ。そして一生このまま、これと異なる風景を目にすることはない——。

彼女は胸に湧き起こってくる苛立ちに近い感情を再びひっそり溜息に乗せた。そして救いを求めるかのように次の絵に視線を移した。

二枚目。リザはタペストリーの中でもこの絵が最も好きだ。初めて見た頃からこの絵を見るたび胸がときめいた。そして今ではどこか焦がれる思いでこの絵を愛している。

絵の中央に、黒い髪に黒い瞳を持つ美しい青年が、豪華な衣装を纏つて毅然と立っている。その足元には、今と全く変わらぬ白装束姿の神官達が額づいている。

この絵の凛々しい青年は彼女の先祖、初代皇帝トゥオグルである。彼が現れる前は、人々は黒い森の中にいくつかの部族に分かれて暮らしていたという。彼らを纏め上げたのがこのトゥオグルであった。彼はそうして「森の国」の主となった。しかし彼が英雄であるのは単に国を纏めて王になっただけではない。

神官達はトウオグルの強さと、そしてその心が正しいことを認めた。だから彼らはトウオグルとその子孫に、「海の源流」を守護すべき神聖なる皇帝位を授けたのだった。

「海の源流」の守護者であるということは、「河の信仰」の守護者であるということでもある。ラクロウ川の流域では、人の生死について共通の神話が伝えられている。生命は天から「海の源流」に滴り落ち、死んだ者の魂は遺骸を河に流すことで海に運ばれ、そこで魚の形をとって暫く過ごす。そしてその魂に定められた時がくれば天に昇り、そして再び「海の源流」に降ってくるのだ、と。

ラクロウ川の流域には、「森の国」の下流に、河沿いの交易で栄えた港町が連合して生まれた「石の国」がある。その更に下流には河口の港で富を蓄積した王が、海沿いの広範な地域を支配下に置いて成立した「土の国」とがあった。この両国では「河の信仰」は唯一の信仰であり、そして生活の一部といえるほど馴染み深いものだった。

「海の源流」を守る神官達がトウオグルに皇帝位を授けたということは、皇帝が「河の信仰」を共にする「石の国」「土の国」を支配する正当な根拠となった。この絵においてトウオグルが古地図——河を中心に「石の国」と「土の国」の領土を描いている——を踏みしめているのはこのことに拠る。

もっともリザにはそんなことに関心はない。彼女が生まれるずっと前から、帝国はこの二国だけでなくもっと多くの国々に版図を広げていた。「河の信仰」を信じる者達の上に君臨することは、彼女にとっては自明のことだ。

リザはそれなりに聡明な少女だ。帝国に宿る命、その全て守らねばならない皇帝の責務の重さを理解していた。自分は父の名誉のためにも、そして何より母の名誉のためにも立派な皇帝にならなければならぬ。けれど――。

一枚目のタペストリーを見ていて感じた暗い感情が再びリザの中に湧いてくる。皇帝の仕事なんて単調なものだ。皇宮より一步も外へ出ず、ただ「海の源流」の傍に居て、神官達の言うがままその祭祀に加わる。古式ゆかしい祀りの儀式――現代を生きる少女にはつまらない儀式が皇帝の本業。それが無い日は帝国中のあちこちから難しい話が持ち込まれ、その解決に忙しい。領民達は、皇帝にその生命の旅路を守られている癖に、文句ばかり言っている。

生命の流れを守る皇帝の責務はあまりに重く、そして単調で、めったなことでは賞賛されない。それなのに、そんな立場になるしか自分の人生に選択肢はない。

苛立ちを振り切るように、彼女は画中のトゥオグルを見つめた。

ずっと前に父帝に訊ねたことがある。「お父様はどうして皇帝の重責に耐えることがお出来になったの？」と。スヘイドはしばらく考え込んだ後、「それはお前の母がいたからだよ」と答えた。

スヘイドと、リザの母ペイリンの悲恋は、主に皇宮で働く侍女たちを中心に今でも盛んに語られる。運命に引き裂かれたものの、互いに互いを想い合う美しい恋物語。自分の両親のこの昔話を、幼い頃から今に至るまでリザは侍女たちにせがんだものだ。

リザは勉学にも相応に真面目に取り組んだが、自分の時間には父母だけでなく古の、あるいは異国の恋物語を読んだり聞いたりする

のを好んだ。

十三歳の少女はそうして夢想するようになる。いつか私にも両親のような素敵な恋人が現れるのかもしれない。そう、このトウオグルのような、美しくて遅しくて頼りになりそう——。そうすれば自分の人生は特別なものになる。むしろそんな方が現れなければ、自分の重苦しく退屈な人生には何の見返りもえられない。そんなことは納得いかない。リザはそんな気がしていた。

スヘイドは、横に座る愛娘が、今日もまたトウオグル帝の似姿に見とれていることに気がついていた。娘にとってこのタペストリー中のトウオグル帝は未来の恋人だ。ふざけながらもこの聖祖を「私の憧れの君」と呼んでいるのも知っている。

しかし。スヘイドは暗い目をして考える。この娘には真実を隠している。本当は、恋というものは夢見がちな娘が思うほど常に美しいものではないのだ。

いや。彼は僅かに口を引き結ぶ。その真実は、自分自身思い出したくもないことだし、まだ幼さの残る娘に聞かせる話ではない。娘はまだ十三歳なのだ。絵の中の美青年に憧れる、そんな恋に恋する少女の時間を、父は大切にしたりできなかった。

三枚目。二枚目のトウオグル帝の麗しい姿を十分堪能してからリザはこの絵に視線を向ける。そして、美しく整った眉を顰めた。

そこには残虐な戦闘の様子が画面いっぱい描かれていた。騎馬に跨り甲冑をつけた美しい皇帝軍の兵士が、みすばらしい装備の敵兵の首を掻き切っている。地には、身体のおちこちから血を垂れ流す醜い人間達が横たわっている。背景の建物には全て火が放たれ、

赤い炎が舞い上がっている。

この戦闘は、皇帝軍が「森の国」を囲む山脈を越え、「石の国」
「土の国」に攻め込んだ時のものだと言われている。けれども――
―おかしいわ、とりざは首を傾げた。

彼女が最近学んだ歴史とこの絵とは随分違う。トウオグル帝は、
古来『海の源流』を護ってきた神官によって皇帝位を授けられた。
この神聖な皇帝の出現を「石の国」「土の国」は喜んで迎え入れた。
彼女に帝国史を教える教官はそう説明していた。

教官は言ったものだ。

「そりゃあ、中には抵抗した者もいたかもしれませんが」

しかしながら、と彼は続けた。

「しかしながら皇帝の位は神聖なものです。『河の信仰』を共にする者なら喜んで皇帝を迎えたに違いありません。現に帝国の配下にあつてこれらの国は平和と繁栄を享受しています。皇帝は帝国中の領民から敬われているのでございます」

それならこの絵は間違っている。後でお父様に作り直すべきだつて言っておこう。皇女は小さく頷いた。

六枚目。この絵を見て皇女は機嫌を直す。二代目の皇帝、ドウルガン帝が二人のそれなりに立派な衣を身に着けた者達を従えるように立っている。これはそれぞれ「石の国」と「土の国」の王で、この絵はこの二つの王国が第二代皇帝ドウルガン帝の御世に帝国の配下におさまったことを示している。

背景では木が茂り、麦や葡萄をはじめ様々な作物が豊かに実り、地に生えた牧草を羊や牛がゆったりと食んでいる。これは帝国の配下に入って繁栄が得られたことを示し、帝国の支配の正当性を示しているのだ。

七枚目。皇女の口に微笑みが浮かぶ。七枚目以降は帝国が版図を拡大する度に製作される。どの絵も構図はほぼ同じだった。帝国に帰順した国の王が跪き、時の皇帝にその国の名産品を献上している。

皇女にとっては信じられないことに、河から離れた地域には、生命が河と海と空を巡ることを知らない者達がいるのだという。なんて愚かなのでしょう。皇女は呆れる。そんな蛮族達の中には「死」をやたら恐れる者もいるとか。「死」なんて単に魂が海に還り、しばらく魚として暮らして再び現世に生まれ変わるまでの一段階に過ぎないのに。

けれども真実って浸透していくのだわ。河から離れた地域にもこうやって、魂の生まれ変わりを信じる者が増えたんですもの。皇女はタペストリーに描かれる珍しい品物を楽しみ始める。

確かに帝国は武力だけでその版図を広げたわけではなかった。「河の信仰」は人の魂の生まれ変わりを説く。この信仰はラクロウ河から離れた地域にももたらされ、この点で多くの人々の心をひきつけた。

支配のきつかけが軍事力によるものでも、やがてその地に「河の信仰」が広まると領民達の帝国の支配に対する心理的な拒絶感は薄らいでいった。さらには、帝国の侵攻以前に「河の信仰」が伝えられその国の王族までがこの信仰に帰依した結果、向こうの方から帝

国に帰順を望む国もあった。

ただし、事実はこのタペストリーに描かれているほど単純ではない。生まれ変わりを約束する「河の信仰」は確かに多くの人々を魅了していったけれども、その土地その土地で語り継がれていた土着の信仰と軋轢を起こすことも多かった。また、信仰を改め帝国に帰順したかのように見える国でも、それは単に帝国軍の戦力をあてにしているだけで、辺境の蛮族から自国を護るためのただの見せ掛けにすぎない場合もあった。

しかし、皇女にタペストリーの背後の真実まで見通す力はない。七枚目以降のタペストリーを皇女はただ無邪気に楽しんでた。皇宮から一步も外に出たことのない皇女は、それらに描かれる珍奇な物品や見たことの無い異国の風景を見るのに夢中となり、時の経つのをしばし忘れていた。

喇叭の金属音が群集のざわめきを制していく。そして、ファンフアーレが鳴り終わってようやく静かになった会堂に今回の典礼の主役が入ってきた。皇女のお楽しみ時間もおしまいだ。皇女は少し残念な気持ちでタペストリーから視線を下ろし、会堂の身廊をこちらに進んでくる人影を見た。

ゲルガンド將軍は上背があり、遠くドームの真下に座る皇女からもその姿を捉えることができた。引き締まった体躯を姿勢よく、大またにしかしどこかしなやかな獣のようにゆつくりと彼は近付いてくる。

薄暗い身廊から日の光の射す円蓋の下へ彼は踏み出した。皇女は思わず息を飲む。

濡れたように艶やかな黒い髪。端正でありながら精悍な顔立ち。

そして自信と若さに満ちたその黒い瞳。

——こんな方、私初めて見る。

一瞬そう思っただけで皇女はすぐその考えを否定した。ううん、私はこの方に似た人を知っている。皇女はタペストリーの二枚目をちらと見やり、そしてゲルガンド將軍に目を戻した。

——私の憧れの君だわ！

皇女は、典礼の間中熱っぽい目つきで彼の一挙手一投足を見つめ続けている。この日この時から、皇女は幼くも真剣な、それゆえ多くの人間の運命を変えてしまう恋に落ちてしまったのだった。

お茶会

ゲルガンド將軍は、先程からこめかみのあたりに軽い痛みを覚えていた。皇女直々のお望み。そう言われて式典の後、彼は皇女の私室で謁見を賜ることになったのだが——この娘の話というのはなんと退屈なのだろう。

いかにも少女の好みそうな部屋。壁は紅を混ぜた漆喰で塗られ、淡いピンク色をしている。窓に垂れる帳布にも、椅子の布張りにも、至るところに花模様。本物の花もそこかしこにふんだんに活けられ、甘い香りが部屋中に漂う。目の前にあるのは軍隊に居てはお目にかかることの無い繊細な作りの陶器の茶器類。

とうてい、二十六歳になる軍人が長居したいと思えるような部屋ではない。

それなのに皇女はいささか興奮した面持ちで、一方的に喋り続ける。自分の好きなお茶とお菓子、そしてその取り合わせの話。侍女達の可らしいちょっとした粗相の話。新しく作るとも素敵なドレスの話。

あまりにも少女らしい話題にうんざりしながら、彼はできるだけ穏やかな笑みを浮かべて応じてやる。それに気を良くして皇女はますます囁き続けて止みそうにない。彼の中に、失望に似た感情が広がっていく。

ゲルガンドの二人の兄は將軍といっても名目的なもので、自宮からしばしば皇宮に上がっていた。しかし、ゲルガンド自身は少年の頃から実質的にも軍人で、皇都の外郭に控えている軍隊の中で暮らしていたため皇宮に上がったことが少ない。その上、皇族としてし

ばしば遠征を命じられていたから、皇都で暮らした時間もそれほど多くない。だから、この皇女と会うのは随分久しぶりのことであった。

その間、彼の耳に聞こえてきた皇女の噂は決して悪いものでは無かった。

帝国は、先帝の頃より文治政治に力を入れ、諸国より賢人を集め、領内の各地から様々な知識や物品を蒐集し始めていた。大会堂の下流に広々と広がる建築群は「百科の殿堂」と呼ばれ、研究者や学生を集めて帝国の頭脳としての役割を担いつつある。皇女は、そこからそれぞれの分野の第一人者を師として迎え、熱心に勉学に取り組んでいるという。

また、皇帝は神官達とともに「海の源流」を祀る儀式を執り行わなければならない。それらは非常に堅苦しいだけでなく、大人にとっても心身ともに忍耐力を要する厳しいものだ。

夏の盛りに炎天の下ずっと立ち続けなければならなかったり、冬の早朝に冷水で身を清めなければならなかったり。それなのに、皇女は自分が次代の皇帝であるという自覚のもと、父帝と共にそれらに臨み、しっかりこなして周囲を感心させているという。

今日の式典でもゲルガンドは感心していたのである。床から見上げた目に映る皇女は、姿勢正しく堂々と――群集を高めから見下ろすのを当然としている風格さえ漂わせて、皇帝の玉座の隣に腰掛けていた。

彼自身も將軍として部下を率いる立場にあるが、人の上に立つために最も重要なことは、自分は人の上に立ってみせるといった気概の

ようなものではないかと常々思っている。先の式典では、この皇女が僅か十三歳にして既にそのような気骨を備えていると思い、彼は安心していたのだ。

皇女が次代皇帝に相応しく育っている、そう思っただけで安心したのは二つの理由があつた。

一つは、この皇女が母親と同じような悲劇に見舞われることはなさそうだと思つたからである。彼女の母に、回数は少ないものの何度か会つたことがある。心優しく繊細な、そしてそのような人柄のせいか、人の上に立とうという気持ちなど露ほども無さそうな儂げな女性だつたと彼は記憶している。後年、遠征先で彼女の訃報に接した時は、彼女は皇后位という重臣にとうとう押しつぶされてしまつたのだ、と哀れに思つたものだ。

彼が安心したもう一つの理由。それは皇女が皇帝に相応しい人間なら、自分が皇帝に担ぎ出されることなどまずあるまい、と思つたことだ。皇宮の内には母親の身分が低いことを理由にこの皇女を軽んじる風があることも彼は知っている。なぜなら、皇女を皇位に相応しくないと考える者達の多くはゲルガンドの許にやってきて皇位の篡奪を勧めるからだ。

しかしながら、彼は皇帝になるなど真つ平だつた。彼は今の自分の生活を気に入っている。外で自由に馬を駆けさせ、身体を伸び伸び使い、遠征先で異国の様々な文化に触れる。彼は旅するのが好きだつた。それが先帝や現帝が、自分を皇女から皇位を奪いかねない危険人物と看做し、皇都から遠ざけるための命令だとしても、彼は遠征に出掛けるのが楽しみだつた。

だから、彼は今日、皇女が皇帝になる器を備えているように思え

て安心していたのである。しかし――。

この少女は皇帝位の重みを真に理解しているのだろうか。ゲルガンドの胸にそのような疑念が膨らむ。帝国の地理、歴史、その他の学問に通じていることは勿論望ましい。儀礼を果たすのも重要だ。威厳があるのも大変結構。だが、それらはそもそも何のために必要なのか、彼女は理解しているのだろうか。

帝国の領内のあちらこちらで紛争の火種が燦々している。皇帝は「河の信仰」により神聖な存在とされ、その支配が正当化される。けれども、帝国の中のそれぞれの地域に、その土地その土地で伝えられた信仰があり、今でも人々の暮らしに息づいている。近年帝国府は「河の信仰」への改宗を厳しく迫っているけれども、それが各地で軋轢を生んでいるのを皇帝も皇女もどれほどご存知なのだろうか。

そもそも先の皇后の一件で、皇帝家と帝国領内の諸王家との間に溝ができてしまった。それだけでなく、様々な国々――文化も、信仰も、統治形態も、そして利害関心も様々な国々を統括しようとする皇帝に対して求められるものは果てしなく大きいのだ。

皇族の身で各国を回り、見聞を広めているこの自分を招いて、お菓子だのドレスだののお喋りをしている場合ではあるまいに。

ひよっとしたら――。ゲルガンドは皇女に気付かれない程度に微かに眉を寄せる。この皇女の皇帝たらしとするその努力の基には、広大な帝国を治める君主としての自覚は薄く、単にこの狭い皇宮内の女主人として君臨したいという子供っぽい意地しかないのではないだろうか。

——こんなことでは一国の王女にも劣るというもの。

彼はふとある国の王女を思い浮かべた。彼と太い絆で結ばれたあの草原の国。そこで暮らすあの少女。

——確か彼女は皇女と一歳しか変わらぬ年ではなかったろうか。

草原の国ワレギア

皇女の部屋の窓から皇都を囲む山脈が見える。その白い嶺を眺めながら、彼の心は遠く異国への旅に出る。

急峻な峰を越えるにはかなりの体力を必要とする。しかし、慣れれば、登るにつれて様々に移り変わる山麓の風景を楽しむことができるようになる。

山脈の稜線が描く壮大な造形美。手が届く程に近付く蒼穹の天。と思えば俄かに吹雪と変じる自然の獰猛さ。思いもかけぬところに現れる可憐な野の花に、素早く動く野鳥の影。

そして山を登る楽しみの続きに、異国を巡る旅の楽しみが待っている。

ゲルガンドは特に西方への旅を好んだ。「森の国」を囲む峰を越えて西に進むと、山裾から次第に乾燥した平原に出る。緑濃い「森の国」で育った彼は、からっとした風が吹き渡るこの地の解放感が好きだった。見渡す限りの茶色い地平線の中、土埃を立てながら方位磁石を頼りに隊列を勧めていく。

そのうち、山脈の伏流水が湧き出でできる湖を中心にしたいくつかの街と出会う。こういった街や、それらを纏めた国々の王城を訪ねながら彼の軍は更に西へと行軍していく。

進めば進むほどに異国情緒が深まっていくのが趣深い。見慣れぬ衣装、珍しい料理、不思議な香草の匂い。これらを楽しみながら最後に小さな砂漠を越えると「草原の国」、彼ら自身の言葉で言うな

らワレギア王国に到着する。

皇軍が帝国内を行軍する目的は二つある。一つは帝国領の辺境にまで出て、未だ帝国に従わぬ蛮族達を掃討し帝国の領土を護ることである。そして、もう一つは帝国内の諸国王を訪ね彼らと親睦を深めることである。

しかしこんな目的とは関係なく、ゲルガンドはワレギアを訪ねてその王ガルムフと会うのが愉しみだった。七歳年上で、豪放磊落なこの男をゲルガンドは実の兄のように慕っていた。

ワレギアの民は遊牧民である。狼や蛮族から羊などの家畜を守らねばならない彼らは、一様に猛々しい。女も時に放牧に出るから、皆馬を操るし女用の独特な剣を使う。そんな勇猛果敢な民に王として君臨するガルムフを手本に、帝国軍の将軍となったばかりのゲルガンドは人を率いることの基本を学ぶことが出来たのだった。

ガルムフの方もゲルガンドを親友として遇した。ワレギアは彼の父の代に、それまでの旧い信仰から「河の信仰」に改め帝国に帰順した。とはいっても、彼の父も彼も、蛮族から牧畜地を守るためには帝国に従っておいたほうが効率的だと判断したからそうしたに過ぎない。

それなのに、帝国府から定期的にやってくる役人達は揃ってガルムフにとって鼻持ちならない者ばかりだった。伝統的な、そしてこの土地を暮らすための知恵が一杯詰まったワレギアの風俗を頭から野蛮と決め付けて何かと見下す。誇り高く血気盛んだったガルムフは、ゲルガンドの知己を得るまで何度帝国に反旗を翻してやろうと思ったかわからない。

しかしゲルガンドは違った。彼は「河の信仰」を守る皇帝の血筋にあるにもかかわらず、帝国府の役人と違い、何の偏見もこだわりも無くワレギアの伝統に敬意を払う。無礼にならぬ程度に好奇心を持ってあれこれ訊ねてくるのもガルムフには好感が持てた。

お互いに相手の存在に好感を抱くと、そこから親しくなるのに時間は掛からなかった。二人とも狩りや武芸の試合が好きで上手かった。昼は二人で身体を思う存分動かして楽しみ、夜は酒宴で腹を割って話し合う。「森の国」の、特に皇宮の静かで畏まった雰囲気、堅苦しく感じるゲルガンドは、こういった日々が本当に愉快でたまらなかった。それで何度か酒席で「このままワレギアの民になっしまおうか」などと冗談を言ったこともある。

——そう、自分がそんな冗談を言っていたから、あんな話が出たのかもしれない。

ゲルガンドは、窓外からリザ皇女の顔に視線を移した。彼女はぱつと顔を輝かせると、微かに頬を染めながらより一層楽しげに喋り続ける。しかし、ゲルガンドは彼女を見ながら、皇女と一歳違いのワレギアの王女について思いを馳せていた。

ガルムフには二人の子どもがいた。十四歳のティードリア王女と九歳のダルン王子である。ゲルガンドはこの姉弟を知っているが、母親には会ったことがない。美しいことは姉弟からみて容易に想像がつく。だが、ガルムフや二人の子どもとゲルガンドが同席している場に彼女が姿を現すことはなかった。

帝国府の役人の報告によると、彼女は王家に比肩するほど有力な部族の出だという。そしてその部族は古よりワレギアを支えてきた「精霊の信仰」の巫女を出す血筋らしい。ワレギアでは死者は自然

に還り、草や木、風の精霊となる。そうやって子孫の草原の民を守ってきたのだと、そう信じられていた。

その部族の娘が王妃となったのは、まだガルフが若い頃にその美しさに恋して妻に迎えたからだと聞く。しかし、その後ガルフの父が旧い信仰を捨て新来の「河の信仰」に鞍替えしてしまった。そしてガルフ自身も。

もつとも、ガルフがゲルガンドに悪戯めいた目で明かしたことがあるように、その改宗は単に帝国を利用するための政治的なものに過ぎなかったのだが。しかし、以来夫婦の間には深い溝が出来たようだった。

この亀裂は単に王夫妻の間だけにとどまらない。ガルフは多くを語らないが、帝国府の調べによるとこの国の旧教と新教の対立は深刻だった。特に有力部族には王家のこの決定を承服できない者が多かった。中には反乱を企てた者もいた。

先王もガルフも反乱者に手厳しかった。王家が新教を選んだのは、外部の蛮族から自国を守るためだけでなく、王の選択に付いていけない国内の有力部族を叩いておくという理由もあったのだろう。そうゲルガンドは推察している。

そして血生臭い粛清は、血を流す報復を呼び寄せ、報復は更に報復を呼ぶ。関係者に緘口令が敷かれ、その死の説明をいくら取り繕おうとも、このところ新教と旧教の間で私刑や暗殺の応酬が繰り広げられていることは誰でも察知することができた。

ゲルガンドは帝国の領内のあちこちで似たような争いを見聞きしている。土着の旧い信仰と帝国のもたらす新しい信仰のせめぎあう

様を。その度に彼は思うのだ。その争いの根深さを。

どの信仰もその地で暮らす生活と密着したものだ、と彼は思う。土着の信仰は、長い長い年月、彼らが現実生活に生活する世界に意味を与え、彼らの生活に秩序と安定を約束してやり、そして代々のその民の願いを反映して編み出されてきたのだ。そう簡単にあつさりとは捨て去ることができないものではない。

ある日、彼はガルムフに言ったことがある。

「もう少し旧来の信仰にも気を配った方がよくないか？　ここはラクロウ河からずっと離れている。『河の信仰』は河を眼前に暮らす民なら自然なこととして受け入れられるが、河など見たことのない草原の民には俄かに身近なものとは感じられないだろう」

「皇帝の従兄弟がそれを言うか」

ガルムフは笑いながらゲルガンドの杯に酒を注いだ。そして焚き火越しに地平線の彼方を見つめて呟いた。

「世界は変わる」

「……………」

「帝国の庇護の下、いろいろな国が交易によって結びつき豊かになつていくとしている。ワレギアの羊や山羊、それから出来る毛織物も帝国府に買い上げられることで金銭に代わる。この金銭は貯めておいても腐らないし、何だつてこの金銭で購うことができる。もうワレギアの民はこうやって金銭を稼いで他国の便利なものを買う暮らしに馴染み始めている。もう後戻りはできない。帝国とともに生きていくしかワレギアの道はない」

「……………しかし……。ガルムフ、君の家族だつて……………」

「妻のことはあきらめている」

ガルフは首を振りながらもきっぱりと言い切った。

「だが、君自身の幸せは……」

「あれと楽しく暮らした時もあった。しかし俺は王だ。自身の幸せより民の行く末の為に生きなければならない。ただ……」

ガルフは顎の髭に手をやる。

「もつとも。自身と民の幸せ、この二つは必ずしも相反するものではない」

そう言った後、今度はゲルガンドの目を真っ直ぐに見つめて言った。

「ゲルガンド、お前、ティードリアを妻に迎える気はないか？」

「……ティードリア姫とは年が随分離れていると思うが……」

ガルフの唐突な提案にゲルガンドは戸惑う。けれどもガルフの表情は真剣だった。それは娘を案じる父親の顔だった。

「十二歳差か。しかしティードリアは同じ歳の娘に比べれば心はずっと大人だ。もつともそれは俺達両親のせいもあるだろうが……」

ティードリアは優しい響きのその名に反して、少々お転婆なところのある娘だった。草原を馬で駆けたり、ワレギアに伝わる女物の剣を振るうことを好む活動的な少女だ。しかし、幼い頃から両親の不仲に胸を痛めて育ってきたせいか、じっくり話してみると複雑な葛藤を抱えているところが確かにある。

「両親のせいというより、彼女が王女として責任感が強いからではないか。さすが父王のよき薫陶を受けただけのことはある……」

ゲルガンドは自分を責めるガルフを慰めながら、自分の所感を述べる。

二年ほど前、いつもと同じく、ゲルガンドを迎える宴に王妃が出席するか否かで国王夫妻が揉めたことがあった。ワレギアの生活は天幕と共に移動する牧畜中心で、王の居城といってもあまり大きくはない。諍いが起きれば不穏な雰囲気は客人のゲルガンドにも伝わってくる。

彼は、ガルフに申し訳なく思いながら外に出た。そして、やはり庭の隅の大木に寄りかかっているティードリアに会ったのだ。

「済まないな、ティードリア姫。私は君のご両親に迷惑をかけてしまうようだ」

悄然としている彼女に彼は声を掛けた。彼女は慌てて姿勢を正した。

「そんなことはありません。父は貴方がおいでになるのを本当に楽しみにしています。私だって、こちらとは違う剣技を教えていただくのが楽しいです。貴方は父の友人として訪ねて下さるのに、母は少し帝国の方を警戒しすぎていて……。申し訳ありません」

大きな緑宝石のような瞳に憂いを浮かべながらも、彼女はゲルガンドを気遣う答えを返した。

「いや。貴女の母上のご実家は旧教に熱心だと聞いている。人にとって信仰は大切なものだ。そうやすやすと手放せるものではあるまい」

「新教の守護者たる皇帝の従兄弟にそういつていただけると……助かるのですが……」

彼女は軽く笑んだが、その微笑はすぐに消えてしまった。そして眉間を寄せて先ほどより一層憂いの色を深め、長い指をすっかり胸の前で組み合わせて彼女は呟くように言った。

「私の両親の諍いだけではありません。国中に争いの気配があります。新教と旧教と。お互いにお互いを罵り始めている……もし、血が流れる事態が生じれば、憎しみが憎しみを呼んでこの国は血まみれになってしまうことでしょう」

聡い娘だ、とゲルガンドは思った。いや、聡くならざるを得なかったのか。子どもというのは父親も母親も同じく慕う。旧教を守りこれまでどおり秩序だった生活を送りたい母親の願いも、新教の切り開く未来へ国を押し出してやらねばならない父王の義務も、この娘は双方十分に理解し受け止めている。そして、この対立は自分の家族だけでなく国全体の問題であり、いつかはこの国を悲劇の淵に押しやりかねないことも、この娘は分かっているのだ。

可哀想に。ゲルガンドはその時まだ十二歳だったティードリアの顔を見つめた。普段は馬を駆って草原の中を走り回り、彼から教わった剣の技を試してみても屈託の無い笑顔を見せる活発な少女なのに。その一方でこの娘は、年々深刻さを増す夫婦の確執に心を痛め、国の悲劇を予感して苦しんでいる。

「君一人で何もかも解決しようと思わないことだよ、ティードリー

ア。父王も母王もそれに家臣たちも、この国の未来を考えるべき大人は大勢いるんだ。大丈夫だよ」

ゲルガンドは彼女の頭をなでてやった。ティードリーアははにかみ、その顔は年相応の少女のものに戻った。その落差に一層、彼女は不憫なほど聡明に育ったのだと彼は思ったのだった。

「そのとおりだ、ゲルガンド。あの娘は聡い」

ゲルガンドの二年前の回想を聞き終えたガルフは溜息をついた。

「ダルンの方も十分賢いがまだ幼い。あれも国のことを心配はしているけれども、まだまだ父を頼りきっている年齢だからな。私がないとかすると思っているだろう。だが、ティティの方は賢い上に強い。自分がすっかりして、王女として姉として何とかしなければと思いつめているようなところがある」

ティティというのはティードリーアの愛称だ。こう口にするときガルフの目に娘への愛情が滲む。

「俺は帝国の中にこそワレギアの未来があると思っている。ティティがお前に嫁げば安心だ。しばらくワレギアは落ち着かないかもしれないが、嫁げばあれも自分の人生に忙しくなってワレギアを案じる暇はなくなるだろう。それに聡明なティティなら皇帝家の親族となっても上手くやっていけるだろうし、それはワレギアの国益に適う」

「……政略結婚というわけか」

ゲルガンドは少し眉を顰める。

「ティティは責任感が強い。どこにいても自身の使命を追求しようとする。それなら、旧いものとの血塗られた抗争より、新しい未来を切り開くことにその王女としての使命感を活かして欲しい。その方がずっと幸せだろう」

「……………」

確かにこの皇帝の従兄弟である自分の妻であれば彼女の将来は安泰だろう。皇帝とその周囲は近年、各国の王家を蛮族上がりと軽んずる傾向を見せているが、ティードリアなら少々風当たりが強いくらい耐えられるだろう。むしろその聡明さで皇帝達の根拠無き偏見を正してみせるかもしれない。自分が彼女のような賢く強い妻を迎えるのは帝国全体にとってもいいことなのかもしれない。ゲルガンドの頭にそんな考えが浮かぶ。

ガルムフは黙っているゲルガンドに更に言葉を掛けた。

「それにお前は妻を大事にするに違いない。お前のような男ならティティをやってもいい」

しかし、ゲルガンドが彼の顔を見ると、そこには娘を嫁がせようとする父親の複雑な心境がありありと浮かんでいた。

「無理をするな、ガルムフ。君の顔に寂しさが滲んでいるぞ」

ゲルガンドが肩を叩くと、ガルムフは決まり悪そうに酒盃を仰いだ。

「まあまだティードリア姫は十四歳だ。まだ早い。この話は考えておく。君はしばらく愛娘との時間を楽しんでおくんだな」

ガルムフも本音では娘を手放したくないのか、それ以上ティードリアとの結婚の話は出なかった。

ただ、ティードリアには何らかの話がいつていたようだった。いつものように無邪気に馬や剣の話で纏わりついてくるのがこの時はなかった。それどころかゲルガンドと目が合うと、恥じらいながら顔を伏せるのだった。

——まだ十四歳。

しかしながら、彼女は少女期を脱して乙女の仲間入りをし始めている。それはゲルガンドにとって不快なことではなく、微笑ましいものだった。もう少し彼女が大人になったら妻に迎えてもいいかもしれない。彼女に与えられることのなかった暖かい家庭というものを、彼女と自分とで築いていく。それは親友のためでもあり、彼にも彼女にも楽しいことのように思われた。

「何を考えているのですっ！」

少女の金切り声にゲルガンドは我に返った。目の前でリザ皇女が立ち上がっていた。荒々しく立ち上がったせいか、卓の上では茶器がひっくり返っている。頬を紅潮させ、目を吊り上げて皇女はゲルガンドを睨みつけていた。

「失礼を致しました」

ゲルガンドも立ち上がり、右手で左胸を押さえて頭を下げた。身分の低いものが高貴な者に対してとる敬礼の仕草だ。確かに自分が悪いとゲルガンドは思った。皇女に対していうのではなく、たとえ相手がただの十三歳の少女だとしても話の途中に全く違うことに長々と気をとられてしまうというのは、相手に対して誠実ではない。

皇女はゲルガンドの礼を受けると、満足げに頷き再び椅子に腰をおろした。ご機嫌はなおったようで、侍女に新しくお茶を持ってくるようにいつける。ゲルガンドはうんざりしたが、今の無礼を詫びるためにも更にしばらくこの皇女のお茶会につきあってやらねばならないと諦めた。

その時、若い男の声が二人に届いた。

「元帥はお疲れなですよ」

二人がドアから入ってきた男に眼を向ける。皇女の母の弟、皇女にとつては叔父にあたる、そして帝国軍にあつてはゲルガンドの軍吏を務めるホイガ侯爵だった。

ホイガは丁寧二人に礼をとり、皇女に諭すように言った。

「今日はもう元帥にはお休みいただかないと。そうそう臣下をこきつかうものではありませんよ。皇女様」

皇女はお行儀良く叔父に従う。

「そうね。では今日はゆっくりお休みになつて。ゲルガンド元帥」

ゲルガンドはこの時心からホイガに感謝した。この男が後々大きな厄災を自分の人生に持ち込んでよかったとは、この時のゲルガンドには思いもよらないことだった。

皇女の切望

その夜。リザ皇女は叔父のホイガと共に父帝の私室を訪れた。そして父帝に真剣な面持ちで頼みこんだ。

「お父様。お願いがございます」

「なんだね、リザ。珍しい」

リザには幼い頃から周囲に侮られまいと優等生を演じる傾向がある。そんな娘を日頃痛ましく思っていたスヘイドは、久しぶりの愛娘のおねだりに、どこかほっとする気さえしていた。

しかし――。

「お父様。私、ゲルガンド將軍と結婚したいのです」

「……………」

スヘイドは驚きのあまり暫し絶句したが、やがてくすくす笑ってまだ幼い娘に請け負ってやった。

「いいとも、リザ。お前が結婚相手を選ぶ年齢になれば、真っ先に彼に声を掛けてやることにしよう」

今日のゲルガンドはなかなかの美青年ぶりだった。まだ幼い姫がのぼせ上がってしまうのも仕方あるまい。まあ、時がたてば熱も冷めることだろう。

「私、本気です」

ピリリと何かを切り裂くような、リザの決然とした声に、スヘイドは思わず愛娘の顔を見返す。確かにこの表情は本気だ。「また今度」などという誤魔化しを容れる気は全くない。今すぐここで婚約まで整えなければ許せない、とても言いたげな顔でスヘイドを睨みつけている。

スヘイドも真面目な顔に戻って説き始めた。

「リザ。お前はまだ十三歳だ。結婚など考えるのはまだ早い。それに相手は二十六歳だ。年齢が離れすぎているだろう」

スヘイドは父として当然のことを諭す。

「お父様。あの方以外の方を夫にするなんて私には考えられません。今まであれほどまでにトウオグル帝にそっくりな方などいましたか？」

娘が画中のトウオグル帝に寄せている想いは、スヘイドも分かっている。しかしそれは少女の甘い夢だ。現実と夢とは違うのだ。それをどう説明してやったものか……。そう思案しているスヘイドに構わず、リザは畳み掛けるように言う。

「それに。お父様。私はもう子供ではありません。私も自分の将来についても思いをめぐらすことだってあるのです！」

ここで皇女の中で何か激するものがあつたのか、開いた口をわななかせながら少しの間言葉を探した。そして見つからなかった苛立ちをそのままに小さく、けれども鋭く叫ぶ。

「皇帝になりたい！ でも、皇帝なんか嫌！」

皇女は両手で顔を覆って俯く。

「リザ……」

スヘイドは一層驚く。この娘はひたすら未来の皇帝を目指していた。幼子の頃からこんな駄々っ子のよ
うな態度を取ることはなかった。それなのに……。目を見張る父帝
に向かって、皇女は再び顔を上げた。その目からは涙が幾筋も流れ
ていた。

「お父様。私、皇帝になりたい。皇帝になってお母様の名誉を回復
したい。そしてこの皇宮の誰からも軽んぜられたくない」

「わかってるよ、リザ。お前がそのためにどれだけ懸命に取り組
んでいるのかも」

「でも……、でも……」

再び皇女の声が震える。

「皇帝の生活なんて……。この皇宮から一步も外に出ることも出来
ないのよ、それも一生。そしてお父様とホイガ叔父様の他は、皇宮
の中に居るのはみんな私の敵ばかり。そんな中で飾り物のように
生きていくなんて……そんなの……」

「飾り物、などと……」

「お父様が以前、そう仰ったのですわ」

確かにそんな愚痴を娘に零してしまったことがあったかもしれな
い。スヘイドは悔やむ。

「でも、お父様には、単調で息の詰まる生活をも耐えるための支え

があるのだ、とも仰っていました」

「……………」

「恋の思い出。お母様との恋があったから、そう、その思い出が今も傍にあるからお父様は生きていけるのだ。そう言っておられたわ」

確かに。皇帝の位についての愚痴は零しても、この娘に母親についてだけは悪く言ったことはない。そして、リザが知っていることの九割方は真実だ。一割の欺瞞を除けば。

「だから、私もずっと恋人が欲しかったの。お父様がお母様を得られたように、私も素敵な夫君が欲しい。絶対に欲しい」

皇女が眦を決して言い募る傍から、ホイガがそつと皇帝に歩み寄り囁くように言った。

「皇帝陛下。恐れながら申し上げます。リザ皇女の御夫君となられるのにゲルガンド將軍より相応しい人物はおりますまい」

そしてホイガは含みのある表情でスヘイドを見つめる。ホイガが言外に込めるものはスヘイドにもすぐ分かった。

これまでゲルガンドをリザから皇位を奪いかねない危険人物だと考えてきたが、この二人が結婚すれば問題は一気に解決する。

——それでホイガもリザについて私の部屋まで来たのか。

先にリザから「ゲルガンドと結婚したい」と聞かされていたら、止めてもよさそうなものだ。それをわざわざリザと今こうやって来たのは、この結婚の持つ政治的な意味を伝えたかったのだ。

二人の大人の沈黙に、皇女が不審そうな顔をする。ホイガは慇懃に話を続けた。

「私は長年ゲルガンド將軍の軍吏としてお仕えして参りました。あの方自身を一人の男として評価するならば、真面目で誠実な方だと申せましょう」

だから帝国軍内でも人望があり、皇女から皇位を奪おうとする者達もこぞって彼にすりよっていくのです。ホイガは目だけでスヘイドにこう説明する。

「妻を迎えられたらきつと大切になさる方です。間違っても他の女に心を動かされるようなことはありませんまい」
「でも、急がなくては困るわ！」

皇女が割って入る。

「だってゲルガンド將軍はもう二十六歳なんですもの。先に誰かと結婚なんてしてしまったら……」

「わかった……」

スヘイドは大きく息を吐いて言った。

「急ぐにしても今日明日に彼が結婚するわけではあるまい。だから今日はもうおやすみ、リザ」

それでもリザは不満そうな顔をしている。

「では。明日一番にお前の意向をゲルガンドに伝えておこう。これで彼に他の女性との結婚話などなくなるだろう」

ホイガがやはり抑えた声で言い添える。

「皇女様の有難きご意向を聞いてなお、他の女と結婚しようとするなら…… 皇帝に対する叛意あり、と看做されても仕方ありませんな」

スヘイドとホイガが胸中で思うことは同じだった。これでゲルガンドが皇女の伴侶となることを選ぶならよし。選ばないというなら、その断り方によっては帝国への反逆者として葬り去ることができる。

腹の中の思惑など表にださず、父は娘に優しく言い聞かせた。

「さあ。これで大丈夫だ。もうお部屋に戻っておやすみ、リザ」

リザは少し口を尖らせていたが、ともかくこれで当面ゲルガンドが他の女と結婚することは無いと思って納得した。それでもホイガと共に皇帝の私室を退出する間際、父の方を振り返って自分のおねだりに念を押した。これくらい愛くるしい顔をすれば父親は自分の要求を拒むことができないであろう、という自信たっぷりの笑顔で。

「私、あの方を夫に欲しい。絶対に欲しいの。そして幸せになりたい。お願い。お父様」

悲劇の皇妃

——どうかリザを幸せに。お願い申し上げます。

スヘイドの脳裏に優美な女文字が浮かぶ。最愛の妻が彼に最後に遺した手紙。その手紙はその言葉で締めくくられていた。

娘を自室から送り出した彼は、溜息を一つついてから文机に足を向けた。机上の隅に、細かい細工の施された象牙の小箱がある。彼はその蓋を開けて、中から古びた羊皮紙を取り出した。縛ってある紐を解き、巻かれた紙を開くと懐かしい妻の筆跡が現れる。スヘイドは一瞬瞑目し、胸を衝く悲しみと後悔に深々と嘆息した。

その優美で繊細な筆の運びが示すとおり、スヘイドの妻、ペイリンは美しくそして心優しい女性だった。ペイリンとリザの顔立ちはよく似ている。ただリザの瞳と髪が黒いのに対し、妻の方は瞳も髪もごく淡い色で、全体の風貌もどこか儚げなところがあつた。

「森の国」の皇都で、皇帝に直接仕える貴族を「廷臣」と呼ぶ。廷臣の子女は、皇宮に参内して皇帝達の身の世話をする。

その中でマルレイ家のペイリンは大変な美少女だった。しかし本人は、美しく生まれついたことさえ恥じるかのように、人の影にひっそりと隠れて穏やかに過ごしたいと願う、そんな慎まやかな少女だった。そして、皇太子だったスヘイドが彼女に興味を持ったのもその外見の美しさだけではなく、時折交わす会話にあらわれる彼女の心の美しさだった。

この可憐な女性は繊細な感受性を持つ詩人だった。重苦しく閉鎖

的な皇宮の中での単調な生活にあっても、彼女はそこかしこに美や不思議を見出した。

朝、曙光が部屋の中に満ちていく荘厳な様子。日が暮れて空が董色から紺、群青そして黒へと移り変わる神秘的な姿。窓外の景色に見られる季節の微妙な移ろい。梢の上で繰り広げられる小鳥達のささやかながら懸命な営み。

彼女は、自分と同じ退屈な皇宮の中に居ながら、全く違う世界をその瞳に映して過ごしているようだった。スヘイドは彼女の何気ない言葉に豊かな発見をよくしたものだ。

皇太子としての自分の重苦しい生活の中、スヘイドは彼女と他愛のない話をする時間が本当に楽しかった。そのうち彼の中では、その時間は単なる息抜き以上のものとなった。息抜きどころか、彼女とそんな時間を過ごすために自分のつまらない生活があるのだとさえ思うようになったのだった。

皇帝などつまらないものだ。スヘイドのこの考えは昔も今も変わらない。そして本来の自分自身もつまらない人間なのだと思っている。皇宮から一步も外に出ずに育ち、武芸も学芸も嗜み程度にしか身につけていない。

皇宮の貴族達の中には、自分を平凡な人間だと軽んじ従兄弟のゲルガンドこそ皇帝に相応しいと思っている者がいることを、彼は知っている。だが、そうだろうか？ ゲルガンドとて自分と同じように将来の皇帝としてこの皇宮の中で自分と同じように育っていれば、私のように平凡でつまらない人間になるというものではないのか。

それでも自分には、凡庸ではない自分になれる時間があつたのだ。

そう、それこそペイリンと過ごす時間だった。スヘイドは再び甘い思い出の中に沈んでいく。

美や不思議に敏感な彼女は若き皇太子の変化にすぐ気付いた。初めて恋をする若い青年の物憂げな様、熱っぽい瞳、情熱と怖れの間を不器用に揺れ動く姿。当時彼女の傍にあつて、これほど不思議で美しく詩的なものは無かつただろう。彼女の心はすぐ応えてくれた。彼と同じようにぎこちないものではあつたけれども。

初めて彼が自分の気持ちを伝えたとき、彼女の淡い色の瞳は激しく揺れ動いた。彼がそれを言うと、彼女は頬を染め「それは私の心の震えなのでございましょう」と小さな声で返した。この日からこの二人は若い恋人同士となった。互いの瞳に互いの姿を映しているとき、彼らはこの世界でただ一人、かけがえのないたった一人の大切な存在になれたのだった。

彼女を正妃とするために五年以上掛かった。ペイリン自身は正妃になどなりたがらなかつた。自分は愛妾でもよいのです、とまで言っていた。それでも彼は彼女を自分の妻として公の立場に置きたかつた。

しかしながら皇帝の妻は、帝国領内の王家から迎えるのが慣例だった。領土と民とを持つ各国の王族に比べれば、皇帝の私的な臣下である廷臣は比べ物にならないほど格が低い。そんな身分の低い出自の女性をゆくゆくは皇后として頂く――このことに対する反発は彼が思っていた以上に大きく、そしてその問題の根は予想以上に深かつた。

まずマルレイ家を除く貴族達の猛反対があつた。廷臣の娘が皇后などそんな例は過去にない。ペイリンが皇后になるなら、廷臣の中

でマルレイ家だけが特別な地位に成り上がることになる。そのようなことは到底納得いかない。彼らは彼らの立場から見ればごくまっとうな憤りの声を上げたのだった。

そして帝国領内の諸王国も、濃淡に多少の差はあれ総じて不快感を露に示した。今まで皇帝は諸王国の中から皇后を迎えてきた。皇族達も、各王家に妻として下向したり、王家の姫を妻に迎えたりしている。このように皇帝家と諸王国は婚姻関係で結びつくものとされている。

しかし、皇太子はこの不文律を破ろうとしている。よりによって帝国中で最も高い位にある皇帝の妻に、王族の姫君達をさしおいて廷臣の娘などを据えようとしている。帝国は諸国の王をないがしろにするつもりか。次々に皇都に到着する諸王国からの使者はそう訴えた。

事態はもう帝国の存立を揺るがす政治問題になりつつあった。それでもスヘイドは頑として譲らなかつた。皆、皇帝をなんだと思っているのだ。彼には彼なりの怒りがあつた。皇宮の中で「海の源流」の傍に控えて過ごすだけの人生に何の喜びがあるというのか。皆は自分を未来の皇帝として特別扱いするが、自分がこの世界で特別だと実感できるのはこの愛しい妻といるときだけだとは言つのに。

スヘイド皇太子に結婚を許したのは思いがけない人物だった。スヘイドの父、第十六代皇帝シャルメルである。シャルメルとスヘイドは通常の親子よりもずっと年が離れていたせいもあって、それほど心通じるところがあつたわけではない。それどころかいつも寡黙な父帝をスヘイドは敬遠していたところがあつた。

父帝より皇宮内の私的な謁見室に呼ばれた時、スヘイドはこれは

ペイリン立后に反対されるのだと考えた。

彼は重苦しい気持ちで部屋に入ったが、その謁見室も老帝の厳しさを反映する雰囲気満ちていた。

現在の皇宮は「石の国」より献上された最上質の石で造られている。しかしこれ以前は伝統的に「森の国」の主な建物は木で造られるもので、今も神官達の住居は木造だ。

皇帝として目ばしい業績を挙げぬまま老境を迎えたシャルメルは、近頃「古例に倣え」と盛んに言うようになった。そして石造りの皇宮の中でも、重要な場所には、黒い森から古い巨木を召し上げて、内装だけでも木を用いるようにしたのである。

謁見室の古木を磨き上げた重厚な椅子の中に、それに負けないほど厳しい顔つきの老帝が座っていた。スヘイドは彼の椅子の前に跪いて礼をとる。

「父上様。ご健勝そうでなによりです」

「スヘイド。今日はお前に話したいことがある」

「何のことでしょう。もし……もしペイリンとの結婚のことでしたら私は意志を曲げるつもりはございません」

勢い込んで一息でそう言い放ったスヘイドを見て、シャルメル表情が崩れた。皺に埋もれた老皇帝のその表情が怒っているのか笑っているのか、スヘイドにはわからない。しばらくあってから、老帝は表情を整え、重々しく言葉を発した。

——皇帝は最早、霸道より離れたるものである。

スヘイドには意味がわからない。その謎の言葉も、父の口からで

はなく部屋のどこから湧き出てきたもののように感じられた。スヘイドは視線を部屋の中に彷徨わせ、困惑した顔で再び父帝を見た。

老帝も今度はしっかりスヘイドに視線を絡ませ、言い聞かせるように言った。

「皇帝とは覇道を歩むべきものではない」

「あの……？」

「古の世には『河の信仰』を知るものが少なかった」

「え？ ええ……」

訳が分からず、スヘイドにはただ頷くことしかできない。

「『海の源流』の神官達から皇位を授けられても暫くは皇位の神威は十分伝わらず、トウオグル帝以下上代の皇帝は版図を広げるためには武力や計略を用いざるを得なかった」

「あのう……」

スヘイドが老帝へ話しかけようとする。老帝の話は先が全く見えない上、今までの話にも違和感が拭えない。通常ならば、聖祖トウオグルをはじめとする上代の皇帝たちの武勇や計略に長けた様は、英雄譚として褒め称えられるものだ。それなのに父の言いようは……。

「おそれながら父上、今の仰りようでは古の皇帝の業績を貶しているかのようにも聞こえてしまいます」

「貶めるつもりはない。当時は仕方なかったのだから。古代には『河の信仰』という真実は知られていなかった。故に皇帝自らが剣を振るって血の穢れを直接浴びたり、諸国の王族と婚姻関係を結ぶという計略を用いなければならなかった」

スヘイドは黙る。今まで歴代の帝の業績は賞賛されてばかりだった。けれども言われていれば、父帝の指摘も一理ある。『海の源流』を守る神官達に位を授けられた皇帝が、自らの手を汚したり、他王と誼を通じるのに腐心したりというのは、皇位の神聖さを鑑みれば相応しい行動とは言えない。

スヘイドが床に視線を落とし自分の考えを纏める様をシャルメルはしばらく眺め、そして頃合を見計らって続けた。

「しかし。今や時代が変わろうとしている——」

スヘイドは顔を上げた。そして老帝を無言で見詰める。

「帝国は既にこの世界の主要な国々を支配下におさめた。辺境に取るに足りない蛮族が少々残っているが、このようなものは傍系の者に始末させれば良い。事実、皇帝自身の親征など十一代皇帝の頃よりずっと絶えている」

それに——。シャルメルが次第に熱を帯び始める。

「『河の信仰』は帝国中に普く行き渡っている。各国の王からは国の公の信仰を改める旨誓約書を出させている。古臭い迷信が残ることもあるが、もはや『河の信仰』の敵ではない」

老帝は肘掛の上に置かれた両の拳を固く握る。

「今こそ——今こそ、皇帝は本来の姿に立ち戻らなければならない」
そして皺だらけの顔を紅潮させながら、興奮気味にまくし立てる。

「皇帝は『河の信仰』の説く真理の力により皇帝となるのだ。我らの歴史にある皇帝の御業はその真理が未だ広く知られていなかったがために、やむなく採られたもの」

老帝は口を引き結んで続ける。

「神官達から皇位を受けた皇帝は神聖な存在だ。今回、お前の結婚のことで、王族達が自分たちの格がどうのと騒いでいるが、全く笑止」

——結婚。老帝の言う「本来の皇帝の姿を、新しく取り戻す」という主張に聞き入っていて危うく忘れかけていたけれども、スヘイドにとって目下の大事はそれだ。食い入るような目でスヘイドは父帝の言葉を待つ。

「どの王とて最初は蛮族上がりではないか。わが帝国の支配下に入り、『河の信仰』を得て少しは文明的になりはしたが。大体、そもそも『河の信仰』が本当に帝国の領民一人一人の心中に染み渡れば、この信仰の中で敬わなければならないのは皇帝ただ一人であることが自ずと明らかになるだろう」

シャルメルはスヘイドを見て再び表情を崩した。今度は微笑みかけているのだ、ということはスヘイドにもわかった。

「今までは帝国の版図を拡げ、『河の信仰』の真理を広めるために、諸国王に阿るような計略もなされてきた。しかし、もういいだろう。時代は変わった。我らがなすべきことは、皇帝本来の姿を取り戻すことなのだ。皇帝とは神聖で穢れなく諸王家など超越した存在だ。その支配は『河の信仰』の真理により正当性を得る。スヘイドよ」

「はい」

「王族の血などもうこれ以上皇帝家に入れてやる必要などない。皇妃、すなわち次の皇帝の母后は皇帝自身が選ぶべきだ。王族の娘から迎えなければならぬだと？　なぜ神聖なる皇帝がそんな決まりに従わなければならぬのだ？　お前はペイリンを妻とするがよい。そして子が生まれたら宮中で大切に育てよ。外に出して穢れを受けるようなことはあつてはならぬ」

——それが自分とペイリンの結婚を認める理由か。

スヘイドの心の底から、喜びと驚きと嫉妬がないまぜになった感情が湧き起こる。

勿論ペイリンを妻にできる喜びは大きい。しかし、その自分の宿願さえ父帝の思い描く壮大な構想の一部に過ぎない。

スヘイドは父帝をごく平凡な人間だと思っていた。ここ何代かの皇帝と同じく特に大きく領土を拡大するわけでもなく、慣例に従い王族から妻を娶り、その治世に特別なことなど何もないまま老いていく。そして自分の人生もまたそんな平凡な皇帝として終わるのだと思っていた。

ところが父帝は胸にこのような壮大で革命的な——これまでの歴史と捉え方を塗り替えるような思想を抱いていたとは。スヘイドは急に、ペイリンとの結婚しか頭になかった自分が小人物に思えた。そして、知らぬ間にこれ程の構想を企てていた父に取り残されたというような寂しい気持ちと、同じ皇位に臨む者としての嫉妬心とがこみ上げてきたのだった。

シャルメルは、スヘイドに芽生えた嫉妬を煽るかのように更なる

構想を語って聞かせる。

「私はこれを頭の中の構想だけで終わらせようとは思っておらん」

シャルメルはにやりと笑う。

「私が帝国領内から広く文物を集めているのは知っているだろう。それに文字のわかる者、知恵の回る者、好奇心の旺盛な者も」

確かにシャルメルは帝国中の知識を蒐集していた。それらを展示する為、研究する為、それらに携わる者の住まいの為ということで、大会堂の更に下流にかなりの数の建物群を建設しようとしている。スヘイドも、皇宮内の他の者も、これを単なるシャルメル帝の趣味だとぐらいにしか受け止めていなかった。

だが、シャルメル帝は、これは自分の革命の一環なのだと言い始める。

「今の私の主張を現実にするためには、皇帝の神聖さを論理的に裏付ける精緻な理論が必要だ。それから皇帝は、諸国王の報告を待たずとも帝国領内の万物について把握しておくべきだ。皇帝家は今頭脳と情報が必要としている。歴史、地理、法律、動植物から鉱物にいたるまで帝国内の万物を知り尽くし、それらを整理し、その知識を皇帝の下に集約する必要がある。そのための施設を私は建造しているのだ」

スヘイドは感嘆の息を洩らす。諸国王の頭越しに直接帝国領を統治する、そのような中央集権的な帝国という構想を父帝は既に現実のものにしようとしている。父帝はすでに自身を歴史に残す事業に取り掛かっているのだ。

ではこの自分は――。シャルメルに無くて自分にあるもの、それは若さだ。父帝の年齢では自身の革命を全てなし終えることは適わないだろう。端緒を切り開いたのはシャルメルでも、実現するのはこの自分だ。

スヘイドは目を光らせ、胸を張って力強く宣言してみせた。

「では、私は父上の描く皇帝像を初めて実現する皇帝となりましょう。王族ではなく、自分自身が選んだ妻を皇后にすることによって」シャルメルは満足げに頷いた。以来、この父子は皇帝家の歴史を塗り替えるという壮大な目的の元で固く結ばれることとなったのだった。

スヘイドの結婚にかける意気込みは強かった。もはやこの結婚は自分個人の希望ではなく、皇帝の新しい、そして本来の姿を実現するためのものだから。

しかし――。父が死に、妻を失い、娘の成長だけを楽しみに過ごすようになった現在のスヘイドは振り返って思う。これをきっかけに妻ペイリンと自分との間から愛情と信頼が失われ始めたのではないだろうか、と――。

永き眠りの実

「何故もつと毅然としていられないのだ」

めでたく結婚が認められ、婚儀の準備が進むうちに、スヘイドがペイリンを叱責する場面が増えた。そしてそれは、彼が彼女を永遠に失うまでずっと続いた。

勿論スヘイドは、皇帝及び皇太子である自分の考えを、細部に至るまでペイリンに説明している。それなのに彼女はただ困惑するだけで夫となる男の望みの壮大さに感心するでもなく、遠いものでも見るかのような目で自分の顔を見るばかりだった。それがまた彼の苛立ちを誘う。

もっとも、その頃のスヘイドは彼女にばかり構っていらなかった。

すぐ側にいる妻に言葉を尽くして説明しても理解されないのに、遠く離れた地に住む者の方が皇帝家の思惑を察知するというのは皮肉なものだ。諸王の中には、皇都へ優秀な人材を送ることや、その法や歴史の書物、動植物や鉱物の標本を提出するのを拒む者が数多くいた。

特定の領土を伝統的に守ってきた諸国の王にとって見れば、皇帝のやろうとすることは自分の家の庭を土足で踏みにじるような、そんな不快感を抱かせるものだった。

強硬な王達は反乱を企てた。特に蛮族と結んで反旗を翻した東方の国々をねじ伏せるのは厄介だった。そう、この戦で父帝の甥、つ

まりゲルガンドの二人の兄が命を落としたのだ。

草創期に比べれば些細なものとはいえ、この時の帝国にはあちこちで混乱が生じていた。

——だから、妻の異変に気がつかなかったとしても仕方がないではないか。

そう自分に言い聞かせても、一人の男としての自分には何も慰めにはならないまま今に至っていることをスヘイドは知っている。

皇太子妃となったペイリンがあまり笑わなくなったことには気付いていた。ただ、スヘイドは、皇后には威厳が必要なことからそれでいいというくらいにしか捉えていなかった。日常の暮らしの中から詩を見出すという、スヘイドが愛した彼女の美しい癖もすっかり絶えた。それも仕方がない、とスヘイドは思っていた。皇帝が諸王を超越した存在であることを証するため迎える皇后なのだ。いつまでも夢見る娘のようでもらっては困る。

帝国内の諸王の反発だけでなく、皇宮内でペイリン個人に対して小さいが陰湿な嫌がらせがあったことも彼は薄々気付いてはいた。

シャルメルの後、スヘイドの母がよくペイリンを茶会に呼んでいた。この母は遙か北方の王国テロイの出身だった。シャルメル帝を支えて長い間皇后として君臨し、その地位にふさわしい堂々たる風格を備えた女性であった。

スヘイドは、自分の妃は今までのどの皇后よりも威厳に満ちたものであつて欲しかった。かつて彼が愛したペイリンの慎ましやかな性質は、未だ賤しき廷臣の娘という出自を引きずっているようで、

今の彼にとっては疎ましいものに感じられてならなかった。

「母上は立派な皇后だ、お前も見習ってくるがいい」

時には涙を浮かべて流るペイリンを叱りつけるようにして、その母後の茶会に送り出したものだ。

その茶会には、皇族や高位の貴族の妻達も招かれていた。彼女達は皆、諸国の王族の血族であった。その茶会は現皇后を筆頭に、廷臣の娘であるペイリンの立后を喜ばぬ女達がその憤懣を抱えて集まる場であった。彼女たちは、高貴な身分に相応しく大層優雅に、そして実に陰湿なやり口でペイリンの心をさんざん鞭打ったのだった。

この茶会で投げつけられる叱責、皮肉、侮蔑の言葉に繊細なペイリンがどれほど傷ついたことか。ペイリン自身も涙ながらに訴えていたけれども、彼はそれも立派な皇后になるのに必要な試練だと考え、彼女の嘆きをさほど重要なものだと思っていなかった。

彼女に対する敵意は他の形で現れた。彼女宛ての献上品として送られた箱に人間の生首が入っていたり、皇太子夫妻の周りで毒見役の侍従が何人も死んだり。スヘイドは、自分のやろうとしていることが革命的であると認識していたからさほど驚かなかった。だから、そのたびにいちいち涙するペイリンの方のふがいなさが苛立ってしまった。

——だが、最後に妻を破滅に追い込んだこの私なのだ。

今ならスヘイドにも分かる。彼女の破綻に最も責任があるのは自分だ。どんなに辛くても、自分が彼女を支えていれば——彼女の繊細で優しい美質を発揮できるような暮らしを送らせてやっていれば

――。あんな悲劇は起こらなかったのだ。

彼女づきの侍女からその知らせを聞いたとき、彼は僅かに眉を曇らせた。そういえば、最近泣き言も不安も自分に訴えてこなくなつた。だが、しかし……。

未だその侍女の言うことがよくわからないまま、スヘイドはペイリンの部屋と向かった。扉を開けて中に入る。しかし、彼女は窓辺に座つたまま扉の方を少しも見ようとしない。スヘイドは部屋の入りに口で立ち竦む。

部屋に居たのは紛うことなき狂女だつた。髪も結わず寝間着に部屋の敷布を肩に纏つただけの格好で、窓辺に座っている。そして窓辺に止まつた黒い鳥を相手に、まるで相手が人の言葉を理解し、彼女に返事でもしているかのように彼女はか細く抑揚もない声で喋り続ける。

「……でも、もう私には何もわからないの。どこにも美しいものはない。この世界の人々は私を敵だと思つているわ……」

カタカタカタ。黒い鳥が嘴を鳴らす。

「ええ、そうね。そうしてしまつた方がいいのでしょうね。でも……」

カタカタカタカタ……。

黒い鳥に説き伏せられてでもいるかのように、ペイリンは項垂れ、時折頷いてみせる。

「ペイリント！」

スヘイドはやつと妻の名を呼んだ。妻はゆっくりと振り向く。そのぼんやりとした表情に彼は絶句した。彼女の瞳には何の輝きも無かった。ただくすんだガラス球のような虚ろな目で彼女は彼を、まるで知らない他人をみるかのように無言で眺めていた。

彼の前を昔日の幻影が通り過ぎていく——彼が来訪するとバネで弾かれたように彼の許へ飛んできた彼女の姿。暖かい笑顔でいつもの顔。そして彼が何か言う前に、今日一日どんな美を発見したのか目を輝かせて話すお喋りな口。あれはいつごろの話だ。いつからそんな彼女は消えてしまったのだ。

「皇太子殿下。お妃さまはお子様を身籠つておいでです」

最も年齢のいった、老婆に近い侍女が彼に小声で耳打ちした。

「身籠つた当初というのは、心が乱れがちになるものでございます。じきにお鎮まり下さいましょう」

事実、お腹が膨らむにつれて母親としての自覚が促されるのか彼女も常軌を逸するような行動をすることが少なくなつた。

しかし、どんなに正気を取り戻したかのようにみえる時でも、窓辺に訪れるあの黒い鳥が人語を解するのだという主張を彼女は曲げることがなかった。もしかしたら夫である自分よりも、彼女はあの黒い鳥を近しく思っていたのかも知れないとスヘイドは今になってそう思う。

ともあれ彼女はリザを無事出産した。スヘイドが喜んだのは何よ

り赤子の瞳と髪が真つ黒なことだった。

「これはいい。黒い髪と瞳はまさしくトウオグル帝の血をひくものの証。この子の帝位は安泰だ」

そうスヘイドは言った。実際にはリザ皇女の帝位は未だに安泰とは言えなかったのだが。それでも、その時のスヘイドはこう言って妻の出産の疲れをねぎらったつもりだった。けれど、ペイリンは無表情であらぬ方向を眺めているだけだった。

リザ皇女は皇帝家の御子か廷臣の娘か――。リザ皇女をどう扱うべきなのか貴族達の間で議論となった。もちろんシャルメルはきっぱりと断じた。リザ皇女こそ次の皇太子であり未来の皇帝である、と。

皇帝の宣言を以ってしても、リザの幼い頃は、今よりもっと彼女の皇位継承にたいして冷ややかな空気が流れていた。

一方ペイリンは出産の疲れが取れ、ひとまず健康を取り戻したように見えた。スヘイドは、娘が皇位につくためには、両親の自分達が未来の皇帝の親に相応しい威厳を示さなければならぬのだとペイリンに説いて聞かせた。それなのに彼女はスヘイドの言葉には何の関心も示さず、自室で幼いリザとひっそり過ごす日が続いた。

「母親のそなたがそのようです。部屋に籠ってばかりおらず、外宮に出て母娘で堂々とした姿を臣下達に見せてやらねばリザはますます侮られることになる。リザのためだというのに、何故そなたはそれが出来ないのだ」

スヘイドは度々叱りつけた。ペイリンはリザを胸に抱きしめたま

また俯くだけで、何の反論もしてこなかった。

その頃、彼の胸の内にはある疑問が浮かぶようになった。「一体どうして自分はこんなつまらない女を、自分の子の母として選んでしまったのだろう」という疑問が――。

――私は本当にひどいことを。

胸の内にしまっておいたつもりだった。けれどもペイリンが気付かなかったわけが無い。かつて傍近くの若い男の恋情とその美しさを、おののきながらもしつかりと感じ取ってくれた鋭敏な女性なのだから。今の夫となった男の蔑意の籠った視線に、苛立たしげな溜息に、顔を逸らす様子に、彼女は彼の胸中を思い知り深く傷ついていたのは確かだと思う。

その日のことをスヘイドは今でもありありと思い出せる。常の如く部屋に籠りきりのペイリンをそのままに、スヘイドはリザだけを連れ出し二人で昼食をとった。その後リザをリザの部屋に侍女をつけて向かわせ、自分は自分の執務室に戻った時だった。ペイリンの居室に現れるあの黒い鳥が、その日に限って執務室の窓の外に止まっていた。珍しいこともあるものだ、と彼は暫くその黒い鳥を眺めていた。その時。慌しく自室に飛び込んだのだ、あの禍々しい知らせが。

ペイリンのその姿を最初に見つけたのは昼食を運びに来た侍女だという。ペイリンは朝遅く起き、その後もずっと自室に籠ってばかりで、遅めの昼食を自室へと運ばせていた。

「スヘイド様。お妃様が、ペイリン様が……」

彼は無我夢中でペイリンの部屋に向かった。自分や周囲がどんな格好でどんな風だったか動転していて全く覚えていない。記憶にあるのは、彼がペイリンの部屋に入ると、それまで彼女のベッドに屈みこんでいた宮廷医が彼に向き直り、礼をとった後で彼に説明を始めた頃からだ。

「脈もございませんし、瞳孔も開いております。もうペイリン様の魂は海へ還る途につかれたのです。お悔やみ申し上げます、皇太子殿下。なお……お亡くなりになった原因ですが……、ブリヨの実をお食べになったための中毒死だと思われます」

衝撃を受け止めかねて考えのまとまらないスヘイドの耳に、その実の名前は異物のように耳に触った。

「……ブリヨの実……」

「おそれながら皇太子殿下はご存知ないかもしれませんが。この国に育つ植物ではございませんから。ただブリヨであるのは確かです。ほら、そのこのテーブルの上にブリヨの実が成っていたらしい枝と葉、それから実を包んでいた皮が残っておりますでしょう？ このブリヨの実というのは猛毒でございます。ただ口にした本人はさほど苦しむことはありません。眠るように死ぬことが出来るので……その……」

宮廷医は言いよどむ。

「だから何だ」

「その……あの……、ブリヨの実というのは自ら死を願う者が用いることが多いのです。それゆえ『永き眠りの実』などとも呼ばれることもございます」

「……その、ブリヨというのはどこでなら生えているのだ……」

掠れた声でスヘイドは訊ねた。

「……………」

宮廷医は返答に窮していたが、度重なることにはつきりとした詰問になるスヘイドの口調に耐えかねて答えた。

「……北方のテロイ国で主に産出致します」
「テロイ……………」

そこはスヘイドの母、現在の皇后の出身国だった。母が妻に毒を盛ったのか。でも何故……。まさか母は、あくまで臣下の血をひく皇帝など認めたくないからという理由で妻を……。もし……。もしそうなら妻の娘も……。

——まさか！

部屋を駆け出そうとしたスヘイドを、ホイガが押し留めた。姉の死を聞かされて彼もペイリンの部屋に、スヘイドの気付かぬ間に来ていたようだった。

「落ち着いてくださいませ、皇太子殿下。リザ様はご無事でございます。私が先ほど確認致しました。私の部下が今お部屋でお守り申し上げます。どうぞご安心を」
「そうか……………」

ならば母が殺したという根拠は薄まる。でも、どうしてそのような実がペイリンの手元にあったのだ。そしてなぜペイリンは枝に付いたままの実を、ご丁寧に自分で皮を剥いて口にしたのか。あたか

も、それが安らかな死を約束してくれることを知っていたかのように。誰が教えた。誰が与えた。

疑問と怒りと、そして深い嘆きがスヘイドの胸の底から吹き上がる。

「教えてくれ、ペイリン」

彼は彼女の遺骸を振り返った。その瞬間彼は我を忘れた。彼は安らかな顔の亡き妻の体にとりすがり、慟哭した。彼がこれほど取り乱したのは後にも先にもこの時だけだった。

ペイリンは手紙——にしては短すぎるものの——を残していた。上質な羊皮紙に丁寧な挨拶の添えられた、美しい筆跡の文章。しかし、その短く形式的な文面の中で彼女自身の心中を読み取ることができるのはただ一行だった。

——どうかリザを幸せに。お願い申し上げます。

そうだ。リザの幸福はペイリンが死を選ぶに当たって唯一遺した願いなのだ。あの憤まじやかなペイリンがたった一つ最期に遺した望み。私は絶対にリザを幸せにしなければならない。

——リザが幸福になれるのなら。

リザは両親の恋物語を聞くのを本当に楽しみにしてきた。自分も素敵な恋人を、という少女らしい夢を持っている。父としても、あの甘い幸せをわが娘にも体験させてやりたい。今の自分も、ペイリンと幸せだった頃の思い出と、彼女の忘れ形見のリザを支えに生きているのだから。

今後も皇帝の命としてリザの婚約者を選ぶことはできよう。けれども、リザ自身がその者に恋をするとは限らない。いや、ゲルガンドほどの男の後ではどのような男も見劣りしよう。

そしてゲルガンドは私の轍は踏むまい。平凡で退屈な人生しかなく、皇帝家の革命という思想に浮かれて妻を顧みなかった自分とは違い、彼は誰からも賞賛されてきた男だ。彼が妻を忘れるほど何かを渴望するとは思えない。彼がリザに恋をするとは限らないが、幼い妻と、その少女らしい夢を大切に守ってやってはくれるだろう。

時刻は夜更けを過ぎていたが、それには構わず、スヘイド帝は侍女に今からホイガを呼ぶように命じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8874v/>

水の砂漠の魚たち

2012年1月5日19時27分発行